財団法人八尾市文化財調査研究会報告66

Ⅰ　老原遺跡（第９次調査）
Ⅱ　亀井遺跡（第５次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第20次調査）
Ⅳ　佐堂遺跡（第１次調査）
Ⅴ　太子堂遺跡（第７次調査）
Ⅵ　太子堂遺跡（第８次調査）
Ⅶ　東郷遺跡（第54次調査）
Ⅷ　中田遺跡（第36次調査）
Ⅸ　中田遺跡（第37次調査）
Ⅹ　中田遺跡（第38次調査）
Ⅺ　八尾寺内町遺跡（第３次調査）
Ⅻ　山賀遺跡（第６次調査）

２０００年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

正　誤　表

財団法人八尾市文化財調査研究会報告66

		誤	正
序	7行目	Ⅰ・Ⅴ－西村公助、Ⅱ・Ⅷ－古川晴久、Ⅲ－坪田真一、Ⅳ－原田昌則、Ⅵ・ⅩⅠ－高萩千秋、Ⅹ・ⅩⅡ－樋口　薫	Ⅰ・Ⅴ・Ⅷ－西村公助、Ⅱ・Ⅹ－古川晴久、Ⅲ－坪田真一、Ⅳ－原田昌則、Ⅵ・ⅩⅠ－高萩千秋、Ⅶ・Ⅸ・ⅩⅡ－樋口　薫
Ⅰ　老原遺跡第９次調査（ＯＨ97－９）	挿図目次	第４図　検出遺構平面図	第４図　第４層上面検出遺構平面図
Ⅲ　久宝寺遺跡第20次調査（ＫＨ97－20）	図版一〇出土遺物の左上写真		49
Ⅴ　太子堂遺跡第７次調査（ＴＳ97－７）	挿図目次11行目	12区（45～47）　12区・・・	12区３層（45～47）　12区・・・
	62頁28行目	第４層からは土師器小皿（26）、・・・	第４層からは土師器中皿（26）、・・・
	図版四	４区４層（９～16・18～20）４区ＳＰ－401（21）・・・	４区４層（９～16・18～20）４区ＳＰ－401（23）・・・
Ⅵ　太子堂遺跡第８次調査（ＴＳ97－８）	図版目次　図版二	図版二　１区ＳＤ－１（東から）・・・２区ＳＰ－３（西から）２区ＳＰ－３断面（西から）	図版二　１区ＳＤ－８（東から）・・・２区ＳＰ－３（南から）２区ＳＰ－３断面（南から）
	図版五　出土遺物	４　ＳＤ－３　５　ＳＯ－１　７・９・10・13　・・・１区遺構に伴わない出土遺物　35　２区遺構に・・・	２・４　ＳＤ－３　５　ＳＯ－１　９・10・13　・・・　２区遺構に伴わない出土遺物　34・35　３区遺構に・・・
	図版六　出土遺物	・・・　46～52・54・56・59・61・63　４区遺構に伴わない出土遺物	・・・　46～50・52・54・56・59・61・63　４区遺構に伴わない出土遺物
	75頁挿図	第１図　調査区位置図および地区割り図	第１図　調査区位置図及び区割り図
	75頁挿図	第２図　調査区断面模式図	第２図　調査区断面柱状図
	81頁挿図	第６図　１区ＳＥ－１・ＳＤ－５・・・	第６図　１区ＳＥ－２・ＳＤ－５・・・
	図版二	第１区ＳＤ11（東から） 第２区全景（南から） 第２区	第１区ＳＤ－11（東から） 第２区北部全景（南から） 第２区ＳＤ－18（西から）
	図版三	第２区（西から） 第２区（北から）	第２区ＳＤ－18（西から） 第２区ＳＤ－27（北から）
	図版四	第４区（北から） 第４区（北から） 第４区（南から）	第４区全景（北から） 第４区北部（北から） 第４区ＳＤ－29（南から）
	図版五		４　ＳＤ－３　５　ＳＯ－１　９・10・13　１区遺構に伴わない出土遺物　22　ＳＤ－27　25・26・29・30・31　２区遺構に伴わない出土遺物　35　３区遺構に伴わない出土遺物
	図版六		38・44　４区ＳＤ－29　46～50・52・54・56・59・61・63　４区遺構に伴わない出土遺物
Ⅶ　東郷遺跡第54次調査（ＴＧ97－54）	挿図目次	第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/400）	第２図　調査地位置図（Ｓ＝1/400）
Ⅷ　中田遺跡第36次調査（ＮＴ97－36）	114頁挿図	第８図　２区平面図	第８図　２区壁面図
	117頁３行目	南西約200m地点のＮＴ95－30調査地（周辺図⑦註3）	南東約200m地点のＮＴ95－30調査地（周辺図⑦註5）
Ⅸ　中田遺跡第37次調査（ＮＴ97－37）	図版目次	図版四　ＳＰ105（１）、・・・	図版四　１区ＳＰ105（１）、・・・
		図版四　ＳＤ204（９～11）、・・・	図版四　１区ＳＤ204（９～11）、・・・
		図版四　第３層出土遺物・・・	図版四　１区第３層出土遺物・・・
	130頁１行目	４、付記	付記
	130頁９行目	時期的に弥生時代後期の所産とみられる。	時期的に古墳時代の所産とみられる。
ⅩⅠ　八尾寺内町遺跡第３次調査（ＹＣ97－３）	本文目次　頁番号	147　148　148　149　152　169　175	145　146　146　147　150　167　173
	挿図目次　頁番号	147　148　148　150　151　152　153　154　155　157　160　161　162　163　164　165　166　167　168	145　146　146　148　149　150　151　152　153　155　158　159　160　161　162　163　164　165　166
	図版目次	図版　二　・・・西トレンチＳＫ－６（東から）　西トレンチ調査風景（西から）	図版　二　・・・西トレンチＳＤ－１（西から）　西トレンチＳＫ－６（東から）
報告書抄録	副書名　３行目	ⅩⅠ　八尾寺内町（遺跡第３次調査）	ⅩⅠ　八尾寺内町遺跡（第３次調査）
奥付	２行目	Ⅰ　老原遺跡（第６次調査）	Ⅰ　老原遺跡（第９次調査）

財団法人八尾市文化財調査研究会報告66

Ⅰ　老原遺跡（第９次調査）
Ⅱ　亀井遺跡（第５次調査）
Ⅲ　久宝寺遺跡（第20次調査）
Ⅳ　佐堂遺跡（第１次調査）
Ⅴ　太子堂遺跡（第７次調査）
Ⅵ　太子堂遺跡（第８次調査）
Ⅶ　東郷遺跡（第54次調査）
Ⅷ　中田遺跡（第36次調査）
Ⅸ　中田遺跡（第37次調査）
Ⅹ　中田遺跡（第38次調査）
Ⅺ　八尾寺内町遺跡（第３次調査）
Ⅻ　山賀遺跡（第６次調査）

２０００年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、旧大和川が形成した河内平野のほぼ中心部に位置しております。古くから人々の生活の場として適した地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く残っております。

近年の開発工事の増加によって埋蔵文化財が破壊の危機にあります。文化財は私達の貴重な遺産です。そこで私共では、破壊され消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を、後世に長く伝承することが責務であると認識し、開発事業者の御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に務めている次第であります。

今回、平成７～10年度に実施しました公共下水道工事・ＪＲ久宝寺駅舎自由通路築造工事・道路建設・防火水槽設置工事・共同住宅建設に伴う発掘調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

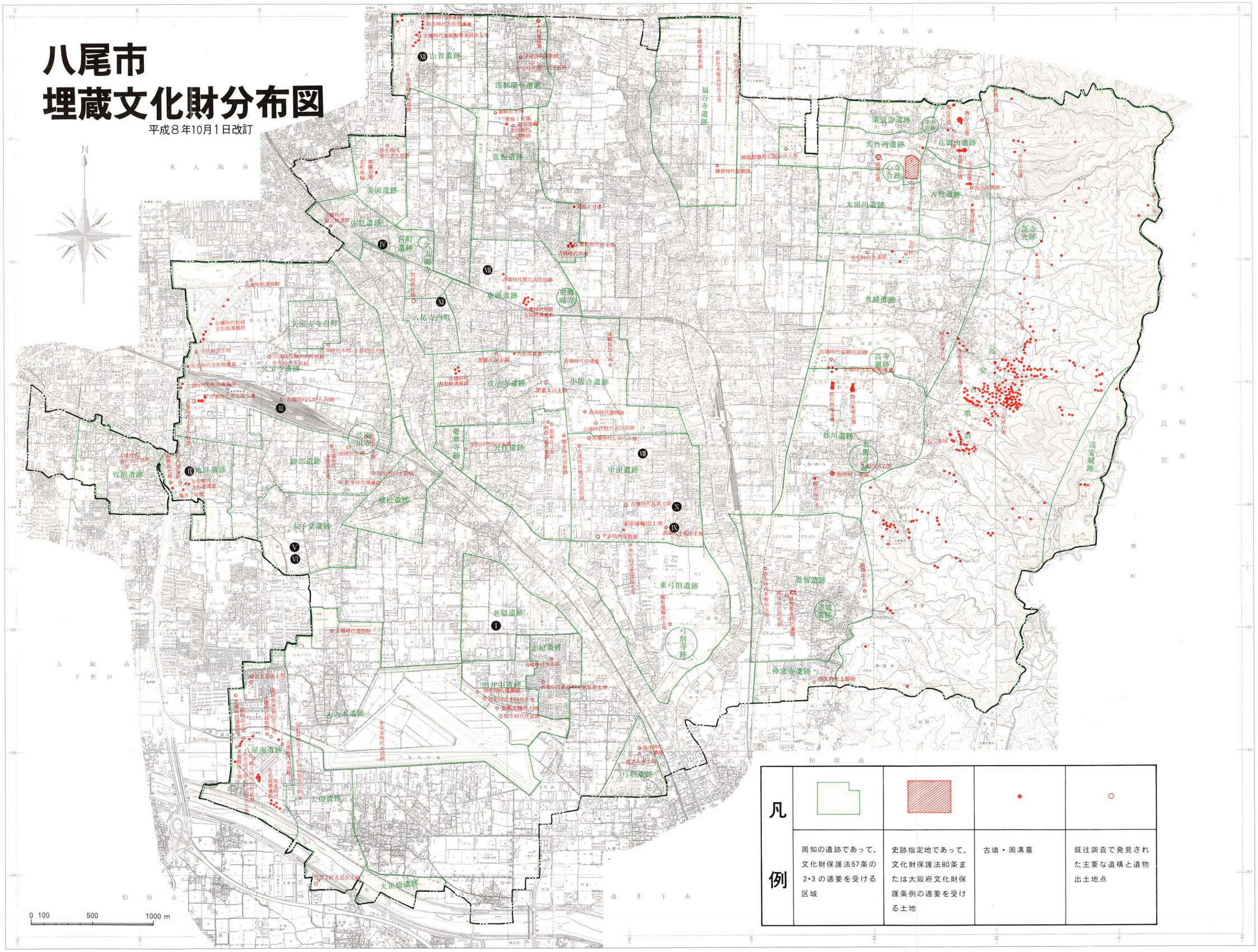
最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝すると共に、発掘調査や整理作業に従事された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成12年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　　木 山 丈 司

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成７～10年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成12年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。

1．本書に収録した各調査報告の文責は、以下の通りである。全体の構成・編集は高萩が行った。
Ⅰ・Ⅴ－西村公助、Ⅱ・Ⅷ－古川晴久、Ⅲ－坪田真一、Ⅳ－原田昌則、Ⅵ・Ⅺ－高萩千秋、Ⅹ・Ⅻ－樋口　薫である。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改訂）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。

1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の座標北を示している。

1．遺構は下記の略号で示した。
井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ

1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪－白、須恵器・陶磁器－黒、瓦・金属製品・石製品・木製品－斜線

1．土色については、小山正志・竹原秀雄編　1996　『新版　標準土色帖９版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

1．各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　老　原　遺　跡　第９次調査（ＯＨ97－９）…… 1
Ⅱ　亀　井　遺　跡　第５次調査（ＫＭ97－５）…… 7
Ⅲ　久宝寺遺跡　第20次調査（ＫＨ96－20）…… 15
Ⅳ　佐　堂　遺　跡　第１次調査（ＳＤＯ95－１）…… 41
Ⅴ　太子堂遺跡　第７次調査（ＴＳ97－７）…… 59
Ⅵ　太子堂遺跡　第８次調査（ＴＳ98－８）…… 75
Ⅶ　東　郷　遺　跡　第54次調査（ＴＧ97－54）…… 95
Ⅷ　中　田　遺　跡　第36次調査（ＮＴ97－36）…… 111

Ⅸ　中　田　遺　跡　第37次調査（ＮＴ97－37）…… 119
Ⅹ　中　田　遺　跡　第38次調査（ＮＴ97－38）…… 131
Ⅺ　八尾寺内町遺跡　第３次調査（ＹＣ97－３）…… 145
Ⅻ　山　賀　遺　跡　第６次調査（ＹＭＧ97－６）…… 175
報告書抄録

Ⅰ　老原遺跡第９次調査（ＯＨ97－９）

例　　言

1．本書は、八尾市老原１丁目地内で実施した公共下水道（９－42工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する老原遺跡第９次調査（ＯＨ97－９）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋548－２号　平成９年12月16日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成10年２月10日から平成10年２月23日（実働５日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は23.4㎡を測る。なお、調査においては岡部和志が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西村・中西明美、図面レイアウト－西村、トレース－中西が行った。

1．本書の執筆、編集は西村が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
第２章　調査概要……2
　第１節　調査の方法と経過……2
　第２節　検出遺構と出土遺物……2
第３章　まとめ……5

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……1
第２図　調査地位置図……2
第３図　東壁面図……3
第４図　検出遺構平面図……4
第５図　第３層（１）ＳＤ－101（２）出土遺物実測図 ……5

表　目　次

第１表　調査地一覧……2

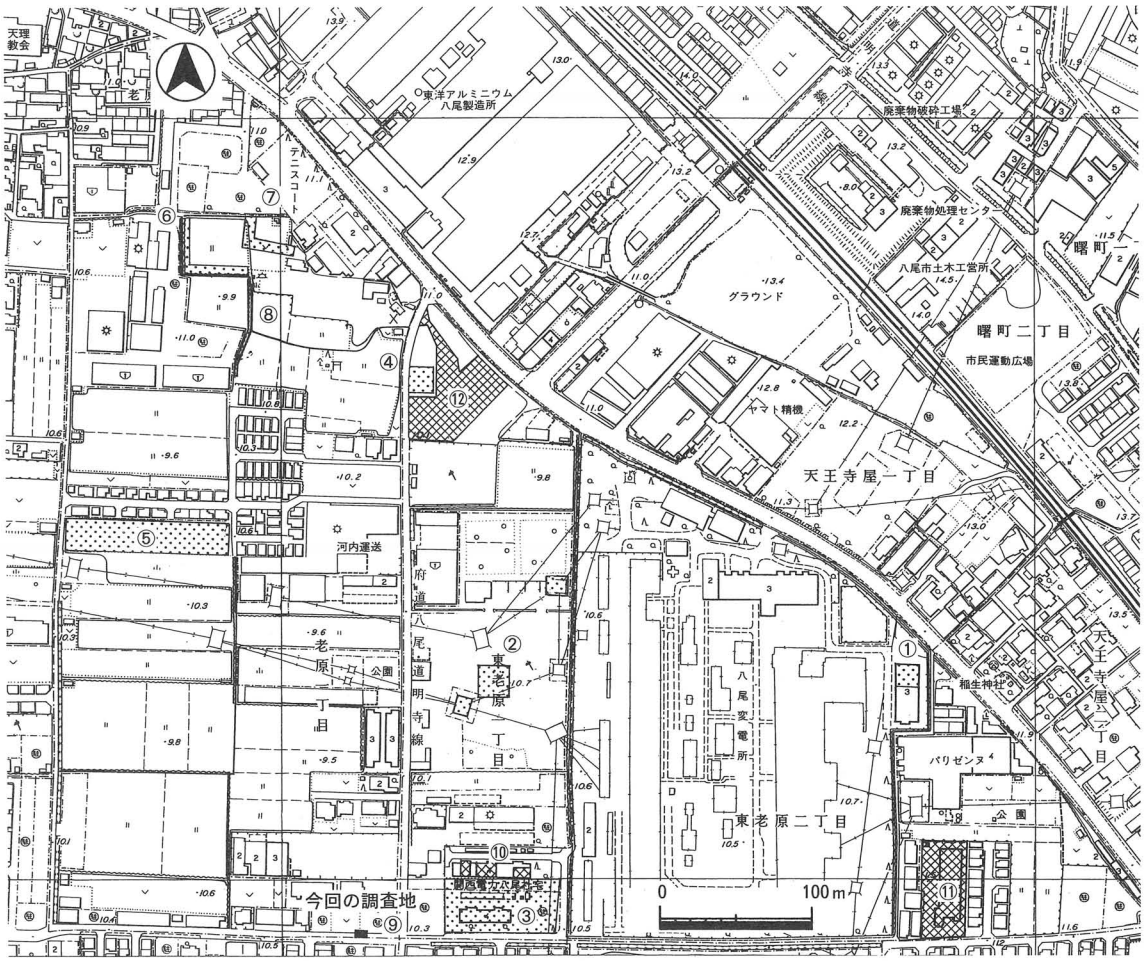
図　版　目　次

図版一　調査地周辺（南西から）　第４層上面全景（西から）
東壁面（西から）　下層掘削状況（北から）

第１章　はじめに

老原遺跡は、古墳時代後期～室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸一帯に広がる沖積地上に位置している。当遺跡は八尾市の南部に存在しており、現在の行政区画では老原１～４丁目、東老原１・２丁目が遺跡の範囲である。

当遺跡周辺には、南に志紀遺跡・田井中遺跡、さらに長瀬川を挟んで東に東弓削遺跡、北に矢作遺跡、北東に中田遺跡が存在している。当遺跡内においては、昭和56年度に東老原１丁目で八尾市教育委員会（以下当市教委と記載）が発掘調査を実施している。また、昭和60年度以降は財団法人八尾市文化財調査研究会（以下当研究会と記載）により８次におよぶ発掘調査が実施されており、これらの調査では、古墳時代後期から室町時代に比定される遺構・遺物が検出されている。今回の調査地の北東約100ｍ地点で昭和56年度に行った関西電力株式会社社宅建設工事に伴う当市教委の調査では、鎌倉時代の井戸を検出しており、当時の集落が存在していたことが明らかになっている。[註1]



第１図　調査地周辺図

第１表　調査地一覧

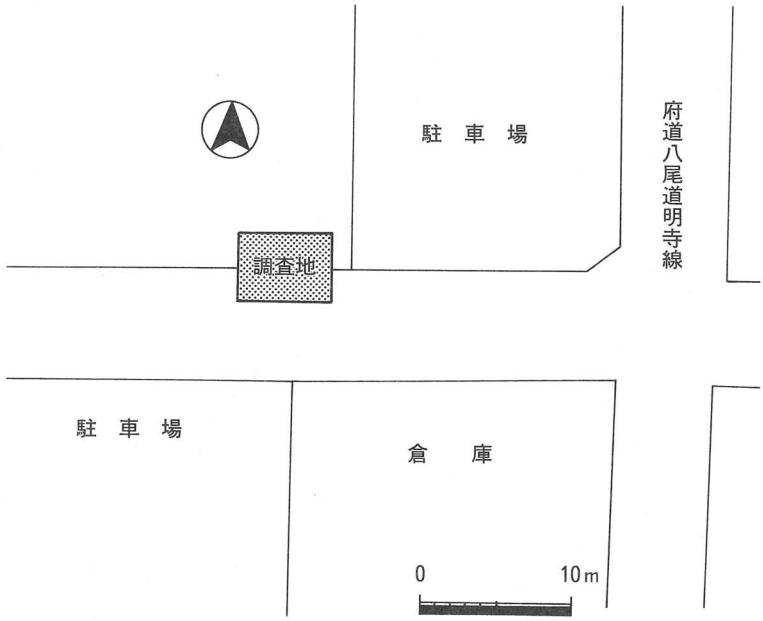
調査地点	調査主体	所在地	面積(㎡)	調査原因	調査期間	文献
①	研究会(OH85－1)	東老原2丁目46	333	八尾制御所建設	S600212～0308	駒沢敦　1985「11老原遺跡(第１次調査)」『昭和59年度事業概要報告』㈶八尾市文化財調査研究会報告７　㈶八尾市文化財調査研究会
②	研究会(OH85－2)	東老原1丁目11番地・16	542	送電鉄塔建設	S600819～0910	原田昌則・成海佳子　1987「Ⅱ老原遺跡(第２次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』財団法人八尾市文化財調査研究会報告13　財団法人八尾市文化財調査研究会
③	研究会(OH88－3)	東老原1丁目42－1	320	社宅建設	S631027～1116	原田昌則　1989「15　老原遺跡(第３次調査:東老原1丁目42－1)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25　財団法人八尾市文化財調査研究会
④	研究会(OH88－4)	東老原1丁目	40	公共下水道	H010214～0301	西村公助　1989「16　老原遺跡(第４次調査:東老原1丁目)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25　財団法人八尾市文化財調査研究会
⑤	研究会(93－5)	老原1丁目91番地の一部	269	共同住宅建設	H060110～0125	高萩千秋　1994「８.老原遺跡第５次調査(OH93－05)」『平成５年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
⑥	研究会(OH95－6)	老原1丁目地内	150	道路新設	H071204～1221	原田昌則　1996「５.老原遺跡第６次調査(OH95－06)」『平成７年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
⑦	研究会(OH96－7)	老原1丁目地内	180	道路新設	H081202～1224	原田昌則　1997「６.老原遺跡第７次調査(OH96－07)」『平成８年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
⑧	研究会(OH97－8)	老原1丁目	220	道路新設	H091104～1119	㈶八尾市文化財調査研究会平成９年度事業報告
⑨	研究会(OH97－9) 今回の調査地	老原1丁目地内	23.4	公共下水道	H10210～0223	
⑩	市教委	東老原1丁目		関西電力株式会社社宅建設	S560420～0513	高萩千秋・高木真光　1983「第７章老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
⑪	市教委(63－150)	東老原2丁目13－1.14－1.18	27	共同住宅建設	S630802	近江俊秀　1989「12.老原遺跡(60－150)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　八尾市教育委員会
⑫	市教委(95－319)	東老原1丁目2－4の一部、2－5		道路新設	H071027・30・31	消　斎　1997「２.老原遺跡(95－319)の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　八尾市教育委員会

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（９－42工区）に伴う発掘調査である。発進立坑部分１箇所（東西幅約６ｍ、南北幅約3.9ｍ、面積約23.4㎡）の調査を行った。掘削に際しては、現地表下約1.0ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.5ｍについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

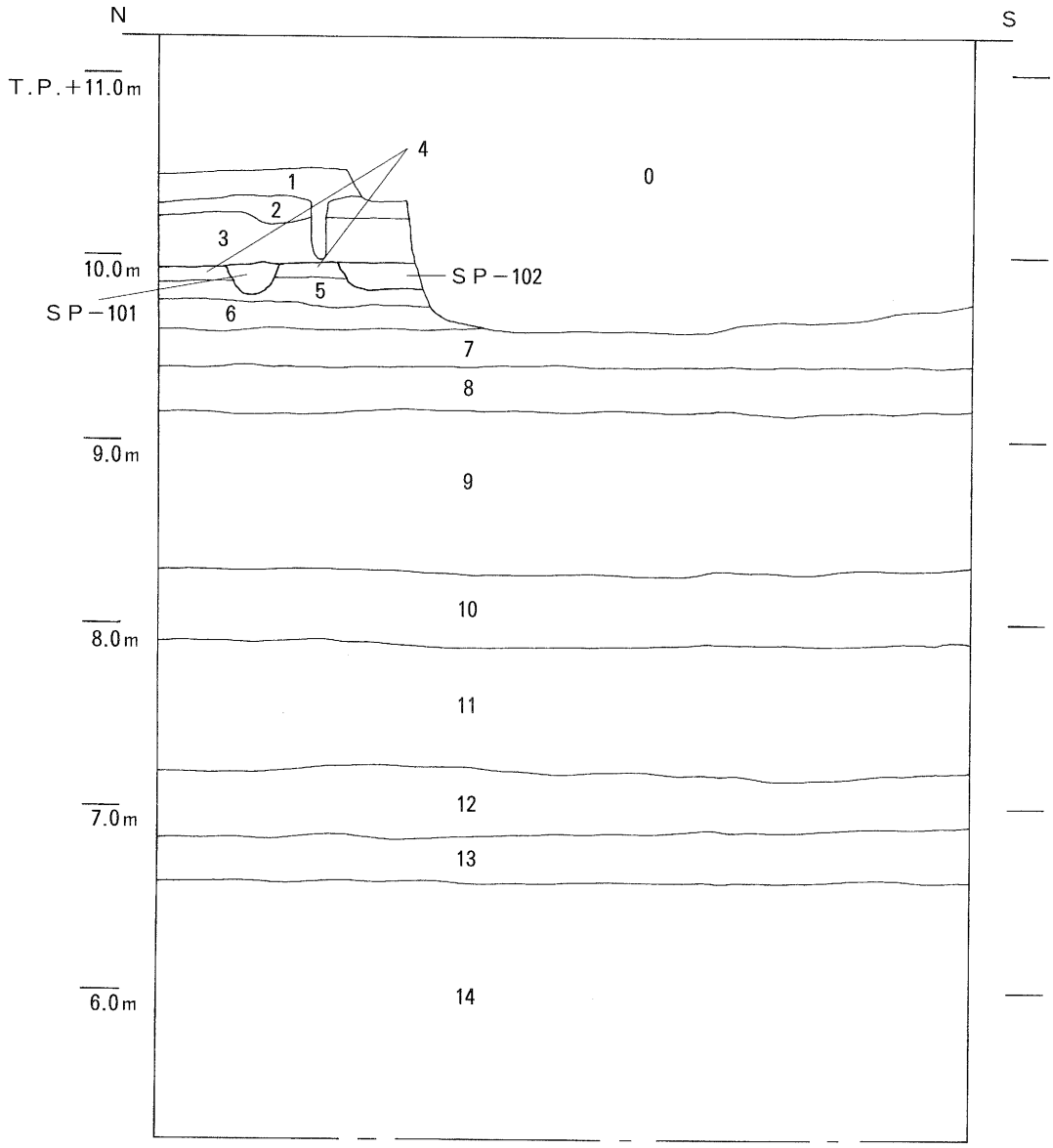
調査の結果、現地表下1.3ｍ（T.P.＋9.9ｍ）に存在する第４層上面で鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。遺物は遺構および第３層内からコンテナ１箱分が出土した。なお、調査区内の南半分は既存のガス管があり、この部分の約15㎡は鎌倉時代の遺構検出面まで掘削が達しており面的な調査は行えなかった。



第２図　調査地位置図

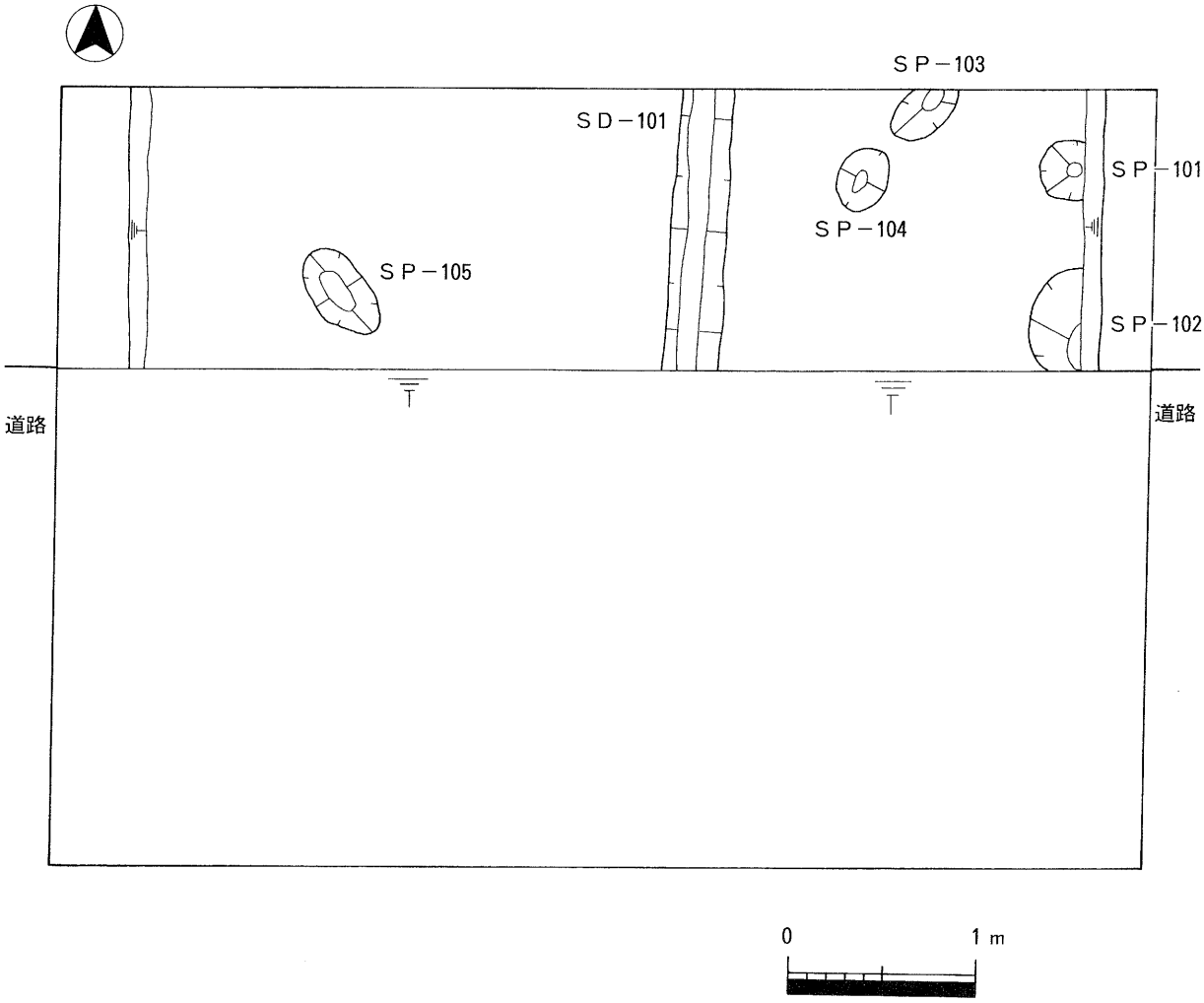
第２節　検出遺構と出土遺物

今回の調査地では合計14層を確認した。第０層は盛土で、上面は現地表面であり、標高T.P.＋11.2ｍを測る。第１層は旧耕作土で、層厚0.15ｍを測る。第２層～第４層は粘土で、第３層内からは瓦質の鉢（１）のほ



第０層　盛土　層厚0.7m　現地表Ｔ．Ｐ．＋11.2m
第１層　５Ｂ4/1　暗青灰色細砂混粘土（旧耕作土）　層厚0.15m
第２層　7.2Ｙ4/4　褐色細砂混粘土　層厚0.1m
第３層　7.5Ｙ4/2　灰褐色粗砂混粘土　層厚0.3m
第４層　10ＹＲ4/6　褐色シルト混粘土　層厚0.1m
　　上面は鎌倉時代～室町時代の遺構検出面
第５層　N5/　灰色細砂混粘土　層厚0.1～0.2m
第６層　N6/　灰色シルト混粘土　層厚0.15m
第７層　10ＢＧ5/1　青灰色シルト混粘土　層厚0.2m
第８層　10Ｙ5/1　灰色細砂　層厚0.25m
第９層　５Ｂ6/1　青灰色シルト混粘土　層厚0.8m
第10層　N4/　灰色粘土　層厚0.4m
第11層　５ＢＧ3/1　暗青灰色粘土　層厚0.7m
第12層　５ＢＧ2/1　青黒色粘土　層厚0.3m
第13層　５Ｂ3/1　暗青灰色粘土　層厚0.3m
第14層　10Ｙ6/1　灰色粗砂混細砂　層厚1.4m以上
ＳＰ－101・ＳＰ－102埋土　10Ｙ6/1　灰色細砂混粘土

第３図　東壁面図



第４図　第４層上面検出遺構平面図

かに土師器や須恵器の破片が極少量出土した。（１）は体部が内湾ぎみに外へ開き、やや外上方へわずかに折る口縁部で、口径29㎝、器壁は0.8㎝程度を測る。15世紀後半頃に比定できる。

第４層はシルト混粘土層で、上面が土壌化しており、鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。この層からは瓦器椀の破片が少量出土した。破片で詳しい時期は不明であるが12世紀～13世紀のものであると推定できる。

平面の調査を終えた後、工事掘削の最終深度まで地層の堆積を確認した。その結果、ほぼ水平に堆積している第６層～第14層を確認した。中でも第14層の細砂は層厚1.4ｍ以上を測り、時期は不明であるが、この砂は河川の堆積であると推測される。

第４層の上面で調査を行った結果、鎌倉時代～室町時代にかけての小穴５個（ＳＰ－101～105）と溝１条（ＳＤ－101）を検出した。

ＳＰ－101

遺構の東側は調査区外に至り形状は不明である。平面の形状は円形と思われ、径0.32ｍを測る。断面の形状はＵ字形で、深さ0.18ｍを測る。埋土は10Y6/1　灰色細砂混粘土で、瓦器椀の破片が出土した。

ＳＰ－102

遺構の東側は調査区外に至り形状は不明である。平面の形状は円形と思われ、径0.56ｍ以上を測る。断面の形状は台形で、深さ0.14ｍ前後を測る。埋土は10Y6/1　灰色細砂混粘土で、土師器の小皿と思われる破片が出土した。

ＳＰ－103

平面の形状は楕円形で、長径0.46ｍ、短径0.24ｍを測る。断面の形状はＵ字形で、深さ0.12ｍ前後を測る。埋土は10Y6/1　灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

ＳＰ－104

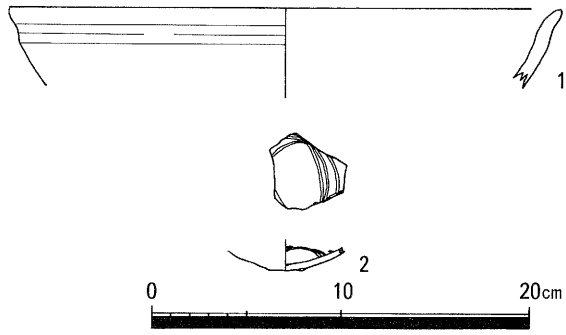
平面の形状は楕円形で、長径0.35ｍ、短径0.26ｍを測る。断面の形状はＵ字形で、深さ0.15ｍ前後を測る。埋土は10Y6/1　灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

ＳＰ－105

平面の形状は楕円形で、長径0.54ｍ、短径0.30ｍを測る。断面の形状は逆台形で、深さ0.11ｍ前後を測る。埋土は10Y6/1　灰色細砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

ＳＤ－101

南北方向に直線に伸びる。検出長1.6ｍ、幅0.3ｍ、断面の形状は逆台形で、深さ0.1ｍを測る。埋土はN6/1　灰色シルト混粘土で、内部からは瓦器椀（２）が出土した。（２）は椀の底部で、高台は粘土紐を貼り付けているが、全周しておらず、ほとんど高台は残っていない。内面にはラセン状暗文を施している。14世紀中葉頃に比定できる。



第５図　第３層（１）ＳＤ－101（２）出土遺物実測図

第３章　まとめ

今回の調査では、鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。小穴（ＳＰ－101～ＳＰ－105）は建物に伴う柱穴である可能性が考えられ、同時期の集落が存在していることが明らかになった。建物がどのような配置であるかは今回の調査では明らかにできなかった。しかし、調査地のほぼ中央で検出した溝（ＳＤ－101）は建物などを区画している溝と考えられる。また、この溝は南北方向に直線に伸びていることから、条里方向を意識した屋敷が存在していた可能性も考えられる。

同時期の遺構は、北東約100ｍに近接している昭和56年度市教委調査地や、北東約200ｍ地点の昭和60年度当研究会調査地で検出している。これらのことから、上記の既往調査で確認している鎌倉～室町時代の集落域が南西へ広がっていることが判明した。

註記

註１　高萩千秋・高木真光　1983「第７章老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会

参考文献

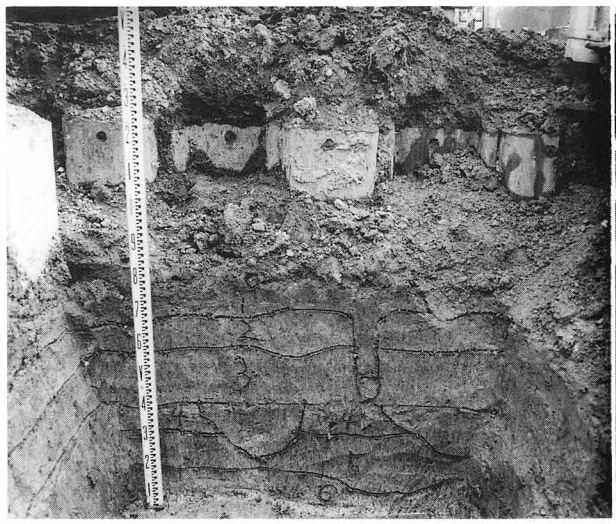
・原田昌則・成海佳子　1987「Ⅱ老原遺跡（第２次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』財団法人八尾市文化財調査研究会報告13　財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1989「15　老原遺跡（第３次調査：東老原１丁目42－１）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25　財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1989「16　老原遺跡（第４次調査：東老原１丁目）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25　財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1994「８．老原遺跡第５次調査（ＯＨ93－05）」『平成５年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1996「５．老原遺跡第６次調査（ＯＨ95－06）」『平成７年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1997「６．老原遺跡第７次調査（ＯＨ96－07）」『平成８年度㈶八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人　八尾市文化財調査研究会
・消　斎　1997「２．老原遺跡（95－319）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　八尾市教育委員会
・近江俊秀　1989「12．老原遺跡（60－150）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19　八尾市教育委員会
・高萩千秋・高木真光　1983「第７章老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
・今尾文明　1990「大和・中世村落における瓦質土器－奈良県田原本町法貴寺遺跡出土資料－」『中近世土器基礎研究Ⅵ』

図　　版

図版一

調査地周辺（南西から）

第４層上面全景（西から）



東壁面（西から）

下層掘削状況（北から）

Ⅱ　亀井遺跡第５次調査（ＫＭ97－５）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市亀井町１・２丁目、跡部本町４丁目地内で実施した公共下水道工事（８－110工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する亀井遺跡第５次調査（ＫＭ97－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第埋第403－３号　平成８年10月３日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年５月12日～５月19日（実働３日）にかけて、古川晴久を担当者として実施した。調査面積は約31.68㎡である。現地調査においては坂田典彦・西岡千恵子・八田雅美が参加した。

1．内業整理は現地調査終了後随時行い、平成11年９月に終了した。

1．本書作成に関わる業務には、上記の他、村井俊子が行った。

1．本書の執筆・編集は、古川が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……7
第２章　調査概要……8
　第１節　調査の方法と経過……8
　第２節　層序……8
　第３節　検出遺構と出土遺物……10
　第４節　出土遺物観察表……12
第３章　まとめ……13

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）……7
第２図　調査地位置図（Ｓ＝1/400）……8
第３図　南壁土層断面図（Ｓ＝1/40）……9
第４図　第17層内出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……11
第５図　第19層・第20層・第22層内出土遺物実測図（Ｓ＝1/4、17はＳ＝1/2）……11

写　真　目　次

写真　調査地近景（東から）……8

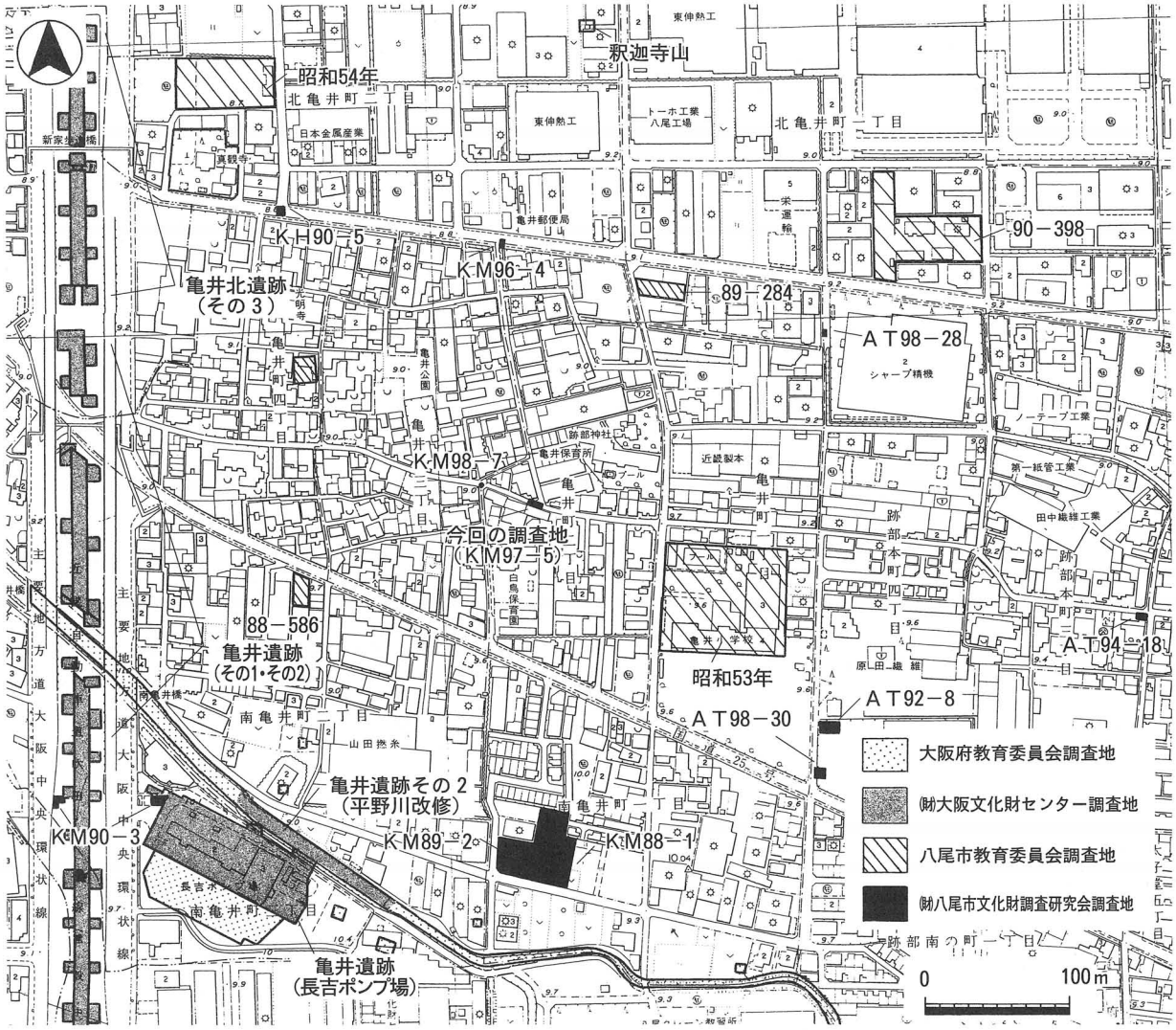
図　版　目　次

図版　一　南壁土層断面（T.P.＋7.8～6.3m）北東から
南壁土層断面（T.P.＋6.5～5.9m）北から
南壁土層断面（T.P.＋6.5～5.9m）北から
第17層遺物出土状況　北から（写真左が上）
調査風景　北西から
南壁土層断面（T.P.＋5.5～4.0m）北から
図版　二　第17層（１～７）出土遺物
図版　三　第19層・第20層・第22層（11～15）出土遺物

第１章　はじめに

亀井遺跡は八尾市の南東部に位置し、現在の行政区画では八尾市亀井町１～４丁目・南亀井町１～３丁目・跡部本町１～４丁目・跡部南の町１丁目と大阪市平野区長吉出戸にかけて所在する。地理的には河内平野南端部の沖積低地に立地し、東除川・旧大和川水系の平野川の河道により形成された微高地上に位置する。当遺跡の周辺には北に久宝寺遺跡、西に竹渕遺跡、東に跡部遺跡、南に城山・長原遺跡（大阪市）が位置する。（第１図参照）

当遺跡は昭和43年（1968年）の平野川改修工事に伴う発掘調査で弥生土器が出土したことによりその存在が明らかになった。その後、近畿自動車道建設・長吉ポンプ場築造などに伴い大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター（現・大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が実施され、縄文時代晩期～近世にわたる遺構・遺物が多数検出されている。



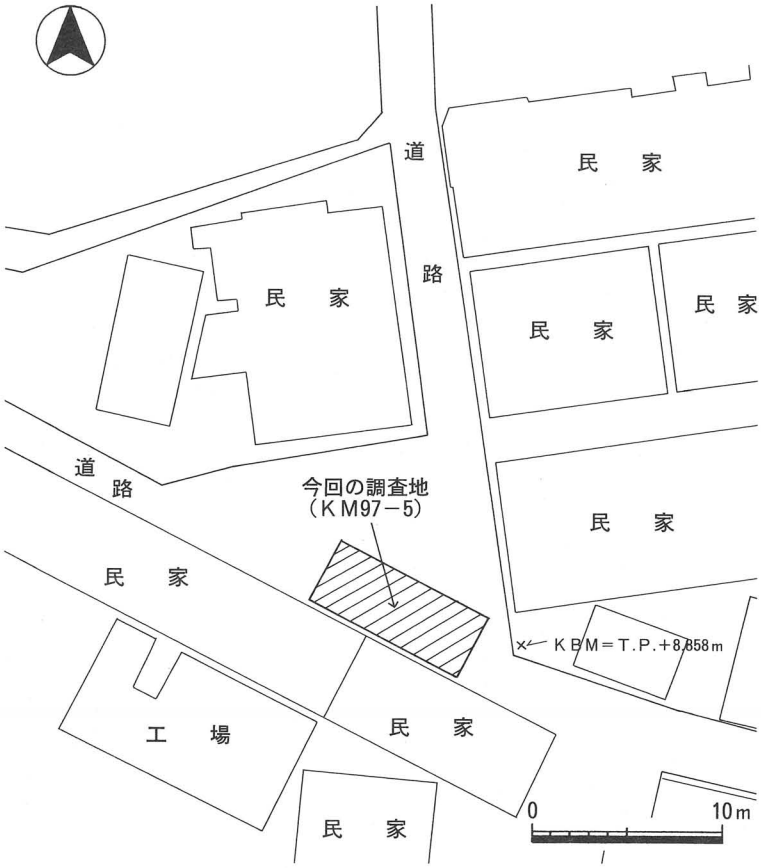
第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（８－110工区）の発進立坑部分を対象にした調査で、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第５次調査にあたる。調査地の平面形は東西約8.8ｍ×南北約3.6ｍの長方形である。（第２図参照）

調査は八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（T.P.＋8.9ｍ）から約1.2ｍ前後については重機により掘削した。それ以下の調査については人力掘削を主として行い、状況に応じて機械掘削を併用して実施した。土層断面観察のため南壁を残しながら掘削し調査を進めた。工事の最終深度である現地表下約5.0ｍ（T.P.＋約3.9ｍ）まで掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表から約3.0～4.0ｍの間で弥生時代前期後半～後期初頭にかけての遺物が出土した。また、現地表下から1.3～3.0ｍの間において旧河川の堆積を確認している。



第２図　調査地位置図（Ｓ＝１/400）

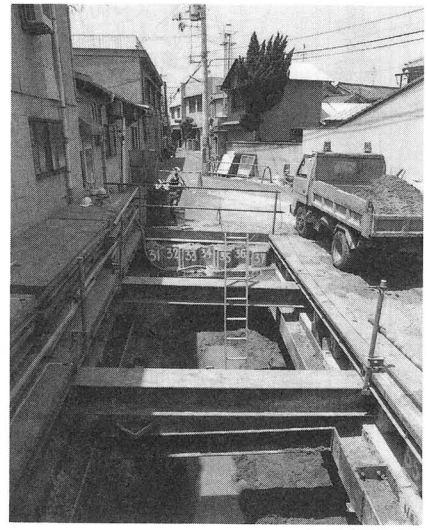
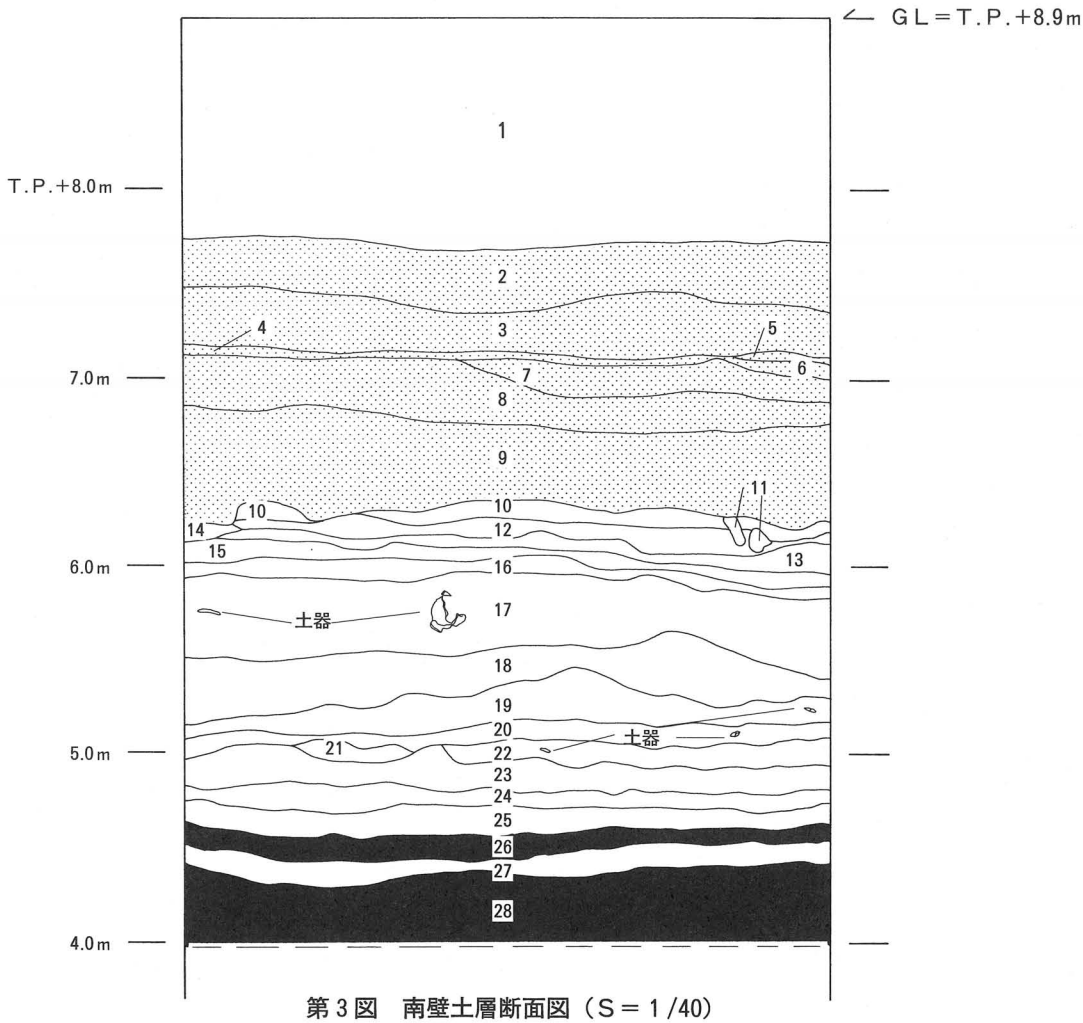


写真　調査地近景（東から）

第２節　層序

現地表（T.P.＋8.9ｍ）下から約1.2ｍは既に掘削が終了していたため、第１層（現代盛土）と第２層との境界は確認できなかった。第２層～第９層にかけては粗粒砂～砂礫を主体とする河川に伴う堆積を層厚1.5ｍ以上確認している。第10層～第28層までは水平堆積で粘土を主体としている。第17層、第19層、第20層、第22層では弥生時代前期後半～後期にかけての遺物を包含している。第26層、第28層は中河内地域で認められる黒色粘土層である。以下、各層について記す。



第３図　南壁土層断面図（Ｓ＝１/40）

第１層　現代盛土。機械掘削対象範囲である。

第２層　7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト。やや締まりが弱く、小礫が多くまじる。

第３層　10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト。砂礫が多く混じる。

第４層　5G7/1明緑灰色粘土。やや粘性あり。

第５層　10YR3/1黒褐色砂質シルト。しまり弱い。

第６層　5YR 4/1赤褐色砂質シルト。しまり弱い。

第７層　10YR 6/3にぶい黄橙色砂質シルト。しまり弱く、中礫を多く含む。

第８層　7.5YR5/8明褐色砂礫。

第９層　7.5Y7/1灰白色細粒砂。しまり弱く、層中の下部に10YR7/4にぶい黄橙色粗砂を一部含む。

第10層　N3/暗灰色粘土。植物遺体を多量に含む。

第11層　10Y7/1灰白色粗砂。しまり弱い。

第12層　N5/灰色粘土。第10層よりも植物遺体が少ない。鉄分を多量に含む。

第13層　10G6/1緑灰色粘土。粘性強い。

第14層　N4/灰色粘土。

第15層　N5/灰色粘土。炭化物を少量含む。
第16層　5BG6/1青灰色粘土。粘性強い。
第17層　5BG5/1青灰色粘土。粘性非常に強い。弥生時代後期初頭の遺物を包含する。
第18層　5BG6/1青灰色粘土。黄褐色の粗砂が一部混じる。
第19層　10G5/1緑灰色粘土質シルト。やや粘性があり、しまり強い。層中に5G7/1明緑灰色シルトを一部含む。弥生時代前期後半～中期後半の遺物を包含する。
第20層　5B6/1青灰色砂質シルト。しまり強い。弥生時代前期後半～中期後半の遺物を包含する。
第21層　N5/1オリーブ灰色砂質シルト。
第22層　N6/1灰色砂質シルト。しまり強い。弥生時代前期後半～中期後半の遺物を多く含む。
第23層　5G6/1緑灰色シルト。しまり非常に強い。
第24層　10G6/1緑灰色シルト。第23層よりもしまり弱い。
第25層　5BG6/1青灰色粘土質シルト。粘性強い。
第26層　N5/灰色粘土。粘性非常に強い。(黒色粘土)
第27層　10G7/1明緑灰色粘土。粘性強い。
第28層　N4/灰色粘土。粘性、しまり強い。(黒色粘土)

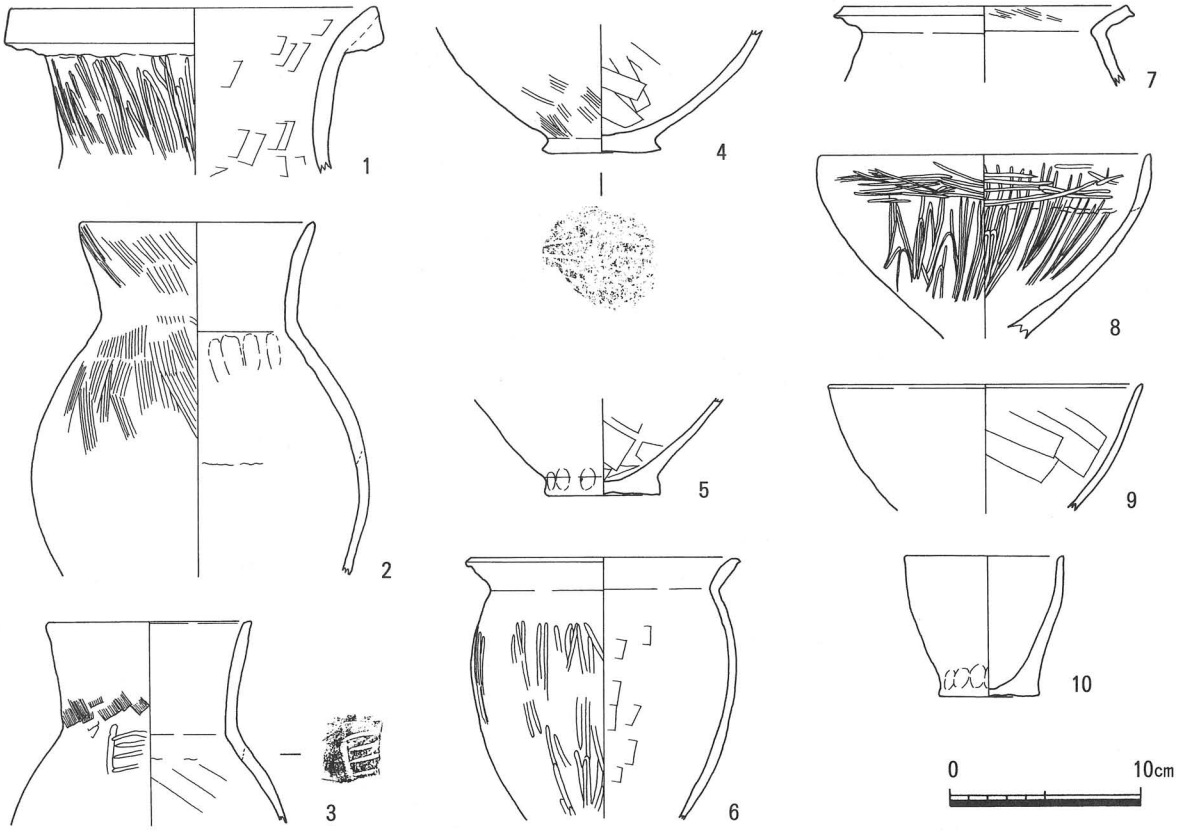
第3節　検出遺構と出土遺物

今回の調査区において遺構は検出されなかった。しかし、土層断面の観察や遺物の包含などから一部堆積時期が確認できた。まず、第2層～第9層にかけては粗砂層を主体とする河川堆積とみられる。今回の調査区は、位置的に近畿自動車道建設に伴う調査成果、地籍図などから判断すると埋没河川（古平野川）の流路にあたるものとみられる。第2層～第9層内からは古墳時代後期以降の土師器・須恵器の小片が極少量出土している。

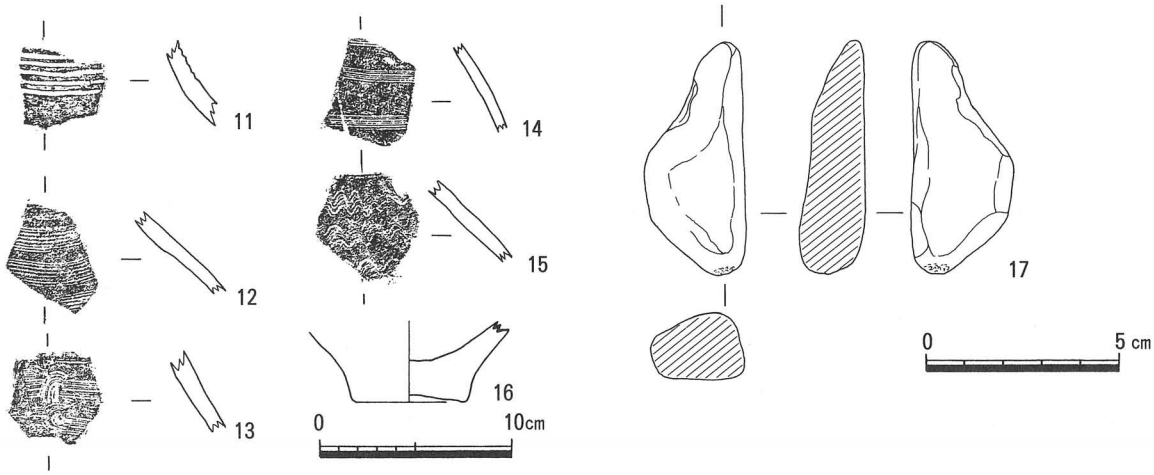
南壁掘削中の第17層内より弥生時代後期初頭（第Ⅴ様式）に比定される遺物が多く出土した。

そのうち、10点（1～10）を図化した。内訳は弥生土器－広口壷1点（1）、短頸壷2点（2・3）、壷底部2点（4・5）、甕2点（6・7）、鉢3点（8～10）である。（1）は広口壷で頸部にかけて縦方向のヘラミガキが密に行われている。胎土は内外面とも角閃石が多量にみられる。（2）は短頸壷で口径12.4cmを測る。口縁部～体部にかけて縦方向の粗いハケメを行っている。全体に煤が付着している。（3）は頸部～体部上半にかけてヘラ記号1箇所がある。（6）は甕で口径14.0cmを測る。体部全体に縦方向の粗いヘラミガキを行っている。全体に煤の付着が著しい。（8）は鉢で、体部の内外面とも縦方向のヘラミガキを密に行っている。(10) は鉢で口径8.25cm・底径5.3cm・器高7.5cmを測る。体部外面から底部にかけて指頭圧痕が明瞭に残る。色調は内外面ともにぶい橙色である。

また、第19層・第20層・第22層より弥生時代前期後半～中期後半に比定される遺物が少量出土した。そのうち、7点（11～17）を図化した。内訳は弥生土器－壷6点（11～16)、石器－敲石1点（17）である。(11～15) は壷とみられる。(11) は弥生時代前期後半に比定される広口壷とみられ沈線が5条認められる。(12～15) は弥生時代中期後半に比定され、櫛描直線文・櫛描波状文などが施文されている。(17) は敲石で長さ12.3cm・最大幅5.3cm・最大厚み3.5cmを測る。1箇所に敲打痕が認められる。石材は不明である。



第４図　第17層内出土遺物 実測図（Ｓ＝１／４）



第５図　第19層・第20層・第22層内出土遺物 実測図（Ｓ＝１／４、17はＳ＝１／２）

第４節　出土遺物観察表

番号	器種・部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	特徴	備考
1	弥生土器 広口長頸壷 口縁～体部	器高(残) 8.5 口径 19.1	灰黄褐色	やや粗い ２㎜以下の角閃石を多く含む。	良	(外面)口縁部ナデ、頸部縦方向のミガキ (内面)頸部はヨコナデ	
2	弥生土器 短頸壷 口縁～体部	器高 18.0 口径 12.4	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む。	良	(外面)口縁部ナデ、頸部～体部に縦方向の粗いハケメ。 (内面)調整不明	外面全体に煤が付着
3	弥生土器 短頸壷 口縁～体部	器高(残)10.5 口径 12.6	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む。	良	(外面)口縁部ナデ、頸部～体部に縦方向の細かいハケメ。 (内面)体部、ヨコナデ	ヘラ記号あり
4	弥生土器 壷 体部～底部	底径 6.3	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む。	良	(外面)体部、縦方向のハケメ (内面)ナデ	底に木葉痕あり
5	弥生土器 壷 体部～底部	底径 5.9	にぶい黄橙色	良。	良	(外面)底部近くに指頭圧痕あり (内面)ナデ	
6	弥生土器 甕 口縁～体部	器高(残)13.5 口径 14.0	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む	良	(外面)口縁部ナデ、頸部～体部下半ミガキ (内面)体部、ヨコナデ	外面全体に煤が付着
7	弥生土器 甕 口縁～体部	器高(残) 4.0 口径 15.1	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む	良	(外面)口縁部ナデ (内面)口縁部ナデ	
8	弥生土器 鉢 口縁～体部	器高(残) 9.7 口径 17.4	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む	良	(外面)口縁部ナデ、体部ヨコハケ縦方向のミガキ後一部横方向のミガキ (内面)ミガキは外面と同じ	
9	弥生土器 鉢 口縁～体部	器高(残) 6.5 口径 16.5	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む	良	(外面)調整不明 (内面)ヨコナデ	
10	弥生土器 鉢 口縁～底部	器高 7.5 口径 8.25 底径 5.3	にぶい黄橙色	良。内外面とも２㎜以下の長石を少量含む	良	(外面)底部近くに指頭圧痕 (内面)縦方向の指ナデ	
11	弥生土器 壷 体部	不明	明褐色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	５条の沈線あり
12	弥生土器 壷 体部	不明	明褐色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	外面に櫛描直線文３帯あり
13	弥生土器 壷 体部	不明	灰白色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	外面に櫛描直線文３帯以上あり
14	弥生土器 壷 体部	不明	灰白色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	外面に櫛描直線文３帯以上あり
15	弥生土器 壷 体部	不明	(外面)橙色(内面)灰白色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	外面に櫛描波状文あり
16	弥生土器 壷 底部	底径 6.1	灰白色	良。	良	(外面)不明 (内面)不明	摩滅が著しい
17	石器 敲石	長さ 12.3 幅 5.3 厚さ 3.5	灰色	－	－	－	一部分に敲打痕が残る

註・遺物番号と図版の遺物番号は同じである。

第３章　まとめ

今回の調査では弥生時代前期後半～後期初頭にかけての２時期にわたる堆積と古平野川とみられる河川堆積も確認できた。

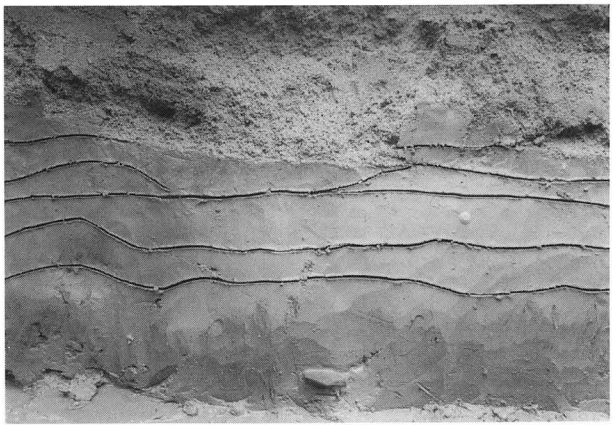
参考文献

・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編　1982　『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　（財）大阪文化財センター－
・西村　歩　1985「堺県渋川郡亀井村の地籍図」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会

図　　版

南壁土層断面（T.P.＋7.8～6.3m）北東から

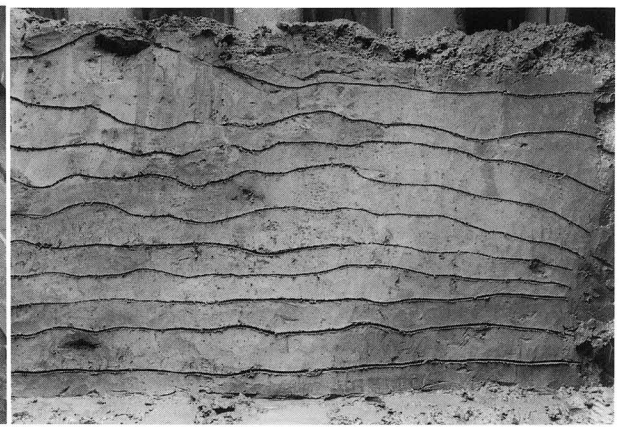
南壁土層断面（T.P.＋6.5～5.9m）北から



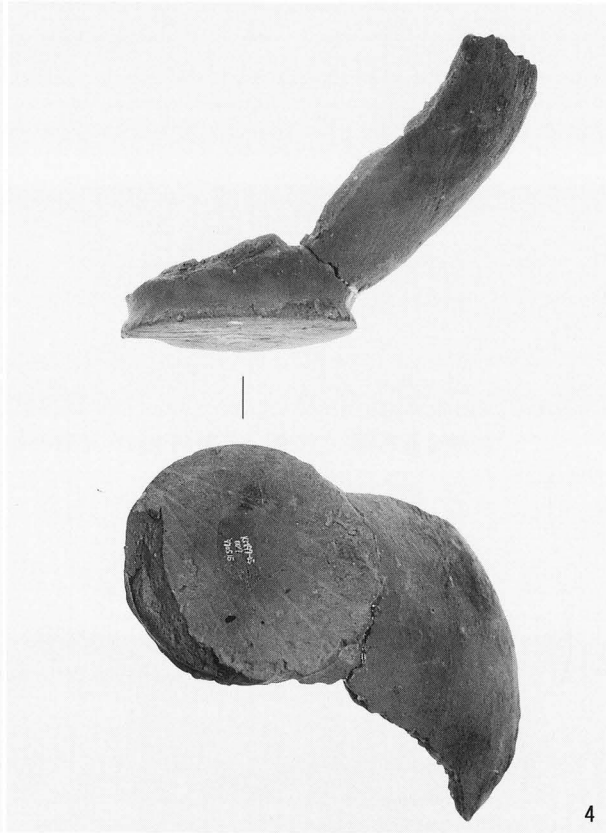
南壁土層断面（T.P.＋6.5～5.9m）北から

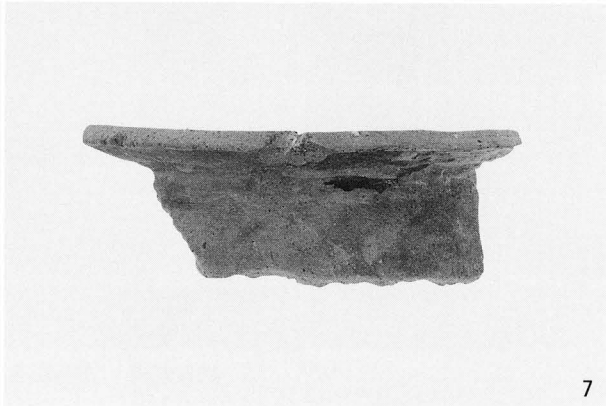
第17層遺物出土状況　北から

調査風景　北西から

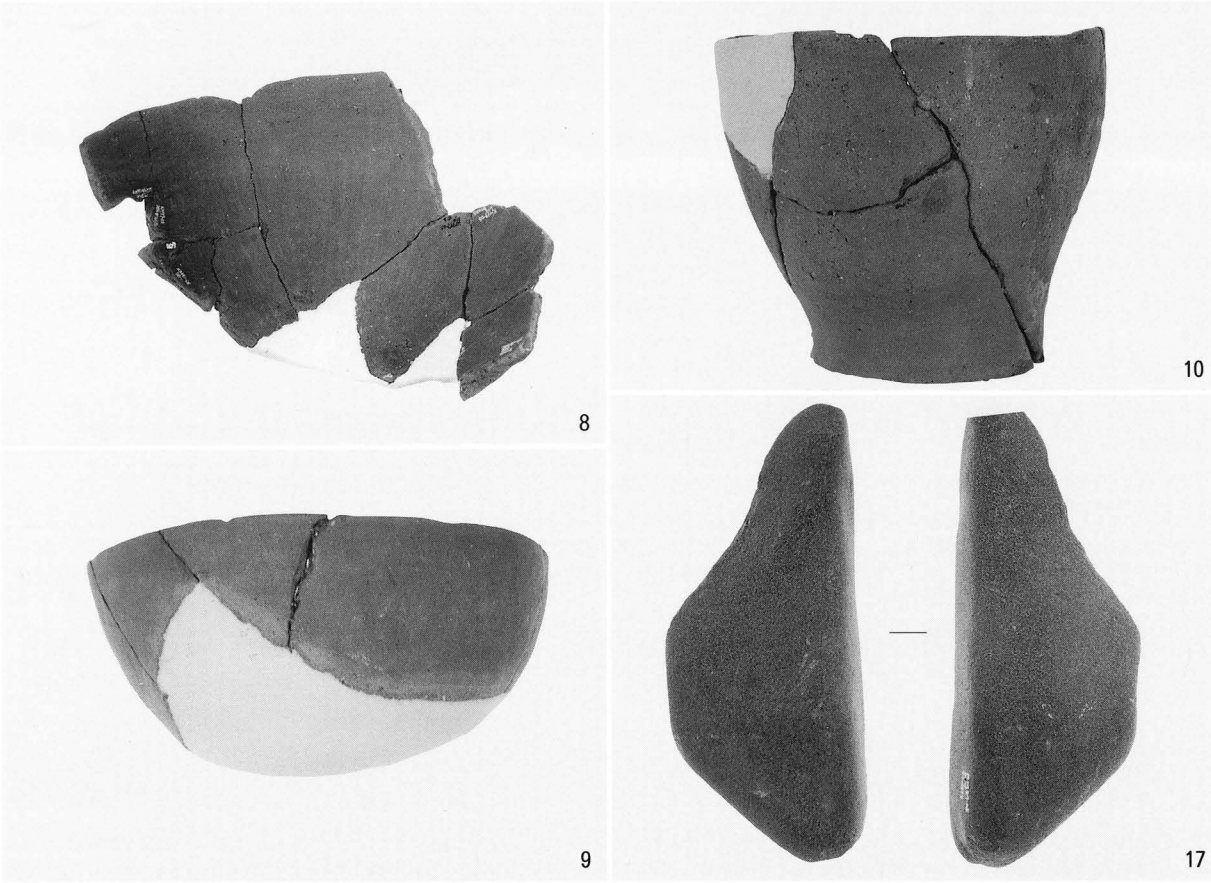


南壁土層断面（T.P.＋5.5～4.0m）北から

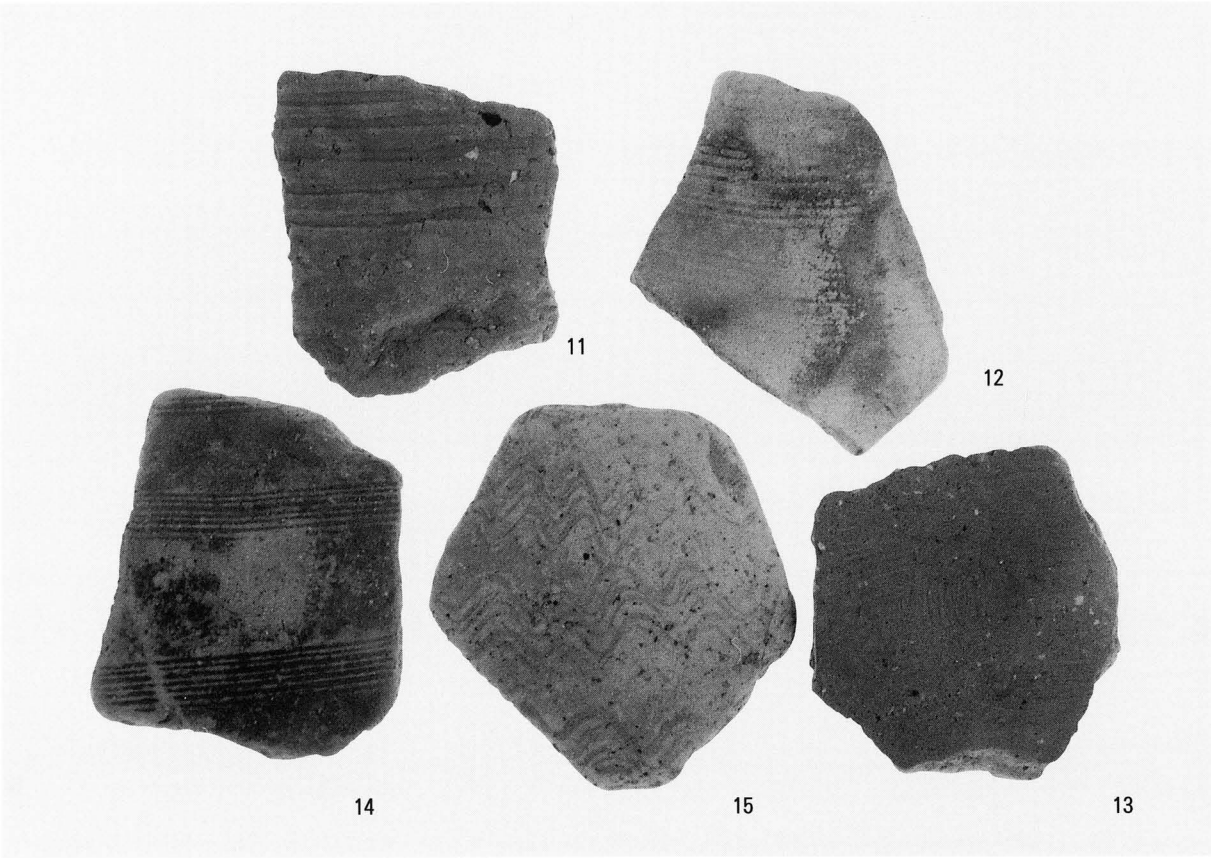




第17層（1～7）出土遺物



第17層（8～10）・第19層（17）出土遺物



第19層・第20層・第22層（11～15）出土遺物

Ⅲ　久宝寺遺跡第20次調査（ＫＨ96－20）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大字渋川地内で実施した駅舎自由通路築造工事に伴う久宝寺遺跡第20次調査（ＫＨ96－20）の発掘調査報告書である。
1．本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋312－３号　平成８年８月22日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一・森本めぐみ・古川晴久が担当した。
1．現地調査は、平成８年９月24日～11月14日（実働32日）に実施した。調査面積は約145.3㎡である。
1．現地調査には、赤澤茂美・垣内洋平・中前和代・八田雅美・山内千恵子の参加を得た。
1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が行った。
1．本書の執筆及び編集は坪田が、掲載写真の撮影は坪田・森本・古川が行った。
1．本書で用いた方位は座標北を示している。
1．調査に際しては、後藤信義・島崎久恵（財団法人大阪府文化財調査研究センター）の両氏から有益な御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

本　文　目　次

第１章　はじめに……15
第２章　調査概要……17
　第１節　調査方法……17
　第２節　基本層序……18
　第３節　検出遺構と出土遺物……21
第３章　まとめ……39

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（S＝1/10000）……16
第２図　調査区位置図（S＝1/500）……17
第３図　調査地北壁（S＝縦1/40、横1/200）……19・20
第４図　第１・２面平面図（S＝1/150）……21
第５図　ＳＥ101断面図（S＝1/30）……22
第６図　ＳＥ101出土遺物（S＝1/4）……23
第７図　包含層出土遺物（S＝1/4、1/2）……25
第８図　第３・４面平面図（S＝1/150）……27
第９図　ＳＯ302出土遺物（S＝1/4）……28
第10図　ＳＫ403平面・断面図（S＝1/20）……29
第11図　ＳＤ401・ＳＫ403出土遺物（S＝1/4、1/2）……30
第12図　第５・６面平面図（S＝1/150）……31
第13図　ＮＲ501・ＮＲ601出土土器（S＝1/4）……33
第14図　ＮＲ501・ＮＲ601出土木製品（S＝1/5）……34
第15図　ＮＲ601出土堰部材①（S＝1/15）……36
第16図　ＮＲ601出土堰部材②（S＝1/15）……37
第17図　第７・８面平面図（S＝1/150）……38
第18図　遺構変遷図（S＝1/500）……40

表　目　次

表１　周辺の調査一覧……15
表２　第１面土坑法量表……24
表３　第２面ピット法量表……26
表４　ＮＲ601出土の堰部材集計表……35

図　版　目　次

図版　一　１区第１面（西から）
１区第１面畦畔状遺構101（東から）
２区第１面（東から）
図版　二　１区第２面（西から）
２区第２面（東から）
１区第１面ＳＥ101上部（西から）
１区第１面ＳＥ101最下段（西から）
３区第１面（西から）
１区第２面　馬の歯出土状況（北東から）
１区第３面（西から）

	2区第3面（東から）	2区第3面ＳＯ302内の杭（南西から）
	1区第4面（西から）	2区第4面（東から）
図版　三	3区第4面（西から）	3区第4面ＳＫ403（西から）
	1区第5面ＮＲ501（西から）	1区第5面ＮＲ501底 土器(38)出土状況（南から）
	3区第5面ＮＲ501（西から）	3区第5面ＮＲ501（西から）
図版　四	3区第5面ＮＲ501内 木器(65)出土状況（南東から）	3区第5面ＮＲ501内 木器(65)出土状況（南から）
	2区第6面ＮＲ601（西から）	2区第6面ＮＲ601肩1北壁（南から）
	3区第6面ＮＲ601（東から）	3区第6面ＮＲ601肩1（南東から）
図版　五	1区ＮＲ601 堰部材出土状況（東から）	1区ＮＲ601 堰部材出土状況（南から）
	1区ＮＲ601 木器(66)出土状況（南から）	2区ＮＲ601 修羅状木製品出土状況（西から）
	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（東から）	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（西から）
図版　六	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（東から）	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（北から）
	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（西から）	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（南から）
	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（南東から）	3区ＮＲ601 堰部材出土状況（南東から）
図版　七	3区ＮＲ601 土器(44)出土状況（南から）	2区第7面（西から）
	3区第7面（西から）	3区第8面（南から）
	調査地全景（西から）	2区調査状況（東から）
図版　八	出土遺物　ＳＥ101、第1層、ＳＤ401	
図版　九	出土遺物　第2層、ＳＫ403、ＮＲ501、ＮＲ601	
図版一〇	出土遺物　ＮＲ601	
図版一一	出土遺物　ＮＲ501、ＮＲ601	
図版一二	出土遺物　ＮＲ601	
図版一三	出土遺物　ＮＲ601	

第１章　はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画では、八尾市域の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町・渋川町がその範囲とされている。さらに西部・北部の大阪市域・東大阪市域に拡がっており、遺跡の規模は約1.8㎞四方に及んでいる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡・植松遺跡、西側に加美遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺５丁目において実施された道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによるが、それ以降は発掘調査等の成果はなく遺跡の実態は不明であった。その後、昭和43年に日本道路公団により着工された近畿自動車道天理～吹田線の建設予定路線に当遺跡が含まれていたことから、昭和48年度に財団法人大阪文化財センター（現、財団法人大阪府文化財調査研究センター。以下、センター）による試掘調査が実施され、多大な成果が得られた。さらに昭和50年には大阪瓦斯株式会社による河内ラインガス導管敷設に伴う試掘調査がセンターにより実施され、久宝寺遺跡の範囲が確認されることとなった。以降、昭和55～61年度の大阪府教育委員会・センターによる近畿自動車道関連の調査㉔～㉖をはじめとし、東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。特に古墳時代前期の遺構・遺物の検出は顕著で、各地で居住域・墓域が確認されている。特筆される遺物として庄内式期の準構造船や韓式系土器があげられ、当時の他地域との交流を考えるうえで重要な遺跡であるといえよう。

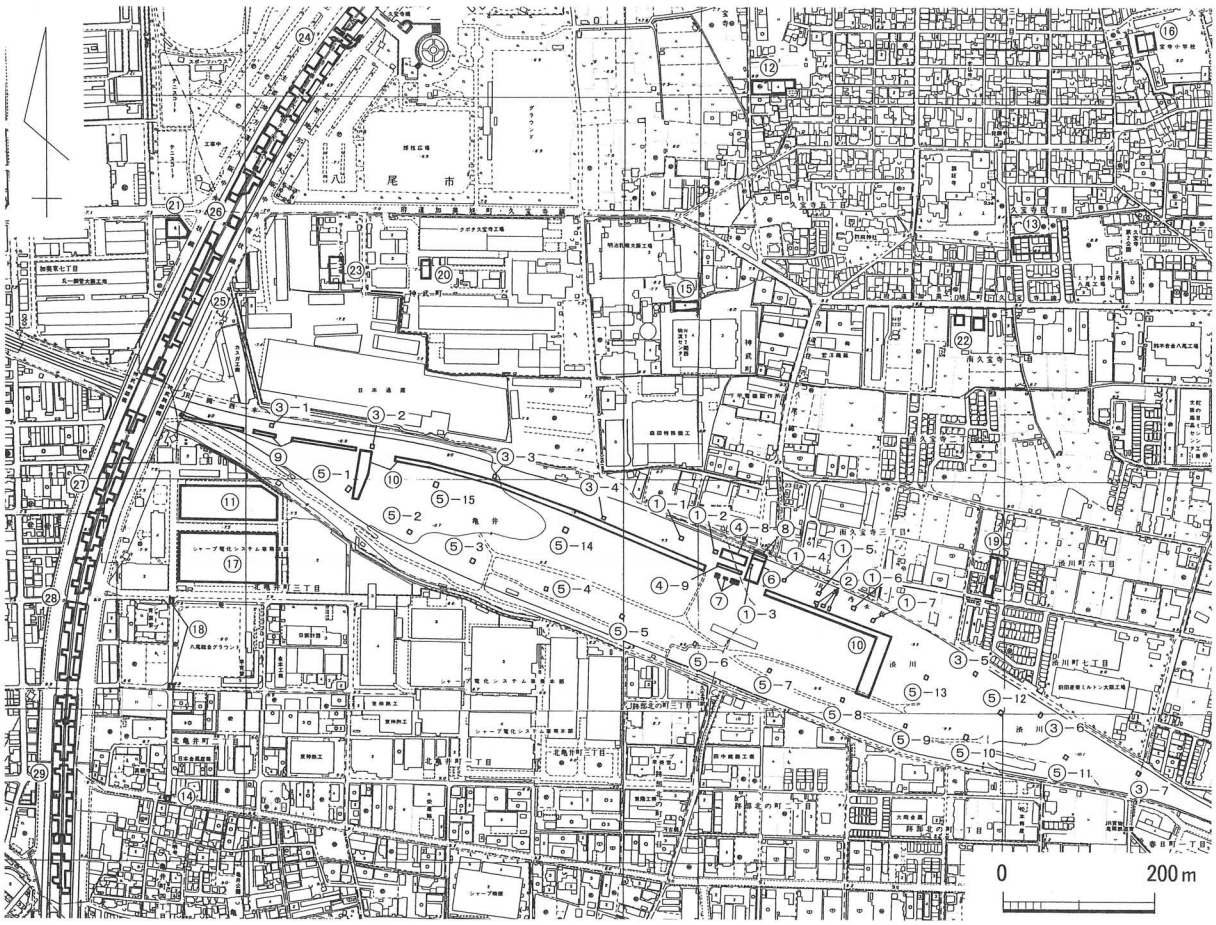
表１　周辺の調査一覧

番号	調査主体	調　査　名	調　査　年　月	文　　献	
①	市教委	63－269	昭和63年８月～12月	八尾市文化財調査報告20	1989
②	研究会	第４次	平成２年４月～６月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告41	1993
③	センター	95－1～7トレンチ	平成７年５月～12月	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書	1996
④	センター	95－8・9トレンチ	平成７年５月～12月	久宝寺遺跡・竜華地区（その１）発掘調査報告書	1996
⑤	市教委	95－565	平成８年１月～７月	八尾市文化財調査報告37	1997
⑥	センター	96－1トレンチ	平成８年２月～７月	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ	1998
⑦	研究会	第20次	平成８年９月～11月	今回の調査	
⑧	センター	97－1トレンチ	平成９年７月～９月	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ	1998
⑨	研究会	第22次	平成９年９月～10年３月	平成９年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1998
⑩	研究会	第23次	平成９年10月～10年３月	平成９年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1998
⑪	研究会	第１次	昭和59年４月～５月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告37	1993
⑫	研究会	第２次	昭和63年２月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告16	1988
⑬	研究会	第３次	昭和63年12月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告25	1989
⑭	研究会	第４次	平成２年４月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告32	1991
⑮	研究会	第６次	平成２年９月～10月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告37	1993
⑯	研究会	第８次	平成３年６月～７月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告55	1997
⑰	研究会	第９次	平成３年８月～12月	平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1992
⑱	研究会	第10次	平成３年10月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告34	1992
⑲	研究会	第11次	平成３年10月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告34	1992
⑳	研究会	第13次	平成３年12月～４年１月	平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1992
㉑	研究会	第14次	平成４年５月～８月	平成４年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1993
㉒	研究会	第17次	平成５年７月	財団法人八尾市文化財調査研究会報告55	1997
㉓	研究会	第18次	平成６年９月～10月	平成６年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告	1995
㉔	センター	久宝寺南（その１）	昭和57年７月～60年３月	久宝寺南（その１）	1987
㉕	センター	久宝寺南（その２）	昭和57年７月～60年６月	久宝寺南（その２）	1986
㉖	センター	久宝寺南（その３）	昭和60年７月～61年１月	久宝寺南（その３）	1987
㉗	センター	亀井北（その１）	昭和59年３月～61年３月	亀井北（その１）	1986
㉘	センター	亀井北（その２）	昭和59年３月～61年１月	亀井北（その２）	1986
㉙	センター	亀井北（その３）	昭和59年３月～61年３月	亀井北（その３）	1986

（調査主体：市教委＝八尾市教育委員会、研究会＝当調査研究会、センター＝財団法人大阪府文化財調査研究センター）

今回の調査地は、当遺跡内の南辺部を占める形で東西に伸びる総面積約20万㎡という旧国鉄竜華操車場跡地に位置している。当操車場は昭和13年10月に操業を開始したが、国鉄が民営化される前年の昭和61年に廃止に至った。この広大な跡地内での最初の発掘調査は昭和63年度にさかのぼり、ＪＲ久宝寺駅駅舎改築工事に伴い遺構確認調査①が八尾市教育委員会により実施された。そしてこの成果を受けて、平成２年度には第４次調査②が当調査研究会によって実施され、古墳時代中期以前の河川・遺構、古墳時代後期・平安時代の集落遺構、近世の生産関連遺構等が検出された。なお昭和59年度には、当操車場の西部に隣接する地点で当調査研究会が第１次調査⑪を実施しており、古墳時代前期の遺構・遺物が検出され、布留式期古相の良好な一括資料が出土している。またその南側の第９次調査⑰では、壺形埴輪を伴う前方後方墳を中心とした墓域の他、庄内式期の竪穴住居からは小型仿製鏡が出土している。

今回の調査は、当操車場跡地の再開発に先立つ駅舎自由通路築造工事に伴うものである。この再開発にあたっては、平成７年度以降、センターによる試掘調査③、八尾市教育委員会による遺構確認調査⑤が実施され、同時にセンターによるＪＲ久宝寺駅舎・自由通路部分④・府道部分⑥の調査が、また平成９年度からは当調査研究会による第22次⑨以降の調査も開始され、それぞれ多大な成果が得られている。なかでも操車場跡地の中央北に位置するセンター調査地④・⑥・⑧では、自然河川に設営された古墳時代の長大な堰が良好な遺存状況で検出され、当時の潅漑技術・水利施設の復元のみならず、農耕技術を考えるうえで重要な一例となった。今回の調査地はこの調査地の南側に並列する部分にあたる。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/10000）

第２章　調査概要

第１節　調査方法

今回の調査区は三箇所（西から１区～３区）に分かれており、各トレンチの規模は右記のとおりで、トレンチ間の距離は、１区～２区が約1.5ｍ、２区～３区が約3.0ｍである。

また北側のセンター調査地との距離は約10ｍである。

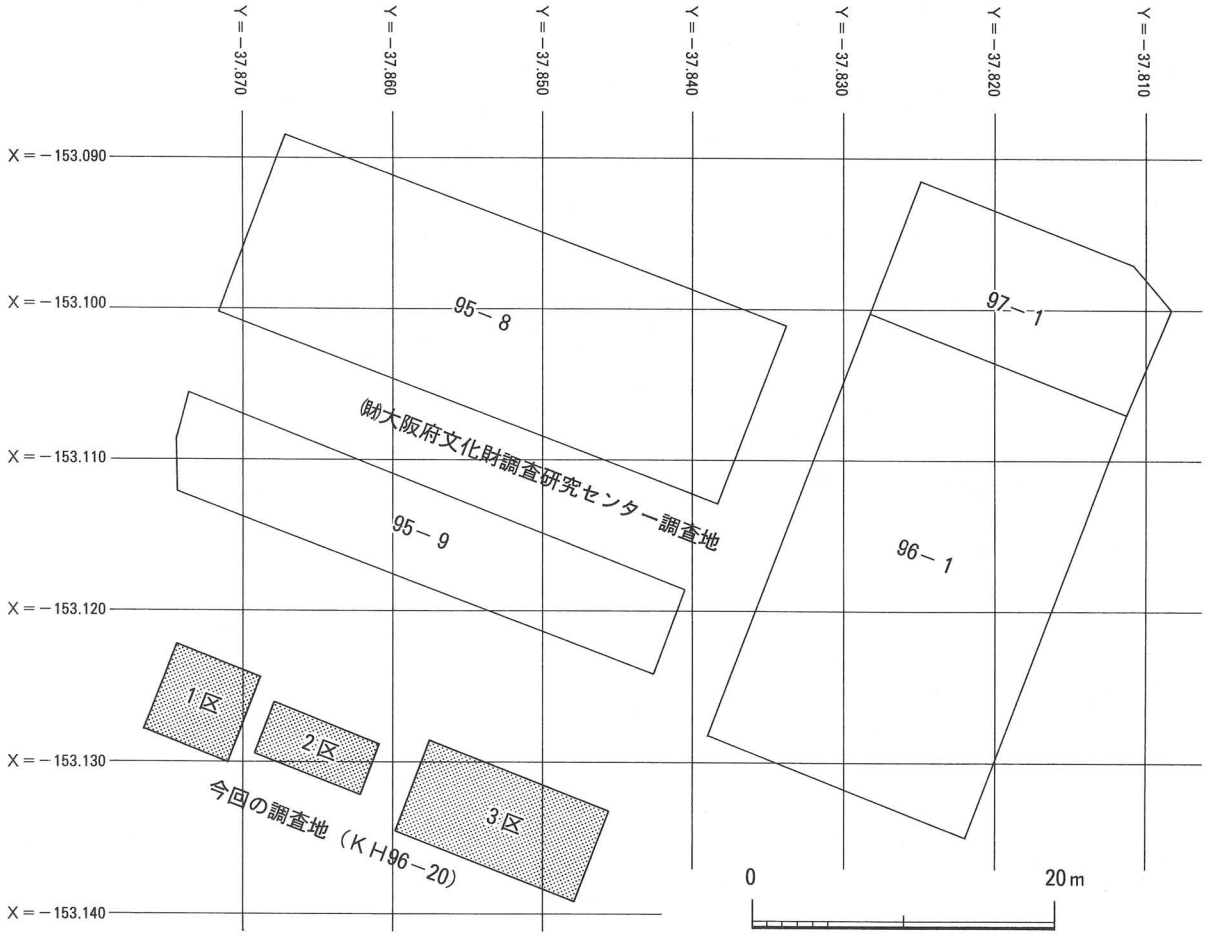
	東西		南北		
１区：	6.0ｍ	×	6.0ｍ	＝	36.00㎡
２区：	7.6ｍ	×	3.6ｍ	＝	27.36㎡
３区：	12.8ｍ	×	6.4ｍ	＝	81.92㎡
計	145.28㎡（約 145.3㎡）				

現地調査では、調査区に沿った任意のラインを設定して実測の基準とした。そして本報告に際しては、工事図面による各トレンチの角の座標値（国土座標第Ⅵ系）をもとに平面図を作成し、これに現地での図面を合成する方法をとった。

調査は三箇所を並行して実施した。現地表（標高約 T.P.＋9.1ｍ）下1.2～1.5ｍまでを機械掘削とし、以下は掘削深度である現地表下約5.0ｍまでの約3.6ｍを人力掘削により調査を実施した。断面観察のための壁は各トレンチの北・東に残しながら調査を進めた。

遺構面については、基本層序第１層の下が第１面という表現にし、第３図の土層図では太線を用いている。また基本層序名は調査地全体を通してみたおおまかな層相である。

遺構番号は三桁とし、一桁目は遺構面を表している。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1/500）

第２節　基本層序

第0Ａ層：操車場造成時の整地層で、上から盛土（撹乱層）・バラス（～拳大）・淡黄色粘土混じりシルト（ブロック状）に分かれる。３区では標高8.1ｍ前後で灰色砂礫層がみられた。これはその様相や標高からみて、北側のセンター調査地で確認されている操車場設置以前の久宝寺村と竜華村を繋ぐ道路状遺構の整地層と思われる。

第0Ｂ層：淡黄褐色粗砂層で、東へ行くに従い厚く堆積している。３区東部では灰褐色砂礫層となっており、落ち込む部分もある。第0Ａ層と同様に整地層である。

第１層：暗灰色～青灰色微砂～細砂混じりシルト。操車場設置直前の旧耕土にあたり、グライ土層である。数枚に分層が可能であるが、掘削に際して区別はしていない。上面には足跡状の窪みや落ち込みがみられ、ここには淡黄灰色粘質シルトや第0Ｂ層の砂層が堆積し、ラミナも観察できる。

第２層：淡灰黄色～淡灰褐色微砂混じりシルト。１区～２区に堆積し、グライ化して灰青色を呈する部分もあり、上面に鉄分を多く含み固く締まる。

第３層：淡灰褐色微砂混じりシルト。鉄分・マンガンを含む。１区～２区に堆積。

第４層：淡褐灰色シルト。鉄分・マンガンを多く含む土壌化層。層厚0.1～0.2ｍ。

第５・６層は河川による水成堆積層で、上面の標高は約7.3ｍを測る。

第5Ａ層：淡灰色～淡黄灰色微砂～シルト。２区より東に堆積するほぼ水平な堆積を呈する安定した層で、ラミナはほとんど認められない。上部は鉄分・マンガンを含み土壌化している。ＮＲ501上層の最終堆積部分である。層厚20～40㎝。

第5Ｂ層：灰黄色～灰褐色細砂～粗砂の互層。ＮＲ501の１区部分。層厚1.3～2.0ｍ。

第5Ｃ層：灰黄色～灰色微砂～シルトの互層。３区東部に堆積しており、ＮＲ501の下層部分にあたる。植物遺体を多量に含み、ラミナが顕著に認められる。

第６層：灰色～黄灰色～灰褐色微砂～砂礫。ＮＲ601の堆積土である。細砂～粗砂を基調とする厚い洪水砂層で、東部はＮＲ501に削平されている。

第７層以下は、２区西部から１区ではＮＲ601に削平され遺存しておらず、２区東部から３区でのみみられた。ほぼ水平な安定した堆積である。当層以下からは遺物は検出されなかった。

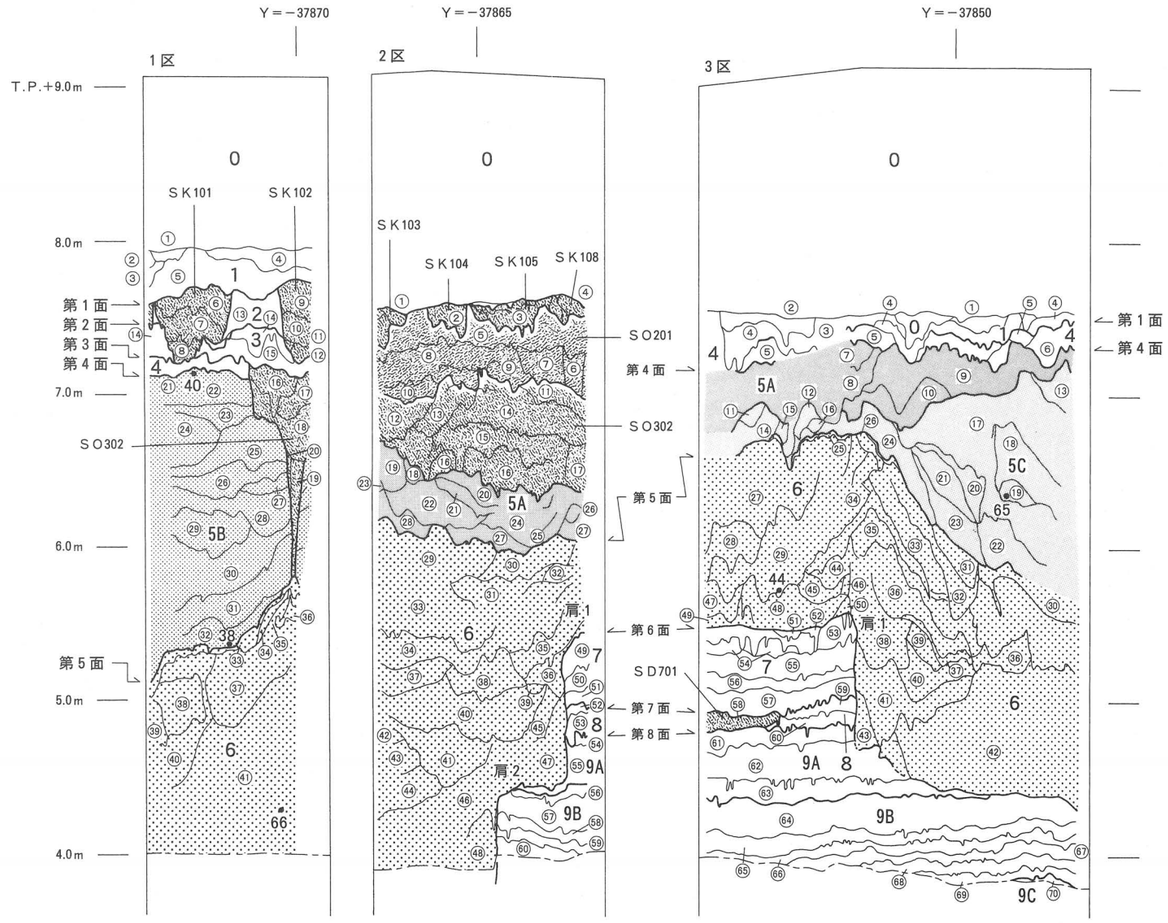
第７層：暗灰色～暗灰褐色粘土。上面には小さな凹凸がみられ、窪みには鉄分を多く含む第６層の砂が溜る。全体に細かい植物遺体を含み、下部ほど多い。また下部に炭酸鉄を多く含んでいる。

第８層：暗灰色～灰黒色粘土。細かい植物遺体を少量含み、西部の２区では微砂混じりとなっている。上部が暗灰色、下部が灰黒色を呈する土壌化層で、第７面遺構は平面的には灰黒色粘土上面で捉えたものである。

第9Ａ層：灰色～淡灰褐色微砂～シルトの互層。層厚0.4～0.5ｍを測る。以下は自然堆積層。

第9Ｂ層：淡褐色～灰色粘土の互層。層厚約0.5ｍを測る。淡褐色粘土および、淡褐色粘土と灰色粘土の互層（ラミナ状）からなる。細かい植物遺体を含み、下部ほど多く、ラミナ状に堆積する部分もある。また下部に炭酸鉄を含む。

第9Ｃ層：明灰色粘質シルト～微砂。３区東部で確認したが、掘削深度以下に至っており層厚等は不明である。



1区

①	灰褐色砂礫	第０層
②	灰色細砂混じりシルト（鉄分少々）	第１層
③	褐灰色微砂混じり粘質シルト（マンガン含む）	
④	暗灰色細砂混じりシルト	
⑤	暗灰色微砂混じり粘質シルト	
⑥	灰青色細砂混じりシルト	ＳＫ101
⑦	暗灰色微砂混じりシルト	
⑧	暗灰青色微砂混じり粘質シルト	
⑨	暗灰色細砂・小礫少混じりシルト	ＳＫ102
⑩	暗灰色微砂混じり粘質シルト	
⑪	暗灰色粘質シルト（ブロック状）	
⑫	明灰青色粘土ブロック混じり微砂	
⑬	灰青色細砂～微砂混じりシルト	第２層
⑭	淡灰褐色微砂混じりシルト（鉄分・マンガン含む）	第３層
⑮	淡褐灰色微砂混じりシルト（鉄分・マンガン含む）	
⑯	淡灰褐色粘質シルト～細砂の複雑な層（マンガン含む）	ＳＯ302
⑰	淡灰黄色粗砂・シルトブロック混じり細砂	
⑱	灰黄色シルト～細砂の複雑な層（マンガン含む）	
⑲	灰色粘土ブロック・礫（～2cm）混じり細砂	
⑳	灰色粗砂混じり微砂	
㉑	灰褐色シルト（マンガン含む）	第４層
㉒	灰褐色礫（～2cm）混じり細砂	第５Ｂ層（ＮＲ501）
㉓	灰褐色粗砂混じり微砂	
㉔	暗灰黄色微砂～粗砂の互層（ラミナ）	
㉕	暗灰黄色微砂～粗砂（植物遺体少量含む）	
㉖	淡灰褐色礫（～1cm）混じり細砂	
㉗	灰黄褐色シルト混じり微砂（植物遺体少量含む）	
㉘	黄灰褐色粗砂混じり微砂（ラミナ）	
㉙	黄灰褐色礫混じり細砂～粗砂の互層	
㉚	灰褐色細砂～礫（～1cm）の互層	
㉛	灰褐色微砂～礫（～1cm）の互層（下部に鉄分）	
㉜	暗灰黄色微砂～細砂の互層	
㉝	灰青色～灰褐色シルト（植物遺体含む）	
㉞	青灰色シルト（ラミナ。植物遺体多く含む）	
㉟	灰褐色微砂～シルト（植物遺体少量含む）	
㊱	青灰色シルト（植物遺体多く含む）	
㊲	淡黄褐色粗砂混じり細砂（下部に鉄分）	第６層（ＮＲ601）
㊳	淡黄灰色細砂～微砂（水平ラミナ）	
㊴	淡灰褐色細砂～微砂	
㊵	淡灰褐色微砂	
㊶	淡黄褐色～明灰色細砂混じり微砂（ラミナ）	

2区

①	灰青色微砂混じりシルト	ＳＫ103
②	淡灰色砂混じり粘土	ＳＫ104
③	暗灰青色粘土	ＳＫ105
④	青灰色細砂混じりシルト	ＳＫ108
⑤	褐灰色細砂混じり粘質シルト	ＳＯ201
⑥	淡灰褐色微砂混じりシルト	
⑦	褐灰色シルト（マンガン含む）	
⑧	明褐色細砂～微砂混じりシルト（マンガン含む）	
⑨	褐灰色細砂～微砂混じりシルト（マンガン含む）	
⑩	淡灰色微砂混じりシルト（マンガン含む）	
⑪	灰黄褐色シルト～微砂	ＳＯ302
⑫	淡灰色粘質シルトと黄灰色微砂の複雑な層（マンガン含む）	
⑬	淡灰色シルトブロック混じり淡灰黄色微砂	
⑭	淡灰色微砂混じりシルト（マンガン斑多く含む）	
⑮	灰色粘質シルトと黄褐色微砂の複雑な層（マンガン含む）	
⑯	青灰色粘質シルト～シルトのブロック状	
⑰	淡青灰色微砂混じり粘質シルト	
⑱	灰黄色微砂（ラミナ。植物遺体含む）	第５Ａ層（ＮＲ501）
⑲	淡黄灰色微砂（ラミナ）	
⑳	淡黄褐色微砂	
㉑	黄褐色微砂（ラミナ）	
㉒	淡黄褐色細砂混じり微砂	
㉓	灰色微砂（植物遺体含む）	
㉔	黄褐色微砂（鉄分含む）	
㉕	淡灰色細砂混じり微砂（ラミナ）	
㉖	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
㉗	淡黄灰色微砂（ラミナ）	
㉘	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
㉙	淡灰黄色礫（～2cm）混じり粗砂～微砂の互層（ラミナ）	
㉚	淡黄褐色礫混じり粗砂～微砂	
㉛	淡灰黄色細砂混じり微砂	第６層（ＮＲ601）
㉜	淡黄褐色微砂	
㉝	淡灰黄色礫（～1cm）～粗砂混じり細砂	
㉞	淡灰褐色礫（～1cm）混じり粗砂（下部鉄分含む）	
㉟	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
㊱	淡灰色微砂	
㊲	淡灰褐色礫（～1cm）混じり粗砂（粘土塊含む。下部鉄分含む）	
㊳	淡灰褐色礫（～1cm）～細砂混じり粗砂（粘土塊含む）	
㊴	明灰色粗砂	
㊵	灰色粗砂混じり細砂（粘土塊含む）	
㊶	淡灰褐色粗砂混じり微砂～細砂	
㊷	明灰色微砂	
㊸	明灰色礫混じり粗砂～細砂	
㊹	明灰色細砂混じり微砂	
㊺	黄褐色粗砂混じり細砂（鉄分含む）	
㊻	灰色礫（～2cm）混じり粗砂（粘土塊含む。鉄分含む）	
㊼	明灰色礫（～2cm）～粗砂混じり細砂（粘土塊含む）	
㊽	明灰色細砂～微砂の互層（粘土塊含む。ラミナ）	
㊾	暗灰色粘土（植物遺体、炭酸鉄少量含む）	第７層
㊿	暗褐灰色粘土（植物遺体多く、炭酸鉄少量含む）	
(51)	暗褐灰色粘土（植物遺体、炭酸鉄多く含む）	第８層
(52)	暗褐色微砂混じり粘土（植物遺体少量含む）	
(53)	灰黒色微砂混じり粘土（植物遺体少量含む）	
(54)	暗灰青色シルト混じり粘土	第９Ａ層
(55)	暗灰青色シルト～微砂の互層	
(56)	暗灰褐色シルト～粘質シルトの互層（ラミナ）	第９Ｂ層
(57)	淡褐色粘土～粘質シルト（植物遺体、炭酸鉄少量含む）	
(58)	淡灰青色粘土（植物遺体、炭酸鉄少量含む）	
(59)	淡褐色粘土（植物遺体少量含む）	
(60)	淡灰褐色粘土	

3区

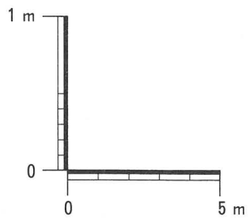
①	灰褐色砂礫	第０層
②	青灰色粘質シルト	第１層
③	灰青色微砂混じり粘質シルト	
④	青灰色シルト	
⑤	淡褐灰色微砂混じりシルト	第４層
⑥	淡灰黄褐色微砂混じりシルト	
⑦	淡灰黄褐色シルト混じり微砂	第５Ａ層（ＮＲ501）
⑧	淡灰褐色微砂（複雑なラミナ）	
⑨	淡灰色～淡黄褐色微砂（鉄分・マンガン含む）	
⑩	淡灰色粗砂混じり微砂～シルト（水平ラミナ。下部にマンガン）	
⑪	淡黄灰色微砂	第５Ｃ層（ＮＲ501）
⑫	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
⑬	淡黄灰色微砂（上部にマンガン）	
⑭	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
⑮	灰黄色微砂	
⑯	淡灰黄色微砂（ラミナ）	
⑰	灰黄色微砂（ラミナ。植物遺体少量含む）	
⑱	黄灰色～灰色微砂（ラミナ状に植物遺体含む）	
⑲	灰色シルト（植物遺体多く含む）	
⑳	灰色微砂～シルト（植物遺体少量含む）	
㉑	灰黄色～灰色シルト～微砂（植物遺体少量含む）	
㉒	淡灰色シルト～微砂（植物遺体少量含む）	
㉓	暗灰色粘質シルト～シルトの互層（植物遺体少量含む）	
㉔	淡灰黄色微砂～暗灰色シルト（植物遺体少量含む）	
㉕	灰色シルト	
㉖	灰色微砂（ラミナ）	
㉗	淡灰黄色微砂～粗砂の互層	
㉘	淡灰黄色礫（～1cm）混じり粗砂（ラミナ）	
㉙	淡灰褐色微砂（ラミナ）	
㉚	明灰色微砂～シルト（ラミナ。植物遺体含む）	
㉛	暗灰色シルト～粘質シルト（ラミナ。植物遺体含む）	
㉜	灰褐色微砂～シルト（ラミナ）	
㉝	灰色～淡灰褐色粗砂混じり微砂～シルト	
㉞	暗灰色シルト（植物遺体含む）	
㉟	淡灰色微砂～シルト	
㊱	淡灰褐色細砂～粗砂（鉄分含む）	第６層（ＮＲ601）
㊲	灰色シルト（植物遺体含む）	
㊳	暗灰色シルトと灰褐色微砂の複雑な層	
㊴	明灰色細砂～粗砂の互層（鉄分含む）	
㊵	淡灰褐色微砂（ラミナ）	
㊶	淡灰褐色微砂～粗砂の互層（ラミナ。鉄分含む）	
㊷	淡灰色礫（～2cm）混じり微砂～粗砂	
㊸	灰色細砂～粗砂（粘土塊含む）	
㊹	淡灰色粗砂	
㊺	淡灰褐色微砂	
㊻	灰色砂礫	
㊼	淡灰褐色微砂～粗砂（植物遺体含む）	
㊽	灰色礫混じり粗砂（上部鉄分含む）	
㊾	淡灰褐色微砂（ラミナ。植物遺体含む）	
㊿	暗灰色シルト（植物遺体含む）	
(51)	褐灰色粘土（植物遺体多く含む）	第７層
(52)	灰色粘土質シルト	
(53)	暗灰褐色粘土（植物遺体少量含む）	
(54)	淡灰色粘土（ラミナ。植物遺体少量含む）	
(55)	灰色粘土（植物遺体、炭酸鉄少量含む）	
(56)	暗灰褐色粘土（植物遺体、炭酸鉄多く含む）	
(57)	灰色粘土（植物遺体、炭酸鉄多く含む）	
(58)	淡褐灰色粘土（植物遺体少量、炭酸鉄含む）	ＳＤ701
(59)	暗灰色粘土	第８層
(60)	灰黒色粘土	
(61)	灰色～灰青色微砂～シルトの互層	第９Ａ層
(62)	淡灰色～灰色細砂～シルトの互層	
(63)	淡灰褐色粘土と灰色シルト～微砂の互層（ラミナ）	
(64)	淡褐色粘土（植物遺体少量含む）	第９Ｂ層
(65)	淡褐色～灰色粘土（ラミナ。植物遺体少量、炭酸鉄多く含む）	
(66)	淡褐灰色粘土	
(67)	褐灰色～灰色粘土（ラミナ。炭酸鉄多く含む）	
(68)	淡褐色～灰色粘土（ラミナ。植物遺体、炭酸鉄多く含む）	
(69)	淡褐色粘土	
(70)	明灰色微砂～シルト	第９Ｃ層

遺構

5A 5B 5C　ＮＲ501

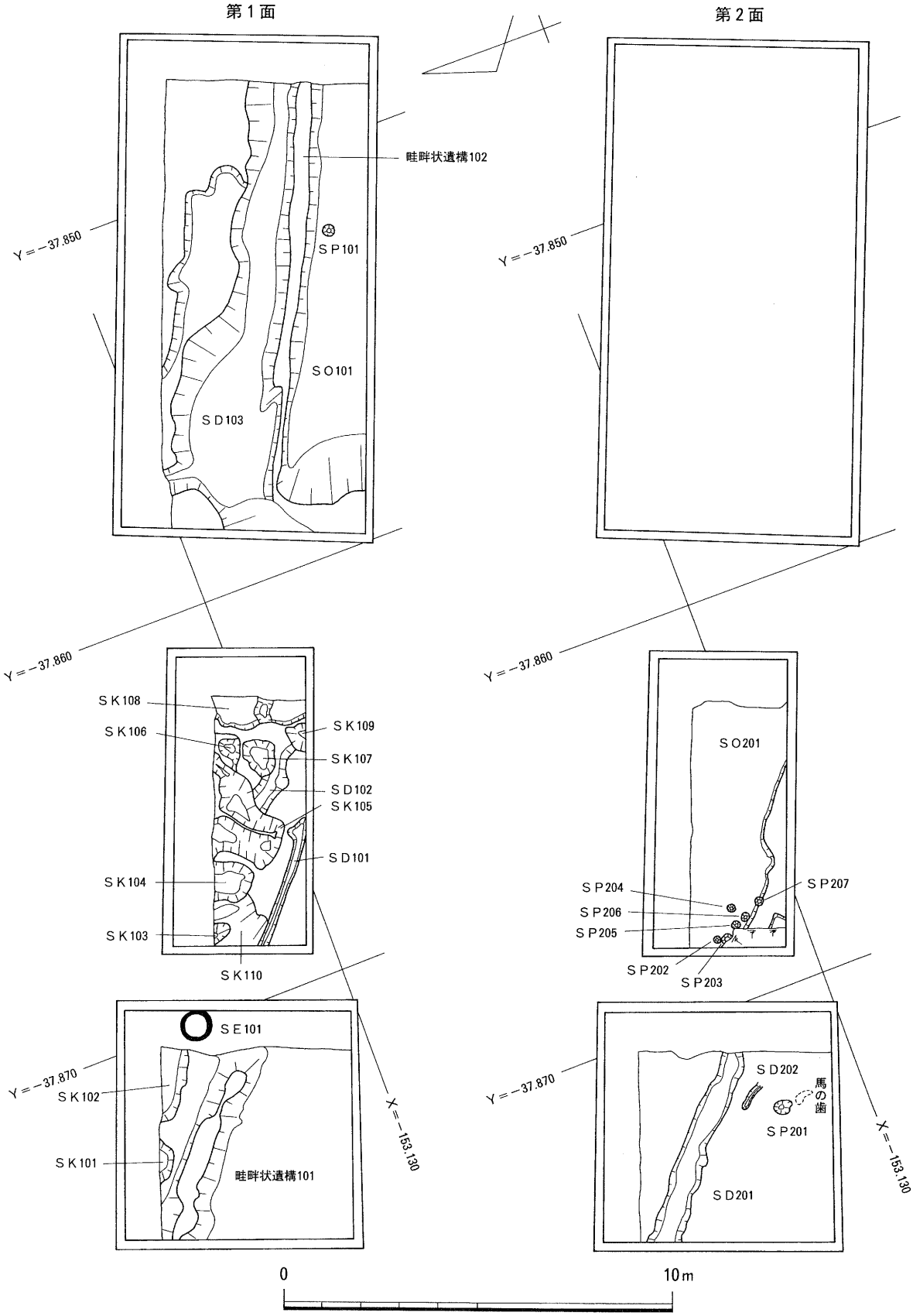
6　ＮＲ601

第０層：盛土・整地層
第１層：暗灰色～青灰色微砂～細砂混じりシルト
第２層：淡灰黄色～淡灰褐色微砂混じりシルト
第３層：淡灰褐色微砂混じりシルト
第４層：淡褐灰色シルト
第５Ａ層：淡灰色～淡黄灰色微砂～シルト
第５Ｂ層：灰黄色～灰褐色細砂～粗砂の互層　ＮＲ501
第５Ｃ層：灰黄色～灰色微砂～シルトの互層
第６層：灰色～黄灰色～灰褐色微砂～砂礫　ＮＲ601
第７層：暗灰色～暗灰褐色粘土
第８層：暗灰色～灰黒色粘土
第９Ａ層：灰色～淡灰褐色微砂～シルトの互層
第９Ｂ層：淡褐色～灰色粘土の互層
第９Ｃ層：明灰色粘質シルト～微砂



第３図　調査地北壁（Ｓ＝縦1/40、横1/200）

第３節　検出遺構と出土遺物



第４図　第１・２面平面図（Ｓ＝1/150）

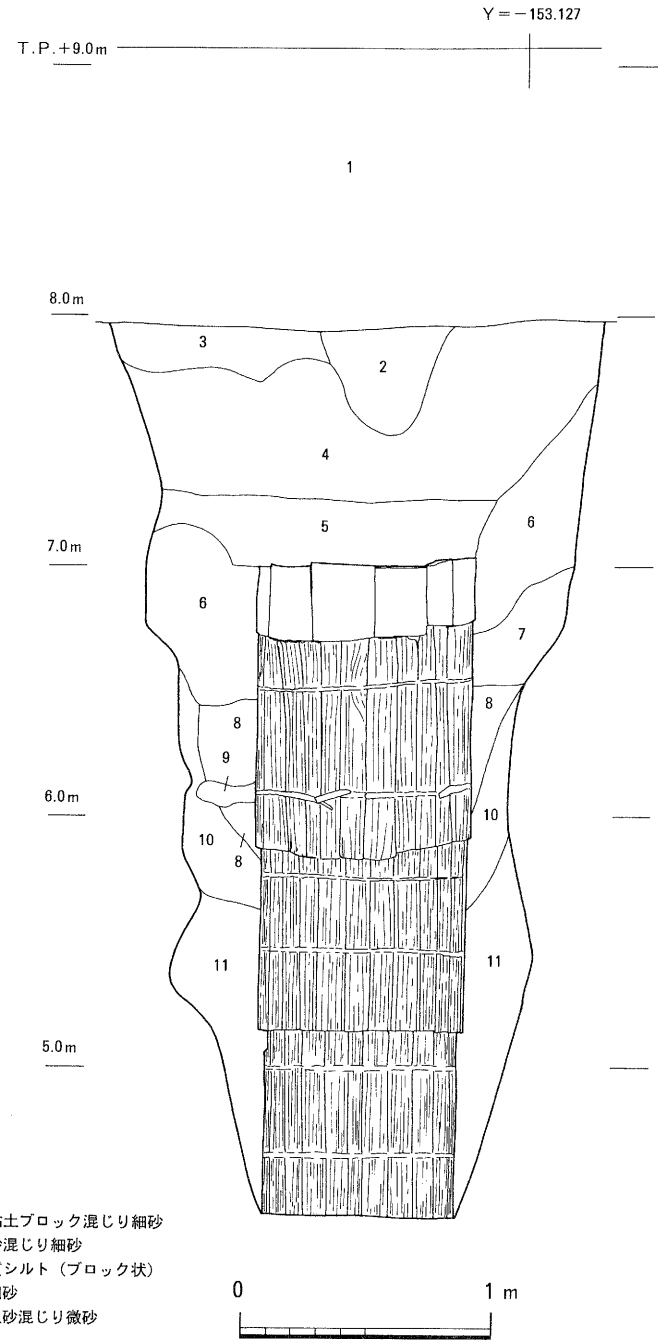
〈第１面〉

操車場造成時の盛土（第０層）、及び旧耕土（第１層）を除去した段階で捉えた面である。上面の標高は7.7～7.5ｍを測り、東ほど低くなっている。検出しえた遺構には井戸１基（ＳＥ101）、土坑10基（ＳＫ101～110）、溝３条（ＳＤ101～103）、落ち込み１基（ＳＯ101）、ピット１個（ＳＰ101）、畦畔状遺構２条（畦畔状遺構101・102）がある。

ＳＥ101

１区東部に位置する。掘形は機械掘削を終えた段階の標高約8.0ｍで、旧耕土を切る状況で認められたが、当初は撹乱として捉えていた。そしてその後、標高約7.0ｍで直径約0.8ｍの瓦枠が検出された。掘形は上部で直径約1.7ｍを測り、垂直近くに掘られている。最下部は標高約4.4ｍ、後述する堰部材の集積部分に達している（図版一）。構造は遺存する瓦枠が１段で、その下に桶枠３段というものである。瓦枠は一周９枚の井戸枠瓦で構成されている。桶枠はいずれも高さ約86cmで、約24枚の板（厚さ２～３cm）から成り、二～三段のタガを有する。直径は上から約85cm・80cm・75cmと序々に小さくなっており、連結には約10数cmを重ねている。最下段桶枠の下端は外表面を削って尖らせている。枠内埋土はおおむね灰青色系粘土～粘質シルト、掘形埋土は下部が黄灰色系細砂、上部が粘土～粘質シルトをブロック状に多く含んでいる。なお当初は撹乱と捉えており、また調査区東畦に重複していたこともあり、断面図は一部復元したものとなっている。旧耕土を切るもので、操車場造成時まで機能していた井戸と考えられる。

井戸枠瓦は凸面にくさび形文をジグザグに配列する通有のもので、くさび形文には二種類が認められた（１・２）。１は縦26.9cm・横26.3cm・厚さ約2.9cmを測る。２は縦27.0cm・横25.1cm・厚さ約3.1cmを測り、

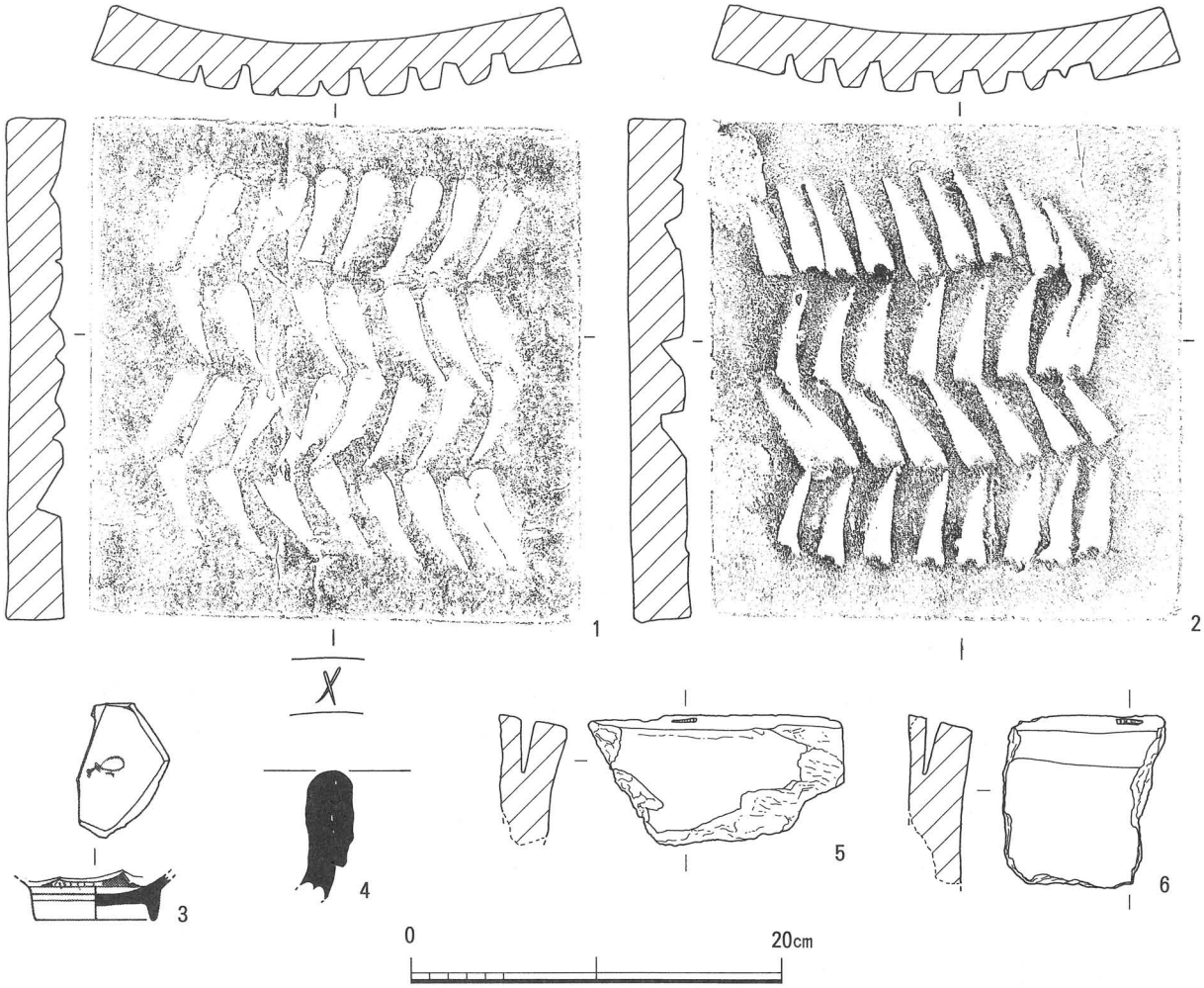


1．盛土
2．黄灰色粘土ブロック混じり微砂
3．灰褐色細砂混じり粘土
4．灰褐色細砂混じり粘土～粘質シルトの互層（鉄分含む）
5．暗灰色粘土ブロック混じりシルト
6．灰褐色細砂混じり粘土（ブロック状）
7．暗灰黄色粘土ブロック混じり細砂
8．淡灰色粗砂混じり細砂
9．暗灰色粘質シルト（ブロック状）
10．暗黄灰色細砂
11．淡灰褐色粗砂混じり微砂

第５図　ＳＥ101断面図（Ｓ＝1/30）

くさび形文の短辺部分内側に丸い突起を有している。1は一側面に×印のヘラ記号を施している。共に色調は灰黒色であるが、焼成むらのため部分的に淡灰色を呈している。

枠内からは近世の国産陶磁器等が出土しており、肥前系磁器碗（3）・備前焼甕（4）・瓦質製品（5・6）を図化した。3は18世紀末に出現するとされるいわゆる広東碗である。見込みの銘は「寿」の変形であろうがかなり崩れている。4は帯状の口縁部を成す大甕で、胎土には山土を用いている。間壁編年のⅤ期、年代では16世紀以降に比定されている。5・6は井戸枠瓦かもしれないが不明である。側面に深さ3㎝程度を測る断面くさび状の長方形の穴を有する。[註1]



第6図　ＳＥ101出土遺物（Ｓ＝1/4）

ＳＫ101～110

1区・2区で検出され、いずれも平面不定形のもので、2区では密集する状況である。1区の畦畔状遺構101の北側、2区のＳＤ101の北側で検出した。土坑の埋土には、第1層と同様の土層のもの（ＳＫ103・105・108・109）、および第1層が撹拌されたようなブロック状を呈するのもの（ＳＫ101・102・104・106・107・110）がみられ、前者の土坑内壁は鉄分で固く締まっている。遺物はＳＫ108から平瓦片が出土している。これらの土坑は層位的にみて近世のもので、規格性も認められず性格としては耕作に伴う土採り坑等が考えられよう。法量等は表2にまとめた。

表２　第１面土坑法量表（cm）

ＳＫ	地区	径	深さ	埋土
101	１区	113× 40	50	灰青色細砂混じりシルト・暗灰色微砂混じりシルト・暗灰青色微砂混じり粘質シルト
102	１区	186× 67	55	暗灰色細砂・小礫少混じりシルト・暗灰色微砂混じり粘質シルト・明灰青色粘土ブロック混じり微砂
103	２区	48× 42	27	灰青色微砂混じりシルト
104	２区	100×100	31	淡灰色砂混じり粘土（第１層のブロック状でマンガン含む）
105	２区	275×180	40	暗灰青色粘土
106	２区	100× 53	12	淡灰色砂混じり粘土（第１層のブロック状でマンガン含む）
107	２区	92× 83	23	淡灰色砂混じり粘土（第１層のブロック状でマンガン含む）
108	２区	230× 90	20	青灰色細砂混じりシルト
109	２区	80× 53	30	暗灰青色粘土
110	２区	138×118	12	淡灰色砂混じり粘土（第１層のブロック状でマンガン含む）

ＳＤ101

２区で検出した北西－南東方向の溝で、幅約20cm・深さ２～５cm・検出長約3.3ｍを測る。断面皿状を呈し、埋土は第１層に類似する暗灰色微砂混じりシルトである。西部でＳＫ110を切っている。１区の**畦畔状遺構101**と方向性が共通しており、何らかの関連が考えられる。

ＳＤ102

２区中央で検出した溝で、法量は幅約55cm・深さ４～10cm・検出長約1.8ｍを測る。断面逆台形を呈し、埋土は青灰色微砂混じりシルトである。土坑群に削平されている。

ＳＤ103

３区を横断する溝で、法量は幅1.0～2.8ｍ・深さ10～20cm・検出長約11.3ｍを測る。断面皿状に近く、埋土は第１層に類似する灰青色系の粘質シルト～シルトである。

ＳＯ101

３区南半部を占め、検出規模は南北2.3ｍ・東西10.8ｍを測る。深さ10～15cmで、埋土は第１層にあたる灰青色微砂混じり粘質シルトである。水田の可能性があるが確認しえなかった。

ＳＰ101

３区のＳＯ101底部で検出したピットで、平面形は直径約32cmのほぼ円形を呈する。断面Ｕ字形で、深さ約15cmを測り、埋土はＳＯ101と同じく灰青色微砂混じり粘質シルトである。

畦畔状遺構101

１区で長さ5.5ｍにわたって検出した北西－南東方向の畦畔状遺構で、上面の標高は約7.7ｍである。幅は上幅0.4ｍ～0.5ｍ・下幅1.0ｍ～1.4ｍ、高さは最大約0.3ｍを測る。上部が淡灰色細砂混じりシルト、下層が淡灰褐色微砂混じりシルトで構成されるが、盛土されたものかどうかは明確にできなかった。上部には鉄分が浸透している。

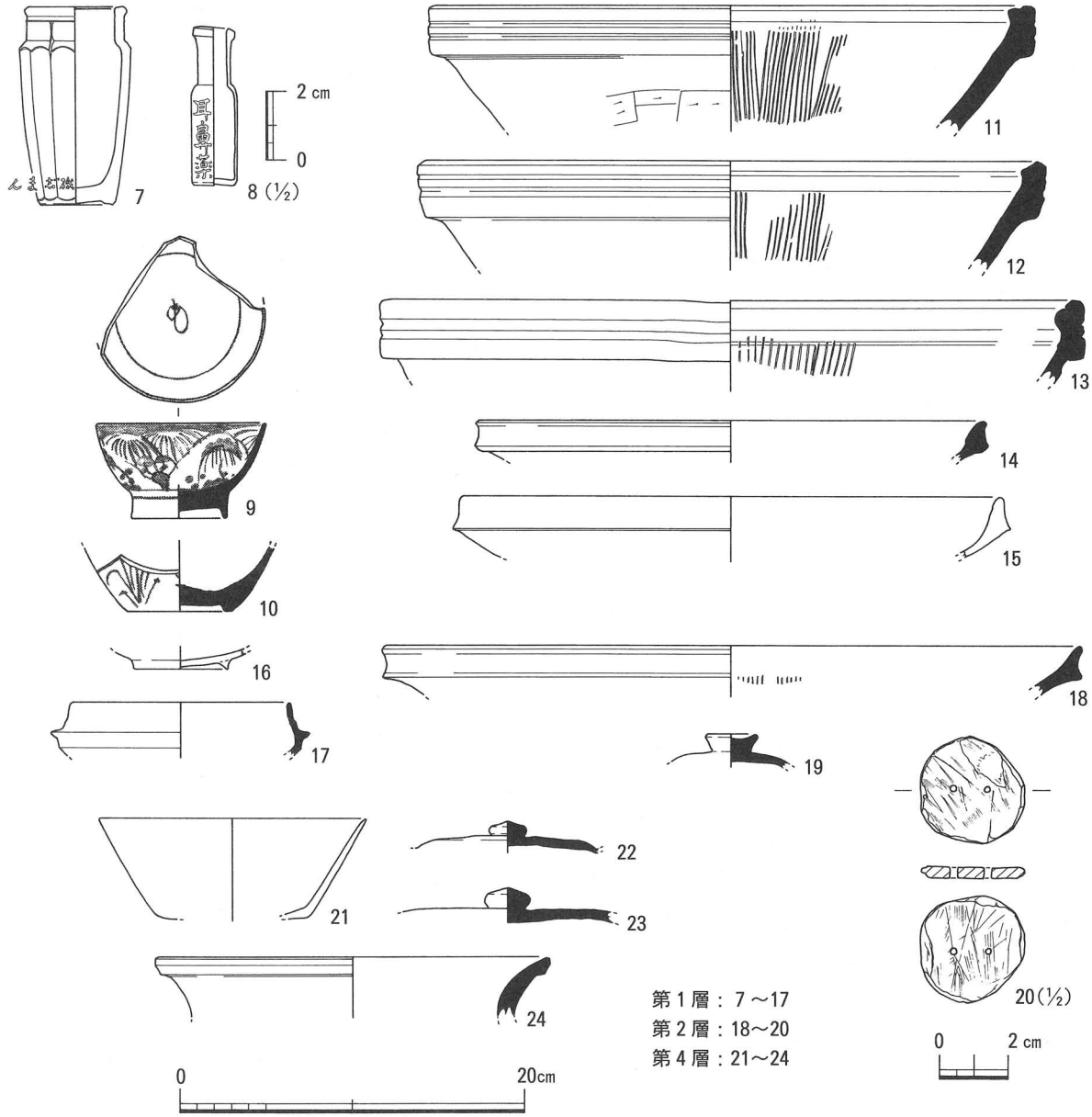
畦畔状遺構102

ＳＤ103とＳＯ101を隔てる北西－南東方向の畦畔状遺構で、上面の標高は約7.5ｍである。検出長10.8ｍ・上幅10～48cm・下幅35～100cm・高さ10～20cmを測る。淡灰褐色微砂混じり粘土質シルト（グライ化。マンガン・炭少量含む）で構成されるが、盛土されたものかどうかは明確にできなかった。

第１層出土遺物

７はガラス製瓶で、体部は面取りした形状で横断面14角形を成し、色調は深緑色を呈する。体部下位に右から『磯志゛まん』という陽刻が施される海苔瓶である。器高11.4cm・口径5.9cm。８は透明ガラス製瓶で、体部に縦書きで『耳鼻薬』と陽刻されており薬瓶である。器高4.6cm・口

径1.2cm 。7・8共にガラスには気泡が多く含まれ、外面には縦方向に二等分する低い凸線が認められる。9・10は肥前系磁器広東碗・壷である。9は高台畳付き露胎で、わずかに離れ砂が付着する。見込みにはＳＥ101出土の3と同様に「寿」の変形した銘を描くが、3よりも文字に近い。外面には松竹梅を描く。10は内面無釉で、高台裏中央は釉切れし、高台畳付きは露胎で離れ砂が付着する。外面には草花文を描く。11～13は備前焼と思われる擂鉢である。いずれも卸目原体幅は約3cmであるが、一単位当りの卸目本数は11が12本、12が11本、13が8本と各々異なる。陶器擂鉢（14）は丹波焼と考えられる。色調は褐色を呈する。15は土師器炮烙で、底部外面が煤けている。19世紀以降に比定される。16は瓦器椀である。暗文は不明であるが、高台の形状から時期は12世紀後半頃に比定されよう。[註2] 5世紀末の須恵器杯身（17）と共に下位層からの混入である。他に3区で銅銭『寛永通寶』が2点出土している。



第7図　包含層出土遺物（Ｓ＝1/4、1/2）

〈第２面〉

１区・２区で北西－南東方向の溝２条（ＳＤ201・202)、落ち込み１基（ＳＯ201)、ピット７個（ＳＰ201～207）を検出した。標高は約7.4ｍを測る。

ＳＤ201

北西－南東方向の溝で、位置的には第１面の**畦畔状遺構**101に重複している。法量は検出長約5.3ｍ・幅0.5～0.8ｍ・深さ約５㎝を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡灰褐色粘質シルト混じり微砂である。

ＳＤ202

ＳＤ201の南約0.4ｍに位置し、法量は検出長約0.8ｍ・幅約15㎝・深さ約５㎝を測る。断面皿状を呈し、埋土は淡灰青色シルト混じり微砂である。

ＳＯ201

２区のほぼ全域に及ぶ南から北への落ち込みで、深さは約50㎝を測る。埋土は上部がマンガンを含む褐灰色系のシルト、下部は灰色～灰黄色微砂～粘質シルトのブロック状の堆積である。下部は埋土の状況からみて、下位のＳＯ302上層部分の可能性があり、同一遺構と捉えられるのかもしれない。

ピット

２区のＳＰ202～207はＳＯ201の底部で検出したものである。１区のＳＰ201南側の標高約7.4ｍでは、馬の歯数点が南北約55㎝にわたって並んで出土しているが、ピットとの関連は不明である。ピットの法量等は**表３**にまとめた。

表３　第２面ピット法量表（㎝）

ＳＰ	地区	径	深さ	埋　　土
201	１区	50×37	9	淡灰黄色微砂混じり粘質シルト
202	２区	18×17	18	淡灰色微砂混じりシルト
203	２区	32×26	10	淡灰色微砂混じりシルト
204	２区	21×19	2	淡灰色微砂混じりシルト
205	２区	25×20	25	淡灰色微砂混じりシルト
206	２区	25×24	16	淡灰色微砂混じりシルト
207	２区	23×23	23	淡灰色微砂混じりシルト

第２層出土遺物

陶器擂鉢（18）は丹波焼と考えられる。色調は淡黄褐色を呈する。須恵器杯蓋（19）は古墳時代中期に比定されるもので、かなりローリングを受けている。20は滑石製双孔円盤で、色調は灰緑色を呈する。やや摩滅しているが、両面・周縁に線状痕が見られる。19・20は下位層からの混入であろう。他に１区から銅銭『寛永通寶』が１点出土している。

〈第３面〉

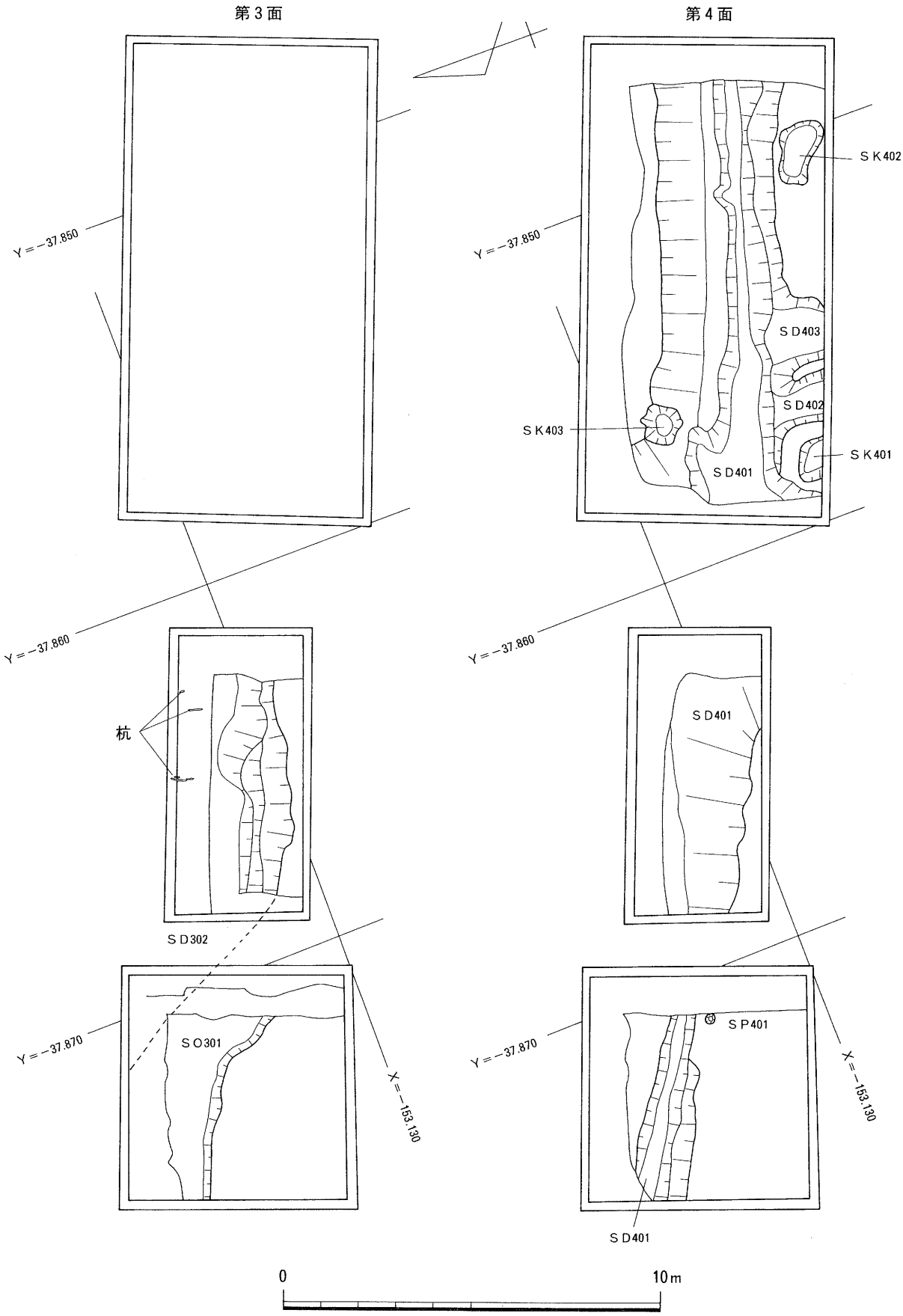
１・２区の標高約7.0～7.2ｍで落ち込み２基（ＳＯ301・302）を検出した。

ＳＯ301

１区北半部に位置する南から北への浅い落ち込みで、深さは数㎝～10㎝程度を測る。埋土は遺構面を覆う第３層にあたる淡灰褐色微砂混じりシルトである。

ＳＯ302

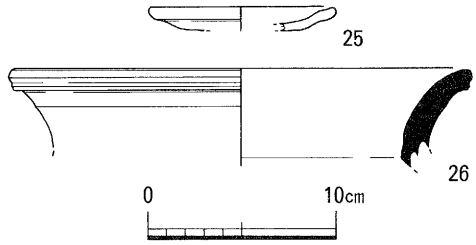
１区北東部から２区のほぼ全体を含む、南から北への落ち込みである。平面形は２区では調査区に沿った東西方向のやや弧状の肩を成し、西部は北方向に屈曲している。３区までは続いていないことから東部も北に屈曲すると思われ、全体的には円弧状の掘方が想定できる。検出部分での深さは最大約0.7ｍを測る。埋土はおおむね灰色～淡灰色の微砂・シルト・粘質シルトが混ざ



第８図　第３・４面平面図（Ｓ＝1/150）

り撹拌された層が堆積している。２区北畦内では、頭部がやや北に傾いた状態で底部に打ち込まれたような杭が数本みられ、また１区北壁でも底部から深さ約0.8ｍに及ぶピット状の落ち込みが確認でき、杭の痕跡の可能性がある。遺構の性格は不明であるが、溜め池等が考えられる。

遺物は近世までの土器・瓦・陶磁器が少量出土しているが、図化しえたものは土師器皿（25）・須恵器壷（26）のみである。25はいわゆる「て」の字口縁皿で、平安時代後期頃に比定されるものである。摩滅が著しい。26は口縁部内面に釉が掛かるもので、時期は古墳時代までは遡らないと思われる。



第９図　ＳＯ302出土遺物（Ｓ＝1/4）

〈第４面〉

標高約7.3ｍの微砂～シルト層上面にあたる。検出遺構には調査地を横断する北西－南東方向の溝１条（ＳＤ401）と、３区でＳＤ401に合流する状況の溝２条（ＳＤ402・403）、土坑２基（ＳＫ401・402）、１区でピット１個（ＳＰ401）がある。これらは中世～近世の遺構と考えられる。また３区ではＳＤ401に切られる土坑１基（ＳＫ403）がある。

ＳＫ401

３区南西部、ＳＤ401とＳＤ402に囲まれる部分に位置しており、両溝との有機的な関連が考えられる。検出部の法量は東西120㎝・南北45㎝・深さ約15㎝を測り、南は調査区外に続く。断面逆台形を呈し、埋土は上層が褐灰色微砂混じり粘質シルト、下層が褐色シルトブロック混じり淡灰褐色微砂である。遺物は出土していない。

ＳＫ402

３区南東部に位置し、ＳＤ401南肩部に隣接する平面不定形の土坑である。法量は平面182×107㎝・深さ５～10㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ401

検出長約30ｍを測り、方向は３区ではほぼ調査区に平行し、西の１・２区ではやや北に方向を変えている。２区では第３面落ち込み（ＳＯ302）により北部は削平されている。３区では中央がやや深くなる二段掘り状になっており、東端部で幅約3.0ｍ・深さ約0.5ｍを測る。１区では深さ約0.1ｍと浅くなっている。底部のレベルでは東・西であまり差はない。埋土は灰褐色系の微砂混じりシルトを基調とする。なお３区西部では北・南に、また２区東部でも南に幅が増しており、溝が屈曲するような状況であることから、２～３区間に当溝に直交するような溝の存在が考えられる。

遺物は古墳時代後期～近世の土器・陶磁器が出土しており、27～31を図化した。27は唐津焼皿である。釉は淡黄褐色の総釉で、見込み及び底部外面には三箇所に砂目痕が残る。高台は三日月高台である。時期は17世紀前葉に比定される。28は黒色土器Ａ類の椀で、摩滅が著しい。土師器皿（29）は奈良時代のものであろう。暗文は不明で、底部には指頭圧痕が残り、ヘラケズリは施されていない。須恵器杯身（30・31）は７世紀前半、飛鳥Ⅱ期頃に比定されるものである。[註3] 30は淡灰色、31は暗灰色を呈する。

ＳＤ402

３区西部でＳＤ401から南に伸びる溝で、検出長約1.0ｍ・幅1.1～1.4ｍ・深さ約20㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は灰褐色微砂混じりシルトの単層である。ＳＤ401との切り合いは認められず、同時に機能していたものと思われる。底部のレベルはＳＤ401底部よりも約15㎝高い。遺物は出土していない。

ＳＤ403

ＳＤ402の東側に隣接して平行する溝で、検出長約0.9ｍ・幅1.4～1.9ｍ・深さ約20㎝を測る。断面逆台形を呈し、埋土は灰褐色シルト～淡灰色微砂の互層状を呈し、マンガンを少量含んでいる。ＳＤ402と同様の溝であろう。遺物は出土していない。

ＳＰ401

１区東部、ＳＤ401の南に位置するピットで、平面形は直径約24㎝の円形を呈する。断面Ｕ字形で、深さ約40㎝を測り、埋土は淡灰色シルト（マンガン含む）である。

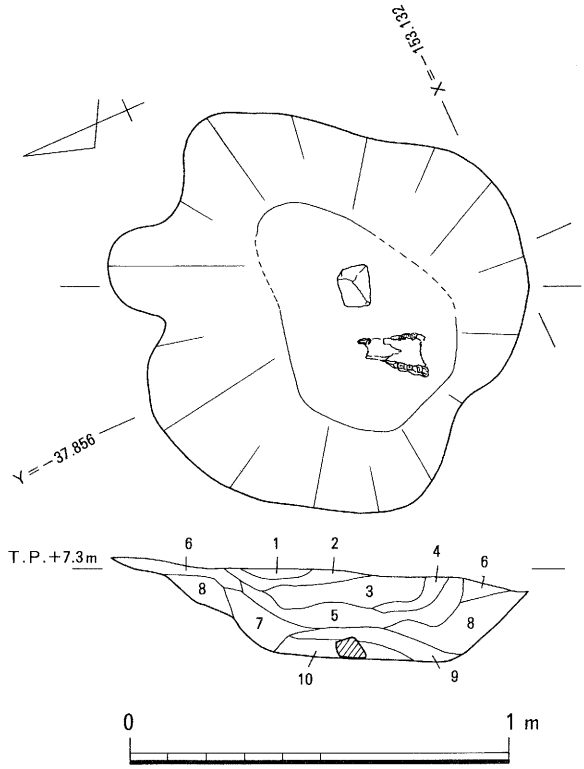
ＳＫ403

ＳＤ401掘削時に北肩部で検出した土坑で、上部はＳＤ401に削平されている。直径約1.0ｍの平面不定形な土坑で、断面逆台形を呈し、深さ約25㎝を測る。埋土は灰褐色系のシルトを基調とするもので、中位には炭層がみられ、また埋土全体にも炭が多量に含まれている。

底部中央では焼けた拳大の石が１個検出され、またその西側の底からやや浮いた炭層（第５層）中からは歯の遺存する馬の頭蓋骨（？）が正位で出土している。歯は掘削中に数本を取り上げてしまったが、本来は完全な状態であったと思われる（図版九）。

土坑の性格であるが、頭蓋骨の出土状況が正位であること、また埋土の堆積状況から当土坑は自然に埋まったものではなく意図的に埋められたと推察されることから、祭祀等の何らかの理由で頭蓋骨を埋納した土坑と捉えられよう。

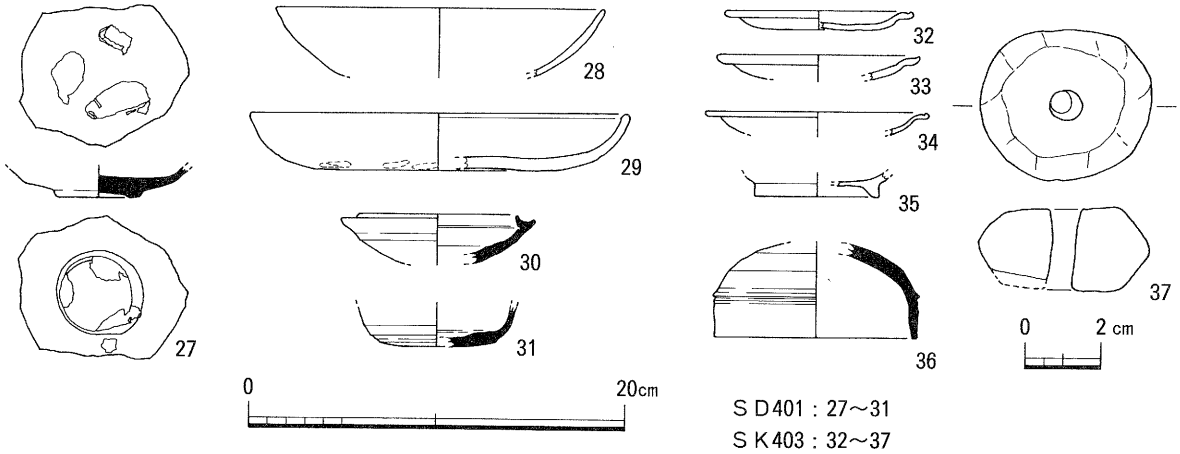
土器では平安時代中期～後期頃に比定される土師器「て」の字口縁皿（32～34）、黒色土器椀（35）、５世紀末頃の須恵器杯蓋（36）、そして時期不明の土製紡錘車（37）がある。33は口縁部に灯芯痕と思われる煤の付着が認められ灯明皿であろう。37は算盤玉形紡錘車で、片面が一部欠損している。法量は直径4.0～4.4㎝・厚さ約2.3㎝・孔径約0.8㎝を測る。淡灰褐色を呈する生駒西麓産と思われる胎土で、火を受けている可能性があり、片面が黒色を呈する。36・37は混入であろう。



第10図　ＳＫ403平面・断面図（Ｓ＝1/20）

第４層出土遺物

21は土師器高杯であろう。摩滅が著しく調整等は不明である。22・23は奈良時代頃の須恵器杯蓋である。22は天井部から屈曲したのち口縁部に至る形態である。22は淡青灰色、23は灰白色を呈する。24は須恵器壷で口縁部外面に厚く釉が掛かる。摩滅しており古墳時代のものであろう。



第11図　ＳＤ401・ＳＫ403出土遺物（Ｓ＝1/4、1/2）

〈第５面〉

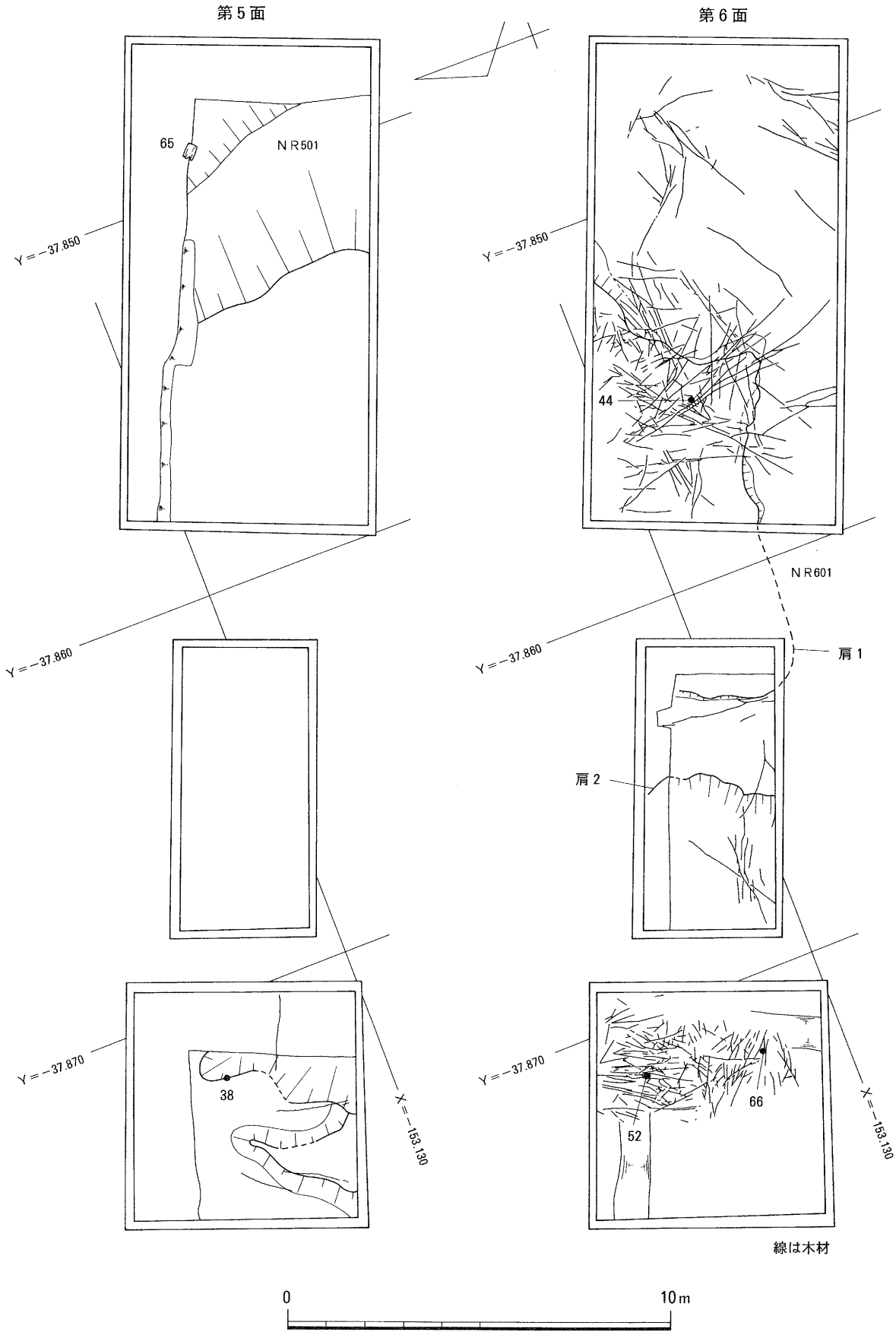
ＮＲ501

２・３区で第４面（標高約7.2～7.3ｍ）を構成する微砂～シルト層は、３区中央から東に、また１区では細砂～粗砂層が西に落ち込んでおり、この部分を河川（ＮＲ501）とした。

２・３区では、２区で標高約6.1ｍ、３区で約6.7ｍ以下の粗砂層（ＮＲ601）をベースとして、３区中央の南北方向のほぼ直線的な肩から東に落ち込み、深さは1.5ｍ以上を測る。堆積土は微砂～シルト層を基調とし、上層（第5A層）はほぼ水平な堆積、下層（第5C層）はラミナが顕著にみられ、北壁では西から東、東壁では南から北に下がるラミナである。下層は全体に植物遺体を多量に含んでおり、未分解の植物堆積層も認められる。下層は下位の河川（ＮＲ601）の最終段階の堆積部分とも捉えられ、穏やかな水流が推察される。そして上層が堆積する頃にはほとんど滞水状態になっていたものと思われる。なおＮＲ601とは一部で認められた灰色シルトの薄層を境とした。一方、１区では細砂～粗砂層が優勢な堆積土（第5B層）で、ラミナが西に下がる状況で、ある程度の水流が窺え流木も見られる。ＮＲ601との分離は難しいが、３区での灰色シルト層と同様の層が標高5.8～5.2ｍで西に下がる状況が認められこれを境とした。１区以西の細砂～粗砂層と３区東部以東の微砂～シルト層が、同時期に機能していた河川かどうかは明確ではないが、１区が本流、３区が支流とも考えられよう。

出土土器には弥生時代前期～古墳時代中期の土器があり、38・39－１区、40・41－２区、42・43－３区を図化した。

須恵器瑞（38）は１区の標高約5.4ｍ、川床とした灰色シルト層上面で出土したもので、土圧のため口縁部が破損していたが完形品である。法量は口径8.5㎝・器高9.8㎝・体部最大径9.9㎝を測る。口縁部外面に波状文を施し、頸部および底体部外面はナデである。体部から頸部へのラインが屈曲せず緩やかにカーブするのが特徴的である。形態からみてＴＫ208型式を下ることはな



第12図　第５・６面平面図（Ｓ＝1/150）

いと思われる。甕（39）は体部外面に斜格子タタキを施すもので、韓式系土器であろう。口径19.2cmを測る。土師器小型丸底壷（40）は1区の標高約7.1mで出土した完形品で、底部に黒斑を有する。摩滅のため不明瞭であるが、口縁部外面は横方向のヘラミガキと思われる。口径8.2cm・器高9.0cm・体部最大径9.4cmを測る。甕（41）・高杯（42）と共に布留式期新相に比定されよう。42は脚柱部内面をヘラケズリする。43は弥生時代後期の鉢であろう。他に3区北東部からの遺物として木製刳物桶（65）がある。横位でほぼ水平な状態で出土しており、出土レベルは標高約6.45mを測る。縦木取りで内面下部に突帯を巡らせるもので、底板を上から落とし込むタイプの桶である。全周の3／4程度、底部からの高さは41.3cmが遺存している。器壁の厚さは3.0～0.8cm、突帯部分[註4]では最大4.8cm、下端部では約3.3cmを測り、縦断面は上方に先細りになっている。現状での横断面は40×28cmの楕円形を呈するが、出土状況からみて土圧のために変形したものである可能性が高い。

〈第6面〉

2区東部から3区北西部にかけて、標高約5.5mの暗灰色粘土（第7層）をベースとして、調査地全域にわたる砂層を河川（NR601）とした。

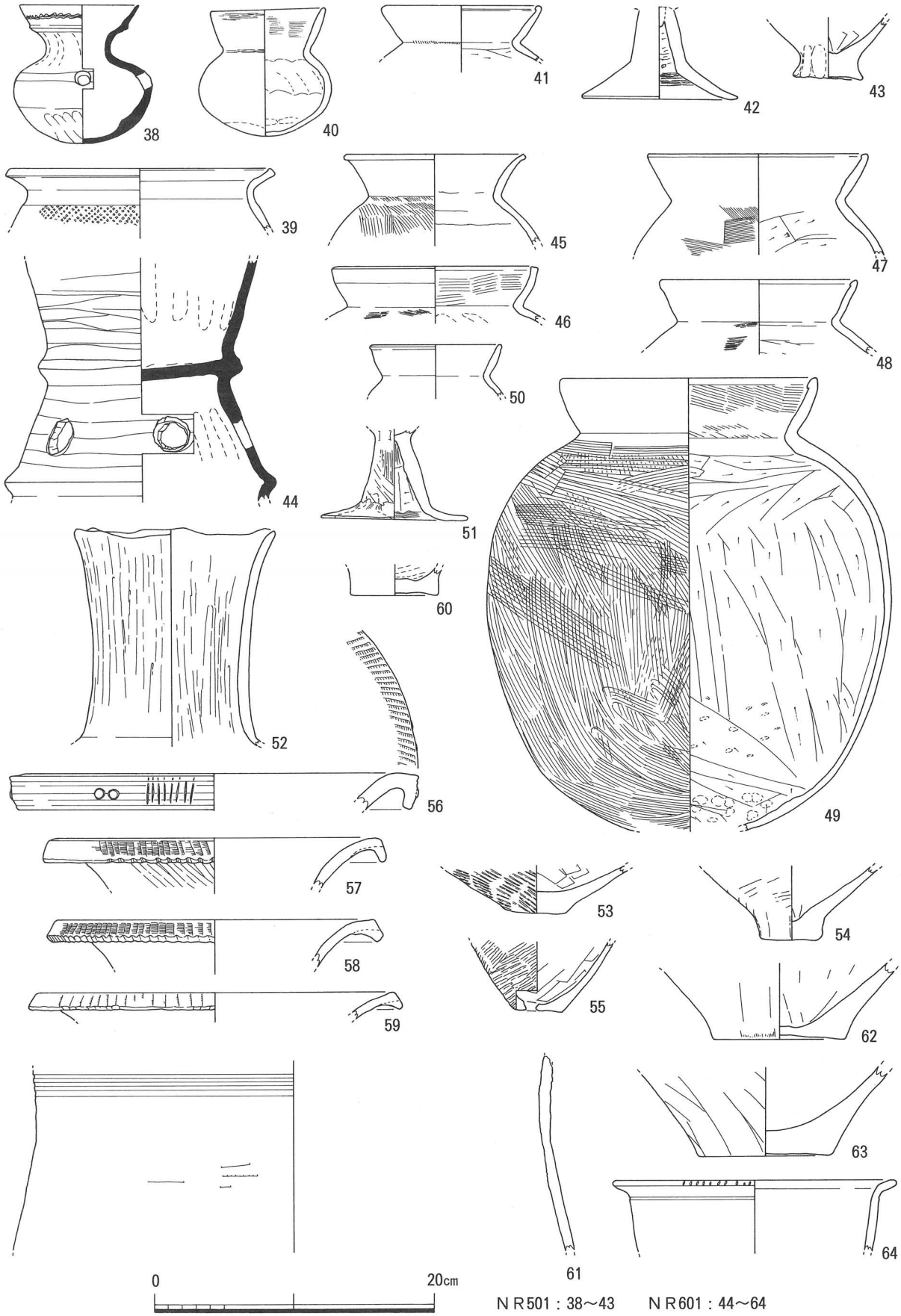
NR601

平面的には、2区・3区で検出しえた肩（第7層）が廻る状況であり、河川の分岐点にあたるのかもしれない。この肩から底部への形状をみると、第7層の粘土層上面から深さ約1.0mを、垂直からややオーバーハング気味に削平している【肩1】。底部は東部（3区）がほぼ平坦な面が東に緩やかに下がり、西部（2区）ではこの平坦面が幅約2.0mのテラス状を成し、そこからさらに垂直気味に西に落ち込んでいる【肩2】。この西部の状況は、北側のセンター調査地でも同様の状況が続いており、平坦面は直線的に北に伸びたのち西に拡張している。なおセンター調査地では、初めに肩2の段階の河川が南から北に流れており、肩2が破堤した後に、肩1の段階の河川が南西から北東方向に流れるとされている。[註5]

埋土は細砂～粗砂を基調とする洪水砂層が、東部で0.8～1.4m、西部では3.0m以上堆積しており、3区上部では微砂～シルトが優勢になっている。堆積状況としては、3区の肩部を境に東・西に下がるラミナが認められ、この肩部は後述する木製部材の集積のため複雑な堆積となっている。また2区・3区の肩部付近の砂層中には、削平された第7層以下の粘土塊が多くみられ、垂直に近く削平されている肩部の形状からみても、かなりの水流が想定できる。

部材は調査地全域から出土しているが、特に1区東部と3区西半部では集積する部分がみられた。1区東部では南北方向の杭状部材が、頭を北に、先端を南にして束になった状況と、その南側に東西方向の部材がある。前者には3mを超えるような長い杭状部材が多く含まれる。3区西半部では、第7層の粘土層上面から底面にかけて、様々な部材が乱方向に積み重なった状況であった。いずれも出土レベル的には北部が高く、南部が低くなっている。これらに対して2区では水平な状態のもの数本というもので、テラス部の肩1際では、肩のラインに沿って抉られた部分に挟まった状態のものがあった。3区北部の河川肩際では先端が第7層中に達する立位の杭材も数本みられ、この部分は堰の残欠かもしれない。また2区肩際では第7層中で立位の杭1本が確認できたが、堰に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物には弥生時代前期～古墳時代中期にわたる土器・木製品があり、土器は特に布留式期



ＮＲ501：38～43　　ＮＲ601：44～64

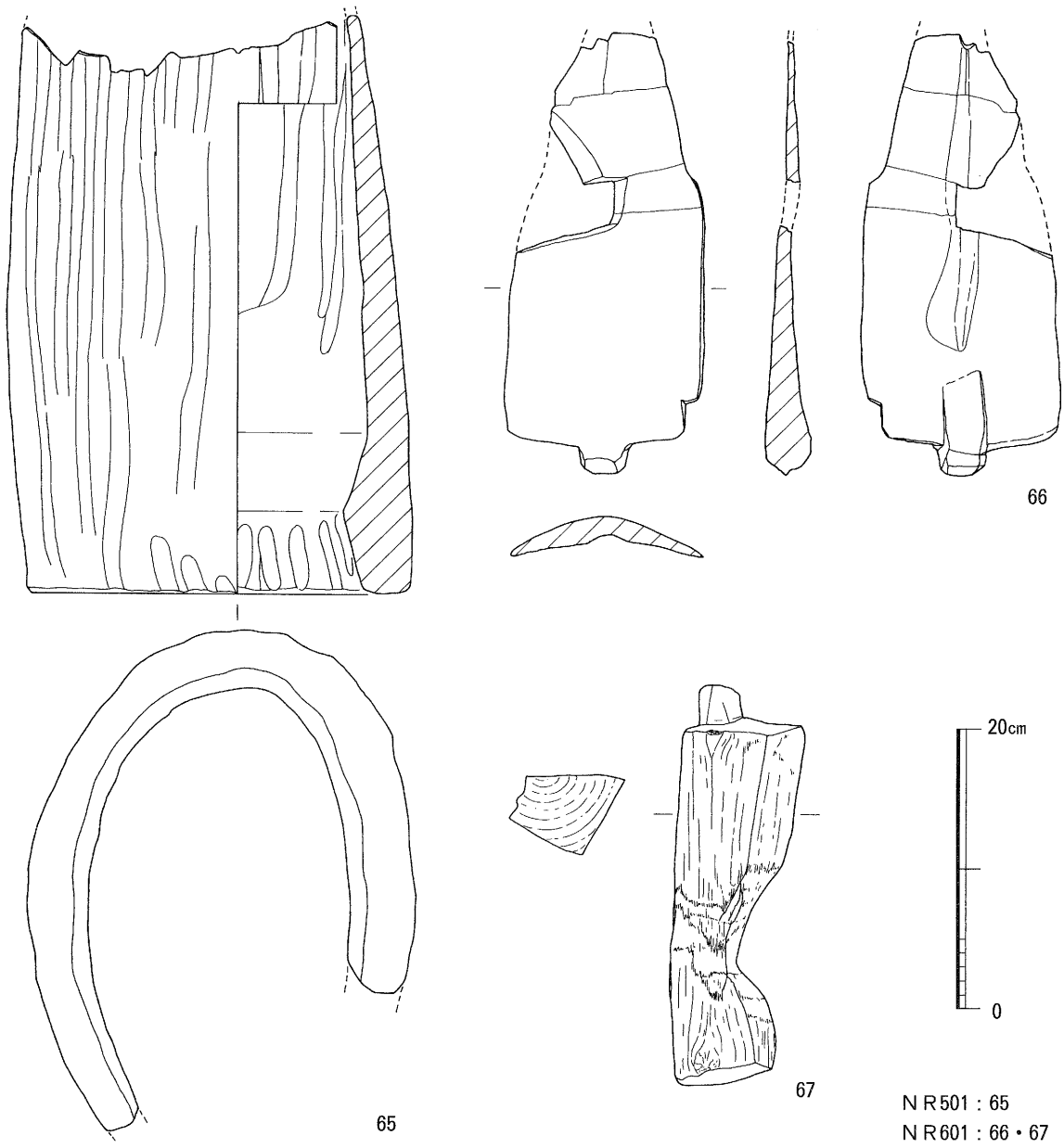
第13図　ＮＲ501・ＮＲ601出土土器（Ｓ＝1/4）

のものが多く、ほとんどがローリングされている。45・48・51・52・54が１区、他は３区の出土土器である。

［土器］

・古墳時代中期（44）

３区の標高約5.7ｍで、木製部材に挟まって出土した。須恵器装飾壷の基部と思われるが、外側ラインが直線的であり器種は明確ではない。調整は外面横方向のナデ（回転ナデ？）、内面縦方向のナデである。脚部５方向に、ヘラケズリにより器壁をくり抜いた円形スカシを施し、さらにスカシ周縁は面取りされている。色調は暗灰色、断面は紫色を呈し、外面に灰がかぶる。基部径14.0㎝を測る。



第14図　ＮＲ501・ＮＲ601出土木製品（Ｓ＝1/5）

・古墳時代前期布留式期～中期（45～51）

（50）は短頸壷であろう。布留式甕（45～49）は、口縁端部が内側に肥厚する典型的なもの（47～49）の他、外側に肥厚するもの（45）、面を成すもの（46）がある。47は外面が黒斑により黒色を呈する。49は同一個体と捉えられる口縁部と体部を図上で復元したもので、口径18.3㎝・器高約32.5㎝を測る。口縁部～体部に黒斑を有し、体部には煤が付着している。高杯（51）は脚柱部内面をヘラケズリするもので、裾部に黒斑を有する。

・弥生時代後期（52～55）

長頸壷（52）は１区の標高約4.7ｍで、木製部材に挟まって出土した。内外面縦方向のヘラミガキを施す。生駒西麓の胎土である。甕（53・54）では53が左上りの平行タタキを施している。有孔鉢（55）は焼成前の穿孔である。

・弥生時代中期（56～60）

いずれも生駒西麓産の胎土である。広口壷（56～59）は口縁端部を凹線文・簾状文・篦描文・円形浮文・刻み目で装飾している。59の口縁端部外面は簾状文と考えられる。60は甕の底部であろう。時期的にはおおむね「河内第Ⅳ様式」[註6]に比定されよう。

・弥生時代前期（61～64）

（61）は太頸の広口壷で、淡黄灰色を呈する。甕（64）は口縁端部に刻み目を施し、口縁部直下に１条の沈線を巡らせる。壷底部（62・63）と共に生駒西麓産の胎土であろう。

［木製品］

鋤先１点（66）・加工木製品（67）の他、多量の堰の部材がある。

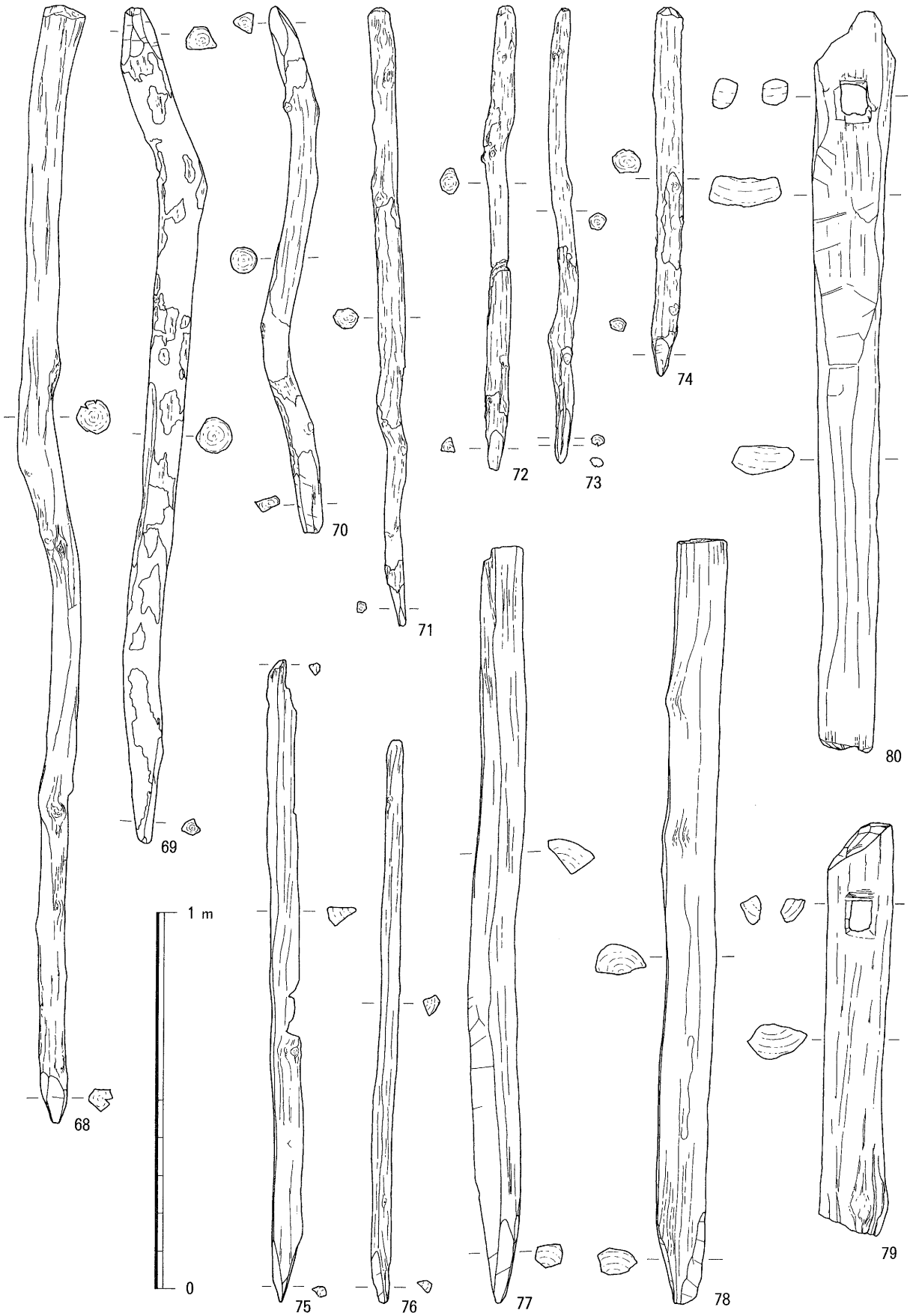
66は１区の標高約4.4ｍで、堰部材に挟まる状況で出土した。法量は残存長31.3㎝・身幅14.3㎝・身厚0.5～2.2㎝・柄径3.3㎝を測る。外縁の形状からみて鉄刃を装着する風呂鋤であると考えられる。67は一辺６㎝程度の角材で、長さ28.3㎝を測る。一方の端面角に長さ2.8㎝の枘を有するもので、形態からみて机の脚部の可能性がある。[註7]

堰部材は総数289点を数える。そのうち何らかの加工が施されているものが237点で、それ以外の52点は自然木の可能性もある。加工木のうち先端を尖らせた杭材が187点である。以下のように分類し、詳細は**表４**にまとめた。

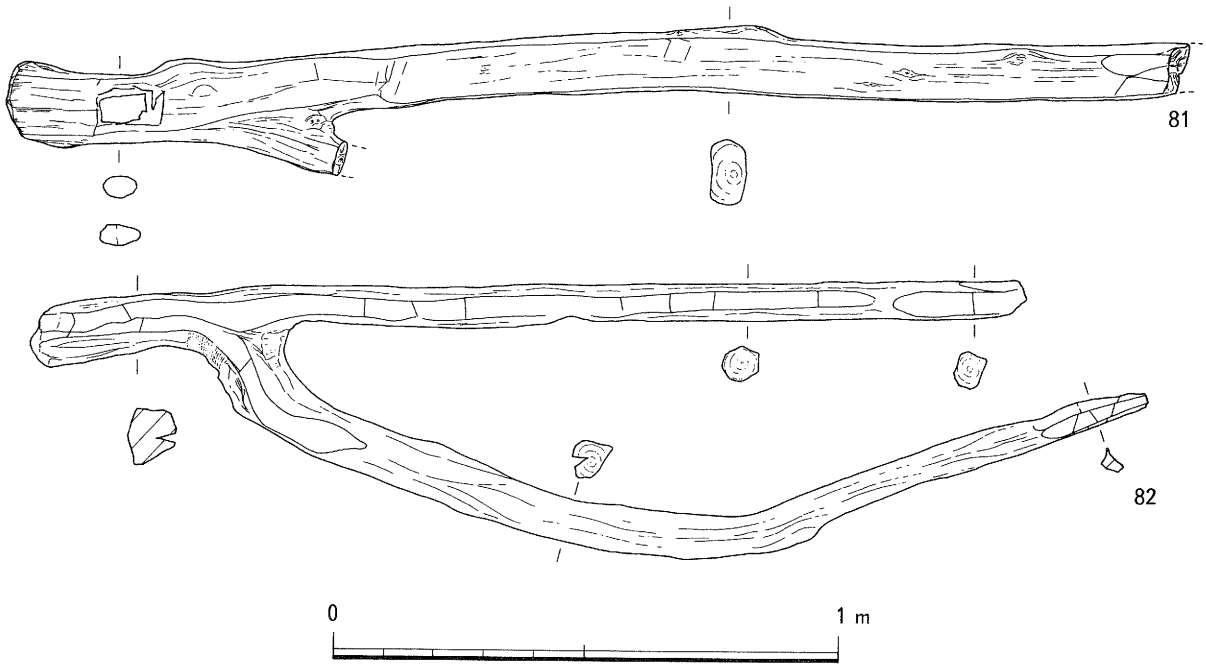
・丸材－自然木を切断したままのもの。切断部分は多角錐を呈するものが多い（68～74）。
・割材－いわゆるみかん割りされた木材で、断面扇形～半円形を呈するもの（75～79）。
・角材－面取りされ断面多角形を呈するものや板状のもの。転用材と考えられる（80）。
・二股－修羅状木製品と称されるもので、木の二股部分を用いたもの（81・82）。
・自然－自然木としたが、端部の欠損した丸材である可能性もある。

表４　ＮＲ601出土の堰部材集計表

	加工木						自然木	合計
	丸材（杭）	割材（杭）	角材（杭）	小計	二股	計		
１区	37（36）	22（13）	3（0）	62（49）	5	67	28	95
２区	13（11）	5（1）	0（0）	18（12）	2	20	3	23
３区	107（103）	34（22）	6（1）	147（126）	3	150	21	171
計	157（150）	61（36）	9（1）	227（187）	10	237	52	総計　289



第15図　ＮＲ601出土堰部材①（Ｓ＝1/15）



第16図　ＮＲ601出土堰部材②（Ｓ＝1/15）

加工木のほとんどが丸材や割材の一端を尖らせた杭状のもので、長さは１～３ｍが多く、４ｍを超えるものもあり、太さは数cmから20cm近いものがみられる。先端は１～６面を削ったものがあり、２～３面を削ったものが最も多い。両端を尖らせたものも数点ある。

他に特徴的なものとして、一端を尖らせ、もう一端に方形の枘穴を穿つものが10点ある。枘穴の方の端部を山形に削るものもある。丸材・割材・角材にあり、長さは３ｍ程度が多く、４ｍを超えるものもある。枘穴が確認できたものは図化した２点（79・80）の他に10点ある。

二股の木を利用した修羅状木製品[註8]と称されるものは計10点である。長さは２～３ｍが多く、４ｍを超えるものが１点ある。いずれも二股部の先端を尖らせており、頭部を山形に削るものがある。また頭部には方形の枘穴を穿つもの（81）と無いもの（82）がある。丸材が多いが、頭部付近・頭部のみを断面方形に削るものや、81のように全体の上面・下面を面取りするものがある。

〈第７面〉

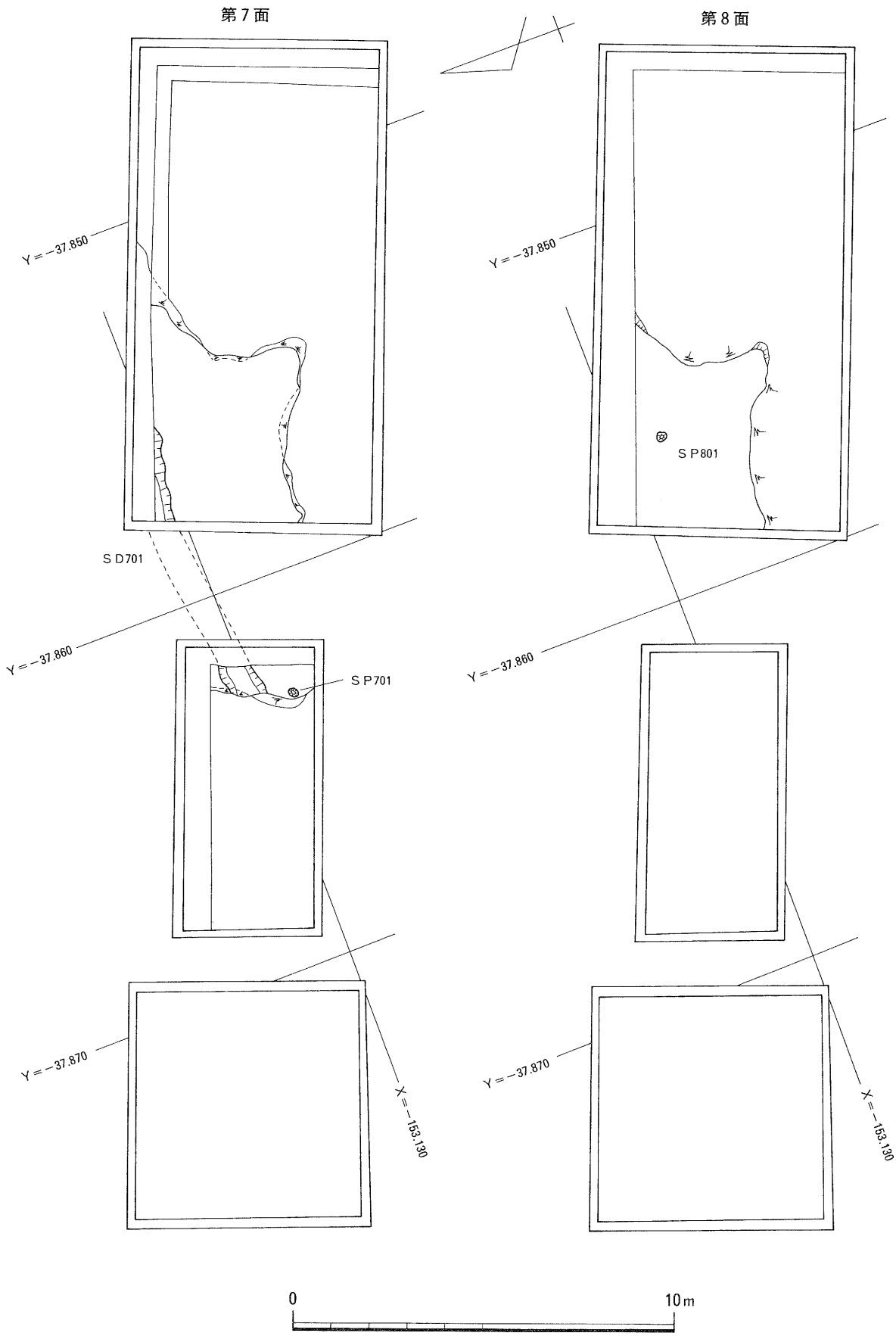
標高約5.0ｍの第８層上面で、２～３区にまたがる東西方向の溝１条（ＳＤ701）、２区でピット１個（ＳＰ701）を検出した。

ＳＤ701

規模は検出長約7.6ｍ・幅約0.8ｍ・深さ約10cmを測る。断面ほぼ皿状を呈するが、底部は起伏がある。埋土は暗灰黄色微砂混じり粘質シルト（炭酸鉄・植物遺体含む）である。遺物は出土していない。

ＳＰ701

平面形は径28×24cmの不整円形を呈し、深さは10cmを測る。断面半円形で、埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。



第17図　第７・８面平面図（S＝1/150）

〈第８面〉

３区、標高約4.8ｍの第９層上面でピット１個（ＳＰ801）を検出した。

ＳＰ801

平面形は径28×25㎝の不整円形を呈し、深さは17㎝を測る。断面逆台形で、埋土は第８層下層に類似する黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

第３章　まとめ

今回の調査では古墳時代中期頃までの河川（ＮＲ601・ＮＲ501）と、それ以前に比定される遺構、平安時代～近世の遺構を検出した。出土遺物は土器類・石製品・動物遺体の他、河川出土の多量の木製品がある。

河川（ＮＲ601）により削平された第７面・第８面では溝・ピットが検出された。しかし第７層以下からは出土遺物も無く、これらの遺構の時期については不明で、河川内埋土出土遺物からみても古墳時代中期以前としか言及できない。第７面については北部センター調査地第７面にあたり、水田の可能性が指摘されている。畦畔等の水田遺構は検出されていないが、土壌のプラントオパール分析ではイネ科植物のプラントオパールが大量に検出されている。[註9] 第７面は、標高に限ってみれば、当調査地の西方に位置する久宝寺遺跡（南地区）[註10]・亀井北遺跡[註11]では弥生時代後期頃にあたる。

ＮＲ501・ＮＲ601からは古墳時代中期頃までの遺物が出土しており、両河川にあまり時期差は無いものと考えられる。大きく捉えれば同一河川の上部・下部と考えられ、規模の縮小、あるいは流路の変化が古墳時代中期頃に起こったものと推察できよう。

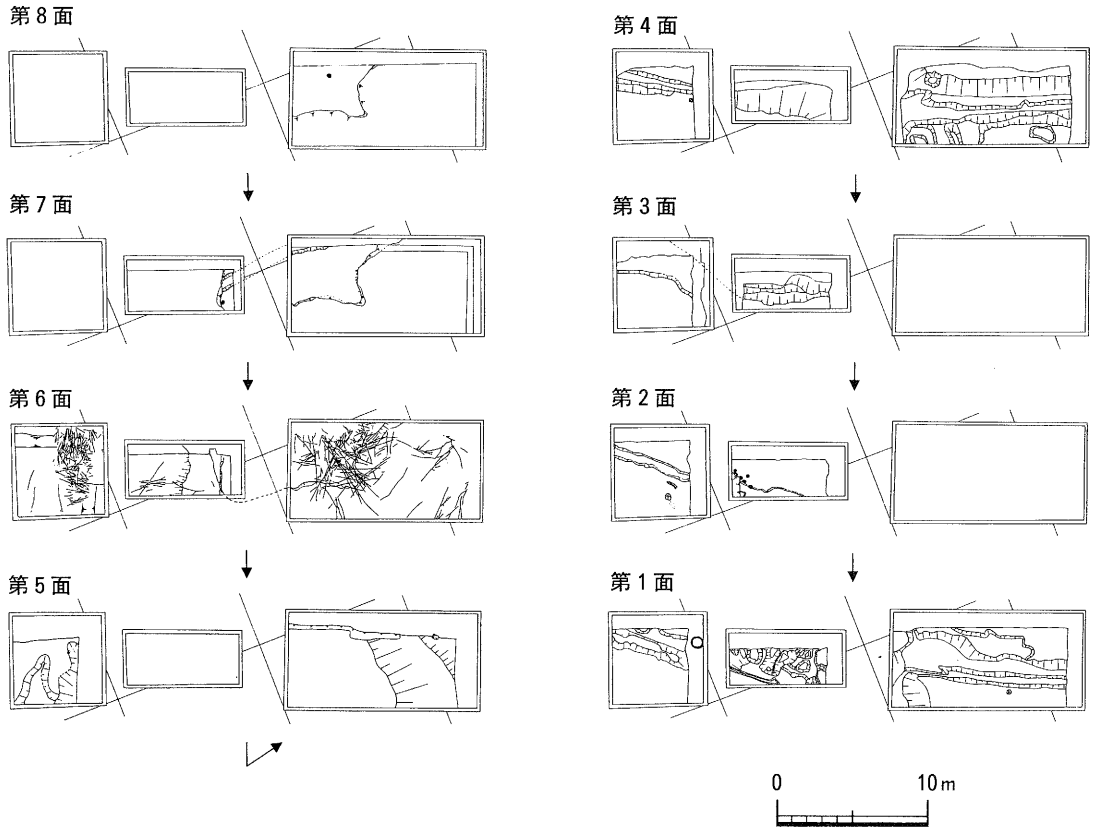
センター調査地では２基の堰が検出されている。今回の調査地では明確な堰構造は検出されなかったが、北部では堰の残欠とも捉えられる立位の杭材がみられ、北側調査地から延びる堰の南端部にあたるのかもしれない。

木製品は堰の部材がほとんどを占め、これらはセンター調査地で検出された合掌型堰の部材と共通するものが多い。部材はさらに上流、つまり南方に構築された同様の堰が洪水で破壊されて運ばれてきたものと捉えられる。

ＮＲ501が古墳時代中期頃に埋没した後、当調査地周辺は安定した集落域となったようで、周辺の調査地では古墳時代後期以降の遺構がみられるようになる。当調査地では遺構は検出されなかったが、包含層からは古墳時代後期・飛鳥～奈良時代の土器が検出されている。

平安時代後期では第４面で土坑（ＳＫ403）が検出された。ＳＫ403からは多量の炭とともに完全な状態の馬の頭蓋骨（？）が出土している。山口県下関市延行条里遺跡に類例があり、祭祀遺構の可能性が指摘されている。[註12] 当例も農耕祭祀・雨乞儀礼等、何らかの祭祀的な遺構とも考えられ検討を要する。

近世以降では第１面～第４面で井戸・溝・畦畔状遺構等、農耕に関連する遺構が主に検出された。第４面では、平安時代の土坑ＳＫ403を、出土遺物からみて江戸時代初頭以降に比定されるＳＤ401が切っている状況で、その後操車場が設営されるまで当地は生産域となっているようで



第18図　遺構変遷図（S＝1/500）

ある。今回の調査では中世段階の遺構がみられないが、近世の農耕に伴う土地改変の結果であろうか。

註

註1　間壁忠彦　1977「備前」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館

註2　積山　洋　1995「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要3』財団法人大阪府埋蔵文化財協会

註3　古代の土器研究会編　1992「古代の土器1　都城の土器集成」

註4　奈良国立文化財研究所　1993「木器集成図録　近畿原始篇」

註5　後藤信義・本田奈都子　1996「久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書－ＪＲ久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う－」財団法人大阪府文化財調査研究センター

註6　寺沢　薫・森井貞雄　1989「1河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

註7　前掲註4

註8　前掲註5

註9　前掲註5
後藤信義・島崎久恵・長田芳子　1998「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ－一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査－」財団法人大阪府文化財調査研究センター

註10　金光正裕　1987「第Ⅱ章　第3節　第10項　久宝寺遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

註11　赤木克視　1987「第Ⅱ章　第3節　第11項　亀井北遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

註12　松井　章　1997「考古学から見た動物利用」『部落解放なら　8』奈良県部落解放研究所

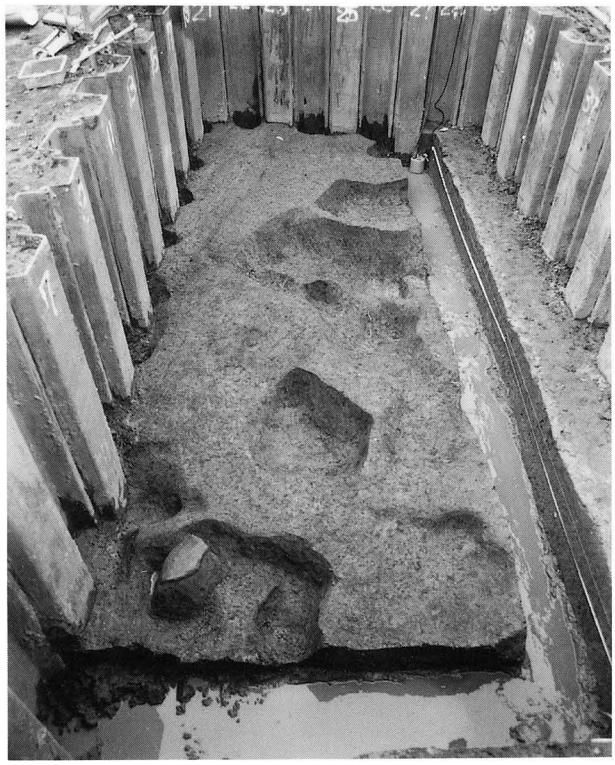
図　　版

1区第1面（西から）

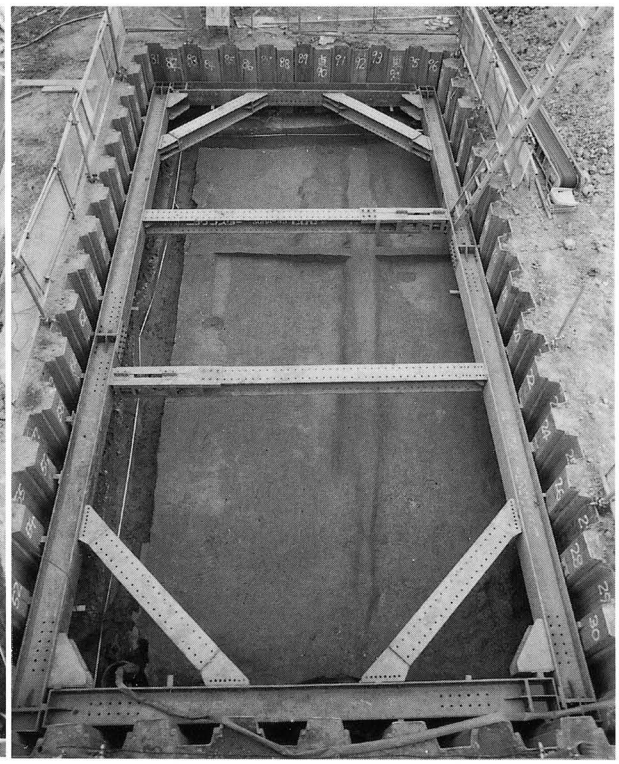
1区第1面ＳＥ101上部（西から）

1区第1面畦畔状遺構101（東から）

1区第1面ＳＥ101最下段（西から）

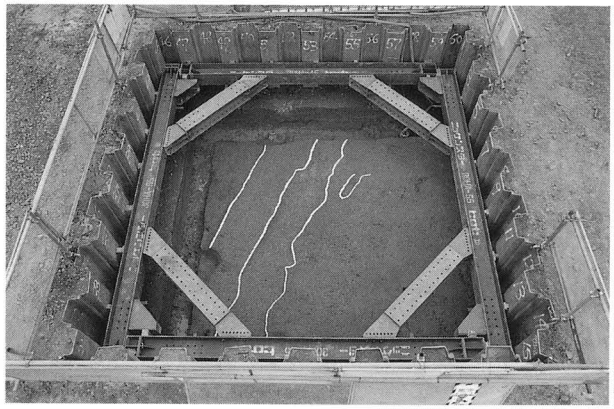


2区第1面（東から）



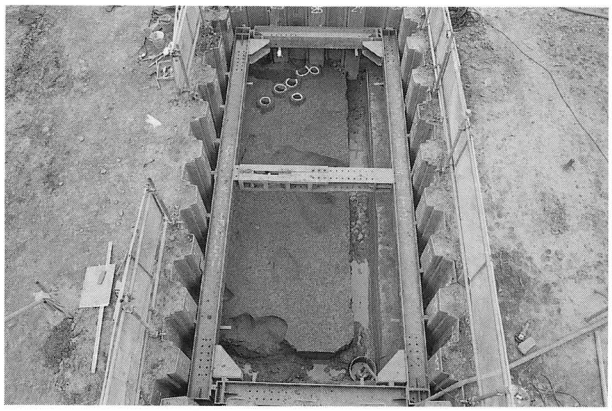
3区第1面（西から）

図版二

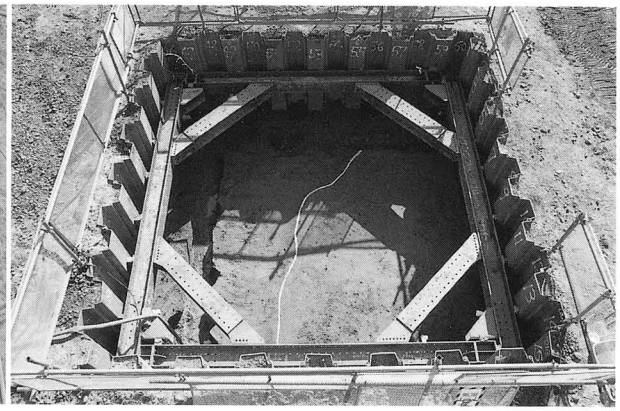


1区第2面（西から）

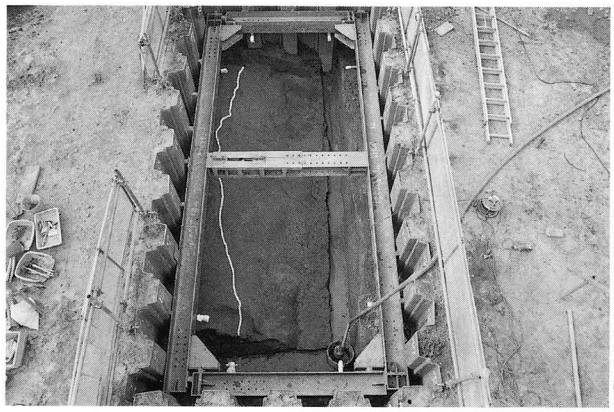
1区第2面　馬の歯出土状況（北東から）



2区第2面（東から）

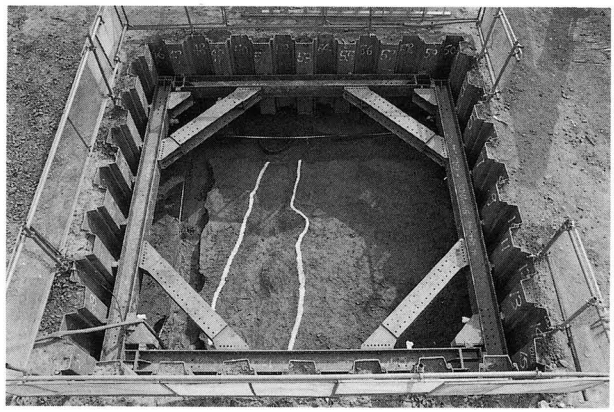


1区第3面（西から）

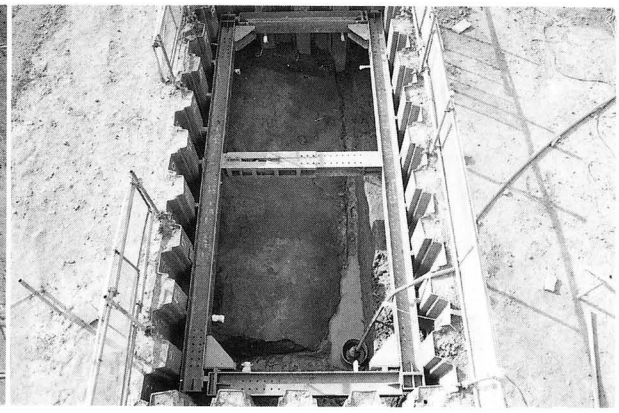


2区第3面（東から）

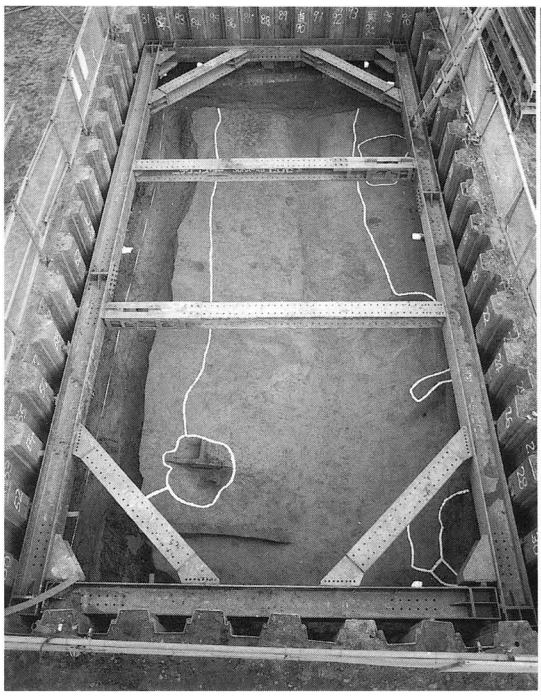
2区第3面ＳＯ302内の杭（南西から）



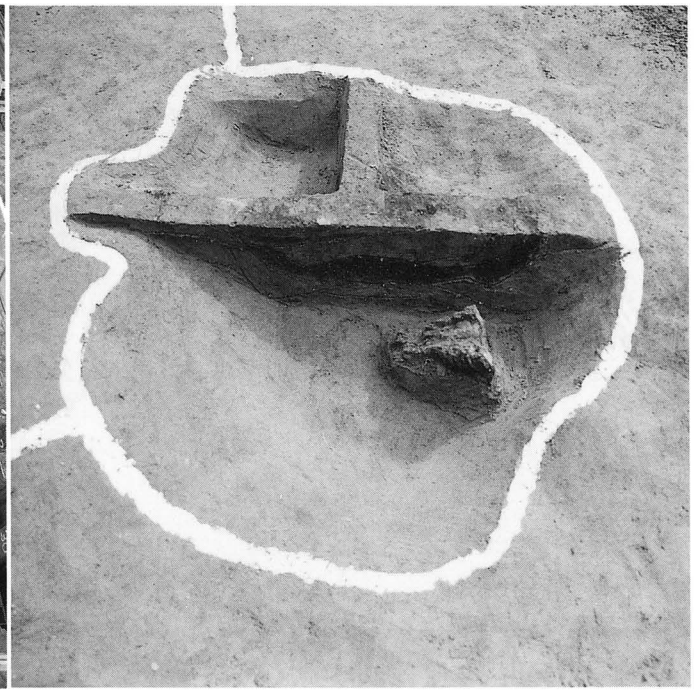
1区第4面（西から）



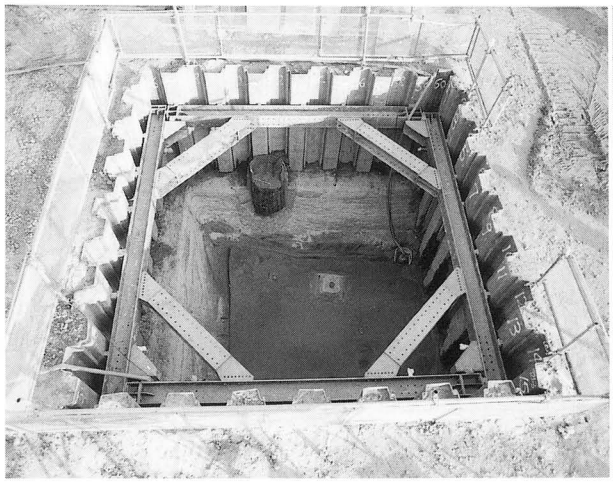
2区第4面（東から）



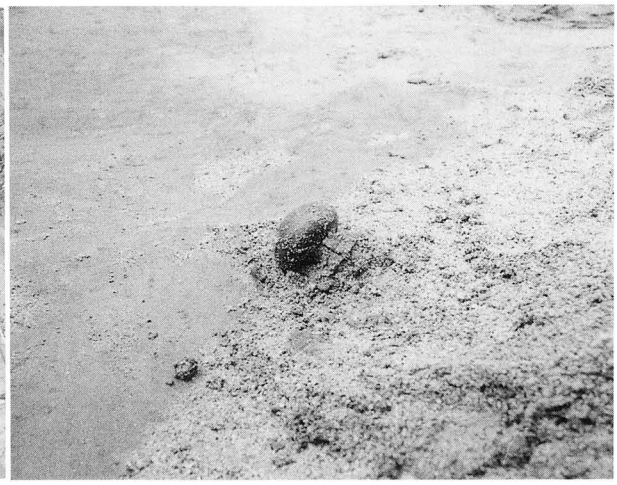
3区第4面（西から）



3区第4面ＳＫ403（西から）



1区第5面ＮＲ501（西から）



1区第5面ＮＲ501底 土器（38）出土状況（南から）

3区第5面ＮＲ501（西から）

3区第5面ＮＲ501（西から）

図版四

3区第5面ＮＲ501内 木器（65）出土状況（南東から）

3区第5面ＮＲ501内 木器（65）出土状況（南から）

2区第6面ＮＲ601（西から）

2区第6面ＮＲ601 肩1北壁（南から）

3区第6面ＮＲ601（東から）

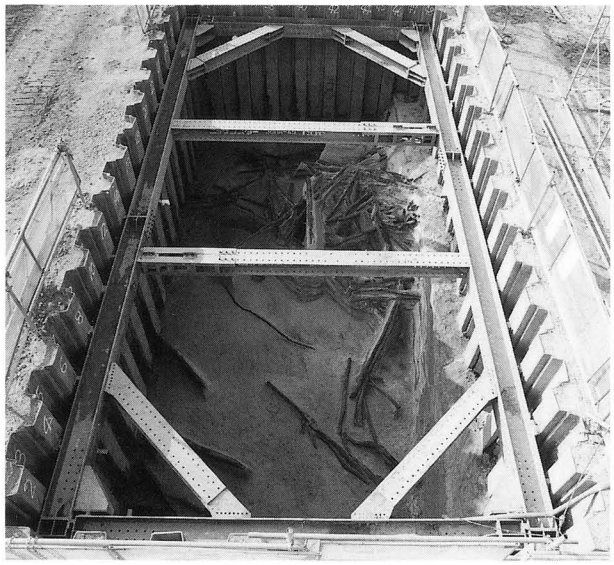
3区第6面ＮＲ601 肩1（南東から）

1区NR601 堰部材出土状況（東から）

1区NR601 堰部材出土状況（南から）

1区NR601 木器（66）出土状況（南から）

2区NR601 修羅状木製品出土状況（西から）



3区NR601 堰部材出土状況（東から）

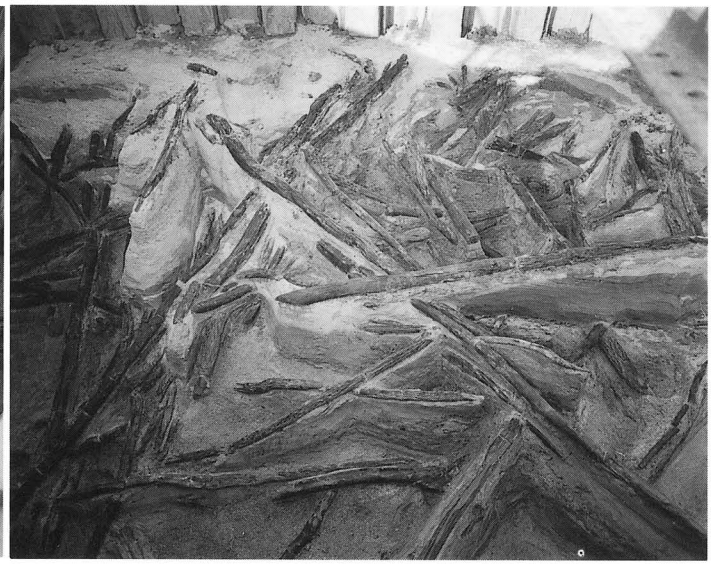
3区NR601 堰部材出土状況（西から）

図版六

3区NR601 堰部材出土状況（東から）

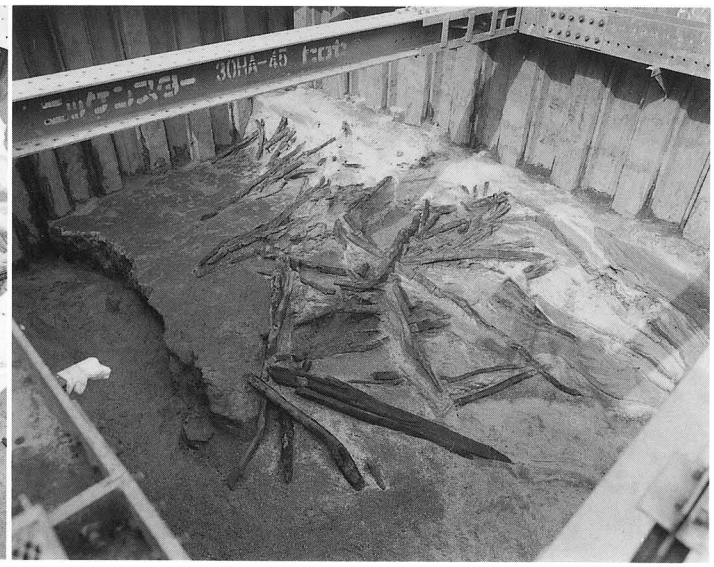
3区NR601 堰部材出土状況（北から）

3区NR601 堰部材出土状況（西から）



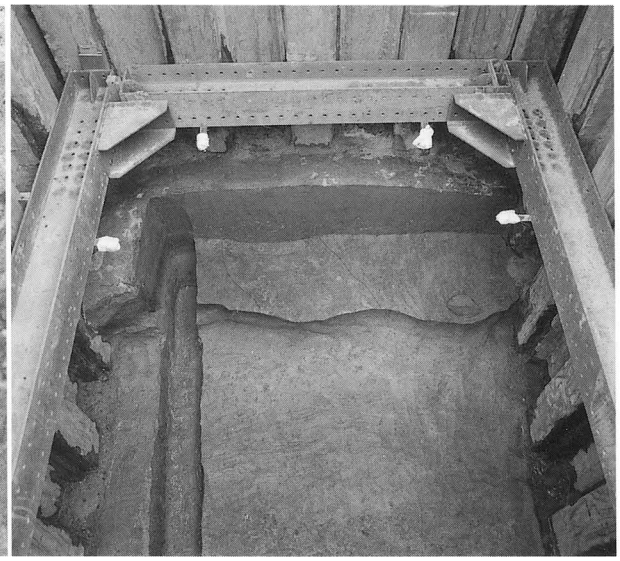
3区NR601 堰部材出土状況（南から）

3区NR601 堰部材出土状況（南東から）

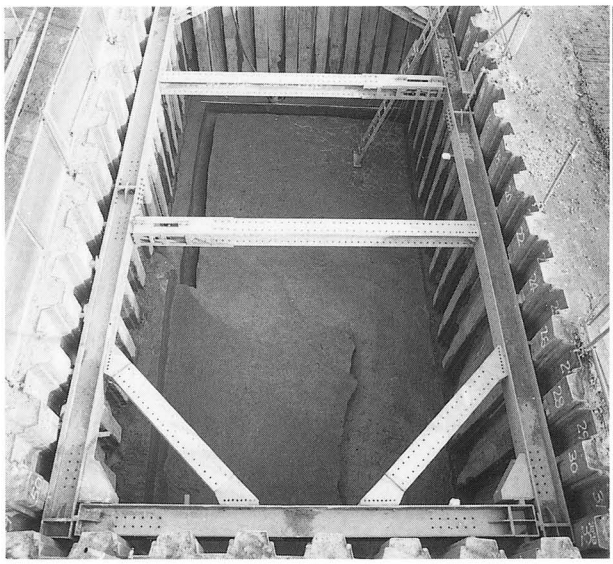


3区NR601 堰部材出土状況（南東から）

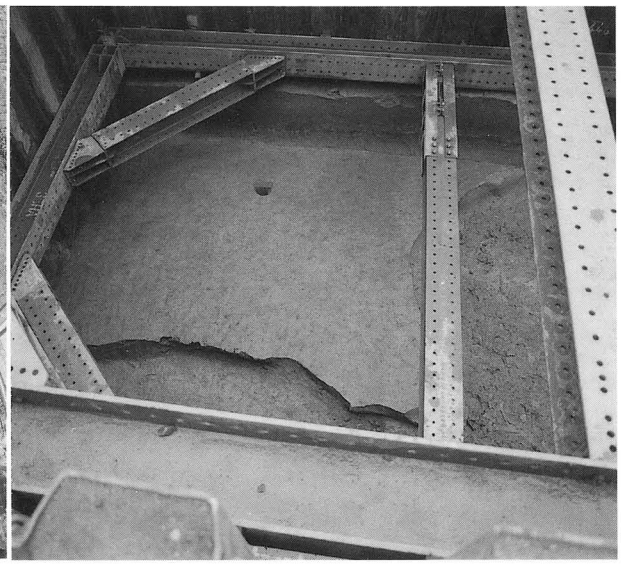
3区ＮＲ601 土器（44）出土状況（南から）



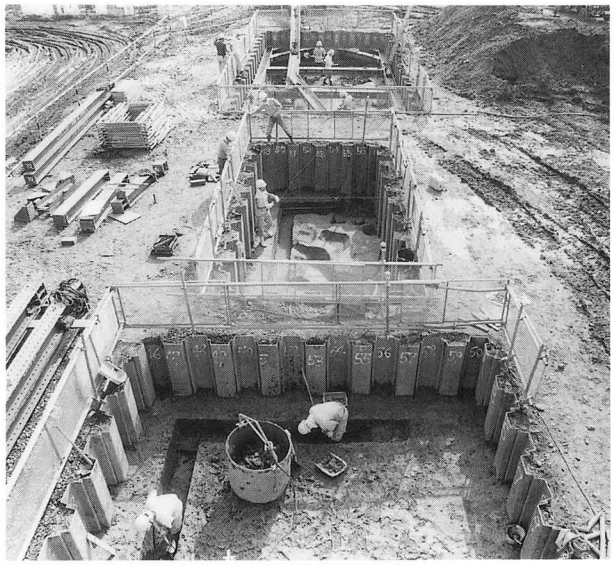
2区第7面（西から）



3区第7面（西から）



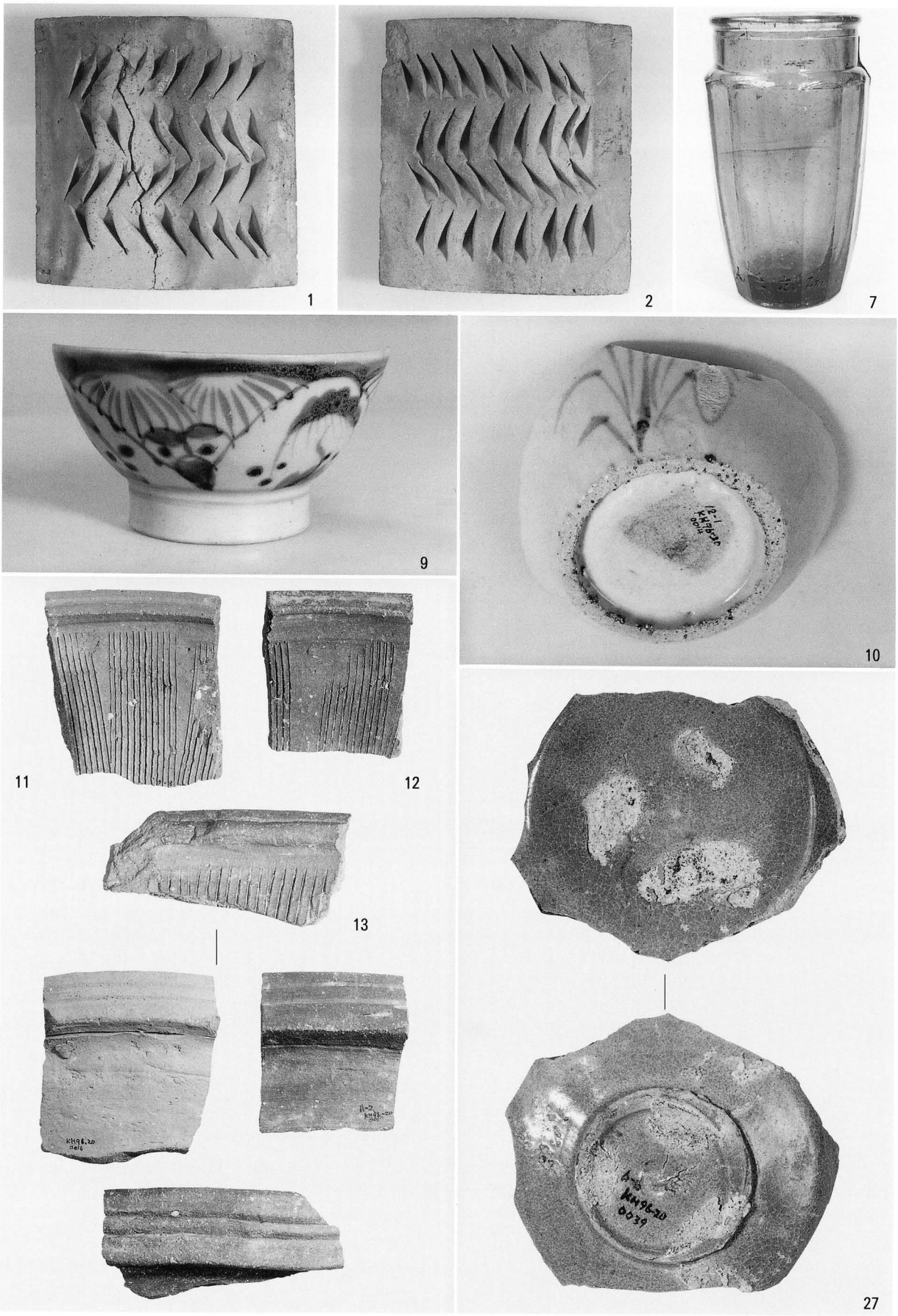
3区第8面（南から）



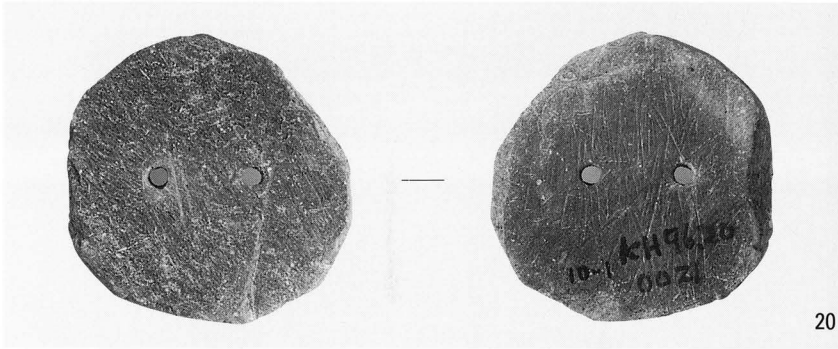
調査地全景（西から）

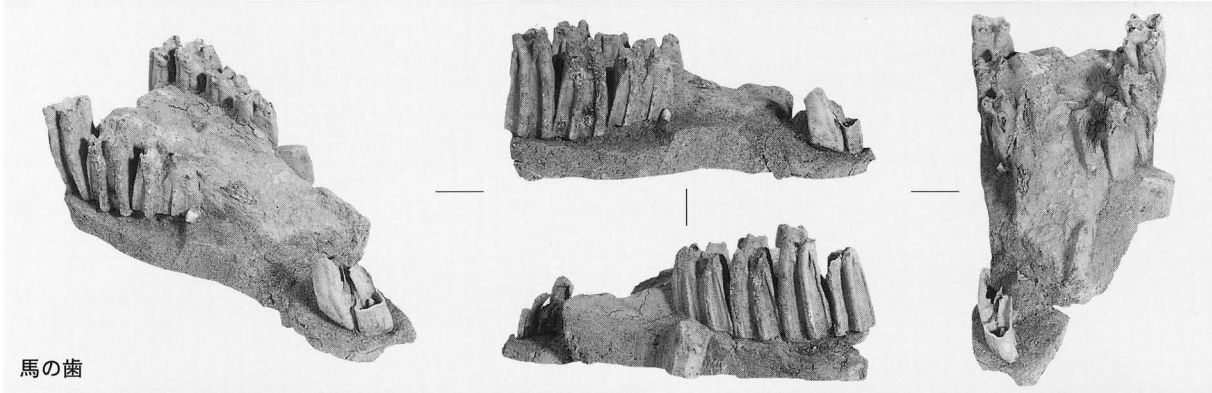
2区調査状況（東から）

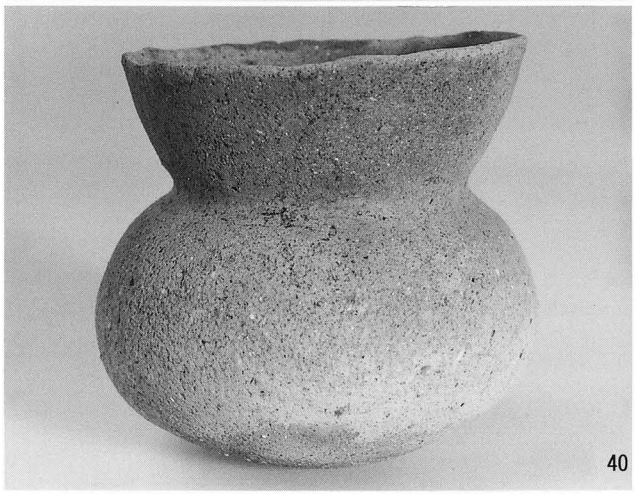
図版八　出土遺物



ＳＥ101（1・2）、第1層（7・9～13）、ＳＤ401（27）

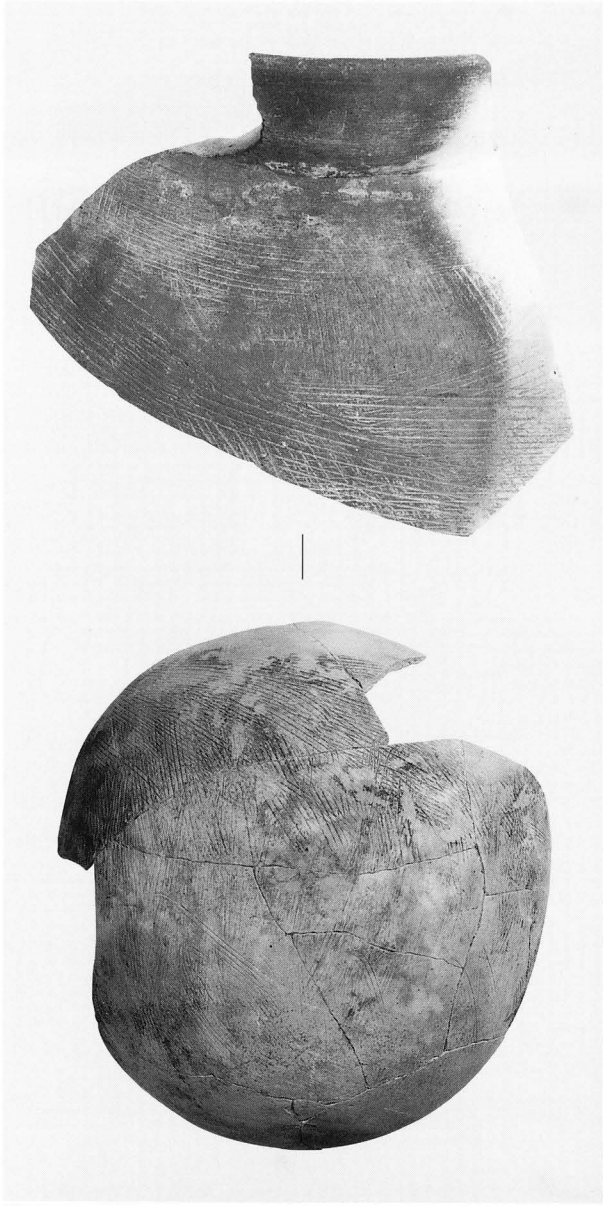






第２層（20）、ＳＫ403（37・馬の歯）、ＮＲ501（38～40）、ＮＲ601（44）

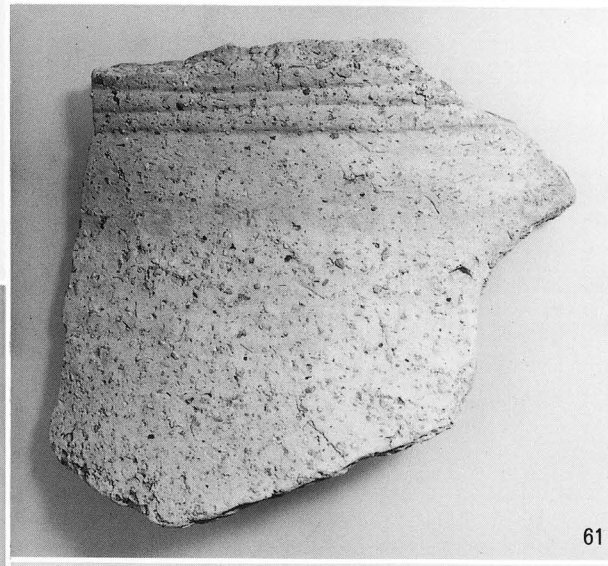
図版一〇　出土遺物



52

56

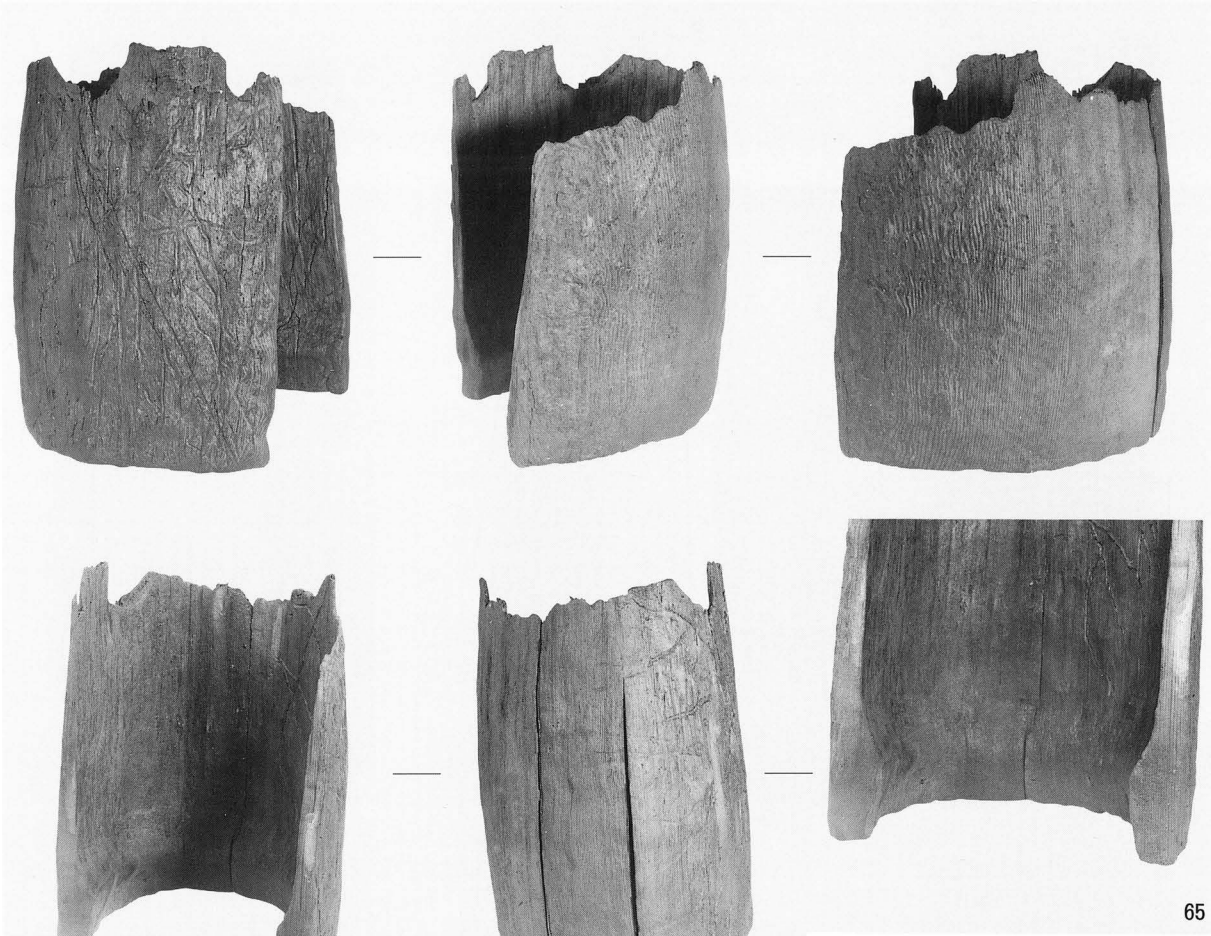
51



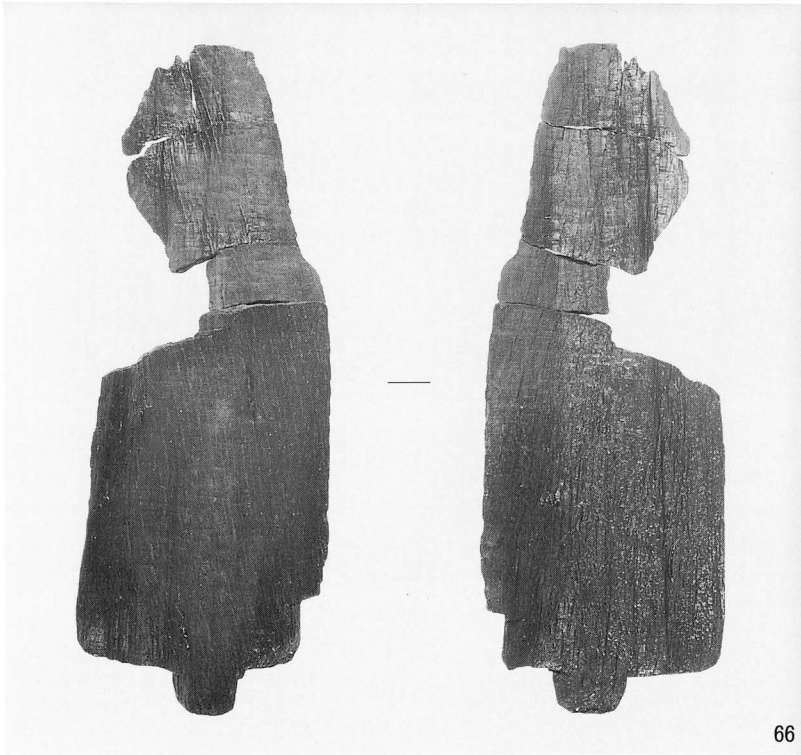
61

64

NR601



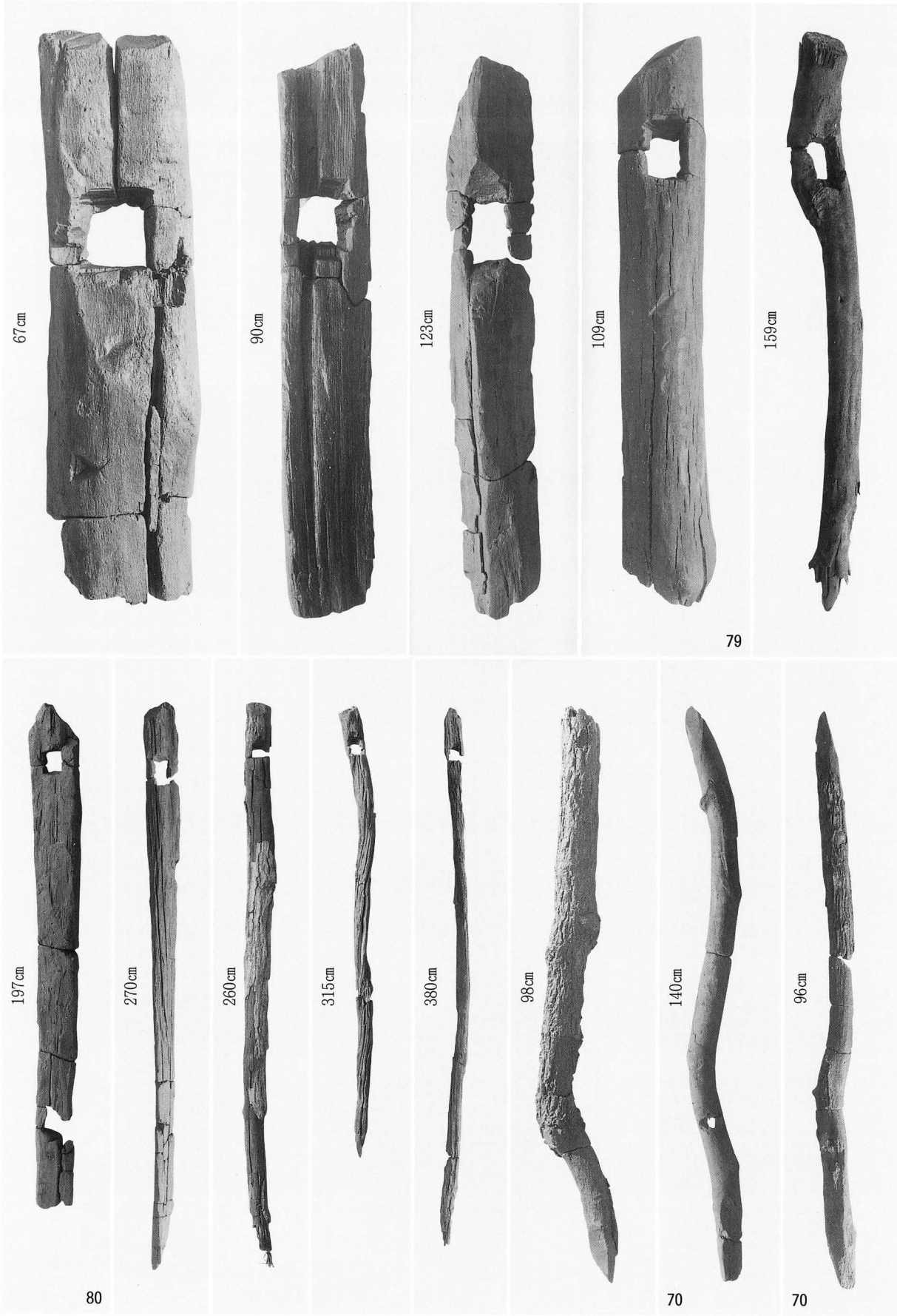
65



66

67

ＮＲ501（65）、ＮＲ601（66・67）


67cm
90cm
123cm
109cm
159cm
79
197cm
270cm
260cm
315cm
380cm
98cm
140cm
96cm
80
70
70

ＮＲ601（堰部材）

図版一三　出土遺物

ＮＲ601（堰部材）

Ⅳ　佐堂遺跡第１次調査（ＳＤＯ95－１）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市佐堂町１丁目50－１他で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する佐堂遺跡第１次調査（ＳＤＯ95－１）の発掘調査の業務は、八尾市教育委会の指示書（八教社文第埋748号　平成７年３月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が（株）三菱屋 宮川元一氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年４月20日～５月９日（実働10日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は約280㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・ 国方真奈美・西田真紀が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成12年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田・辻野優子・沢村妙子　図面トレース－北原清子　遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……41
第２章　調査概要……42
　第１節　調査の方法と経過……42
　第２節　基本層序……44
　第３節　検出遺構と出土遺物……44
　第４節　出土遺物観察表……53
第３章　まとめ……57

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……41
第２図　調査区設定図……42
第３図　検出遺構平断面……43
第４図　ＳＫ－201平断面図 ……45
第５図　ＳＫ－201出土遺物実測図 ……45
第６図　ＳＤ－201出土遺物実測図 ……46
第７図　ＳＤ－202出土遺物実測図 ……48
第８図　ＳＤ－201・ＳＤ－203・ＳＤ－205・ＳＤ－207断面図……48
第９図　ＳＤ－205～ＳＤ－207出土遺物実測図……49
第10図　第４層・第５層出土遺物実測図……51

写　真　目　次

写真１　杭－201～杭－203検出状況（南西から）……50

図　版　目　次

図版一　調査区全景（南から）
図版二　ＳＫ－201断面（南から）、ＳＤ－201断面（南から）、ＳＤ－207（東から）
図版三　ＳＫ－201、ＳＤ－201出土遺物
図版四　ＳＤ－201出土遺物
図版五　ＳＤ－205、ＳＤ－206、ＳＤ－207、第４層、第５層出土遺物

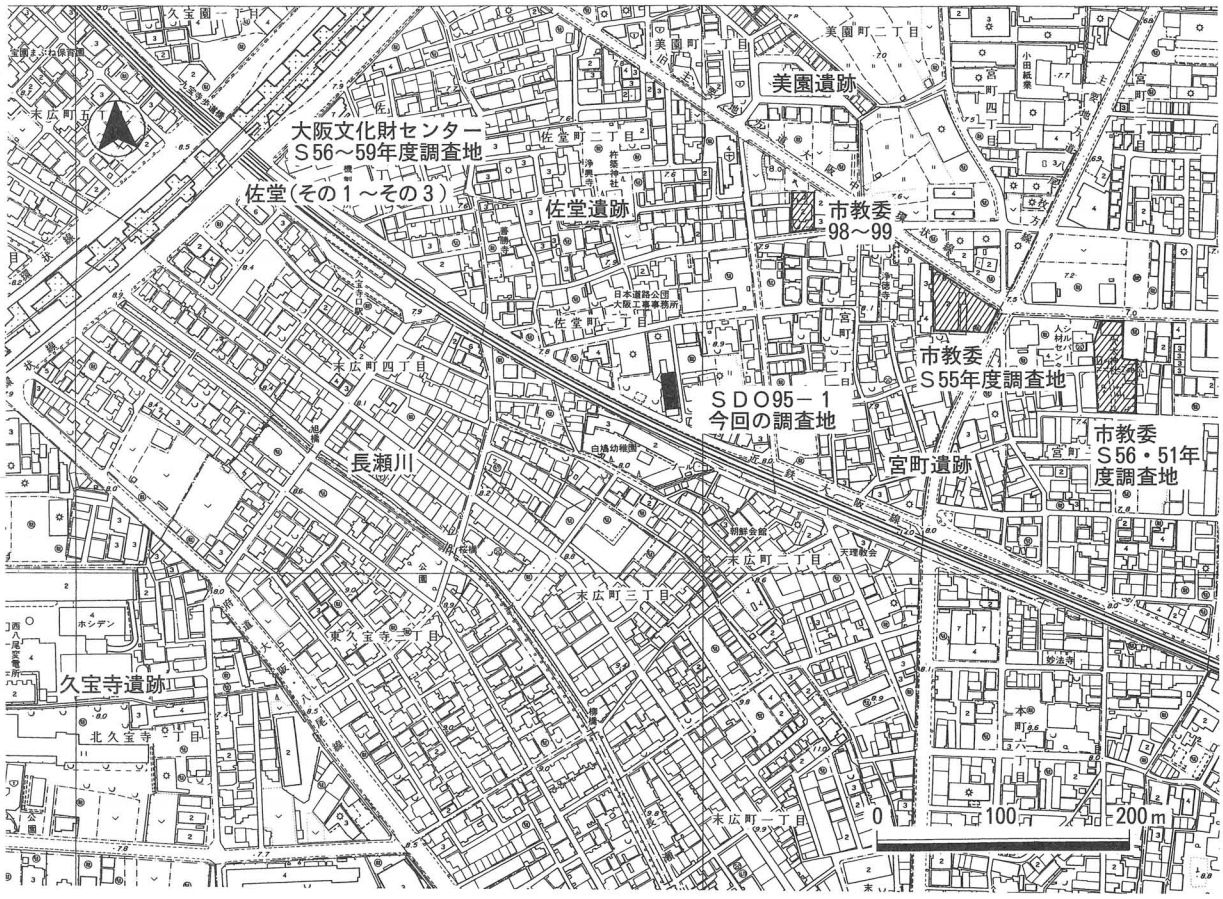
第１章　はじめに

佐堂遺跡は八尾市の北西部から東大阪市にかけて広がる遺跡で、現在の行政区画では佐堂町１～３丁目、久宝園１丁目、末広町４・５丁目（八尾市）、金岡３・４丁目、大蓮東４丁目（東大阪市）にあたる。

地理的には、旧大和川の本流である長瀬川の河川敷内および長瀬川右岸に形成された自然堤防上に展開した遺跡である。当遺跡周辺には東に宮町遺跡・千眼寺跡（穴太廃寺）、北に美園遺跡、南に長瀬川を挟んで久宝寺遺跡が位置している。

佐堂遺跡内では、昭和56年～昭和59年にかけて（財）大阪文化財センターにより実施された近畿自動車建設に伴う発掘調査[註1]が遺跡内を縦断する形で行われ、数多くの成果が得られている。これらの一連の調査から、佐堂遺跡が縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡であることが明らかにされている。なかでも、鎌倉時代を中心とする調査においては、長瀬川に伴う護岸杭列の存在が明らかにされており、中世時期における長瀬川の変遷を知るうえで貴重な資料を提供している。

このような情勢下、八尾市佐堂町１丁目50－１他で共同住宅を建設する旨の届出書が（株）三菱屋から八尾市教育委員会文化財課に提出された。八尾市教育委員会文化財課では、周辺で実施された既往調査の結果から、施工予定地内においても遺構・遺物の包蔵有無を確認する必要があ



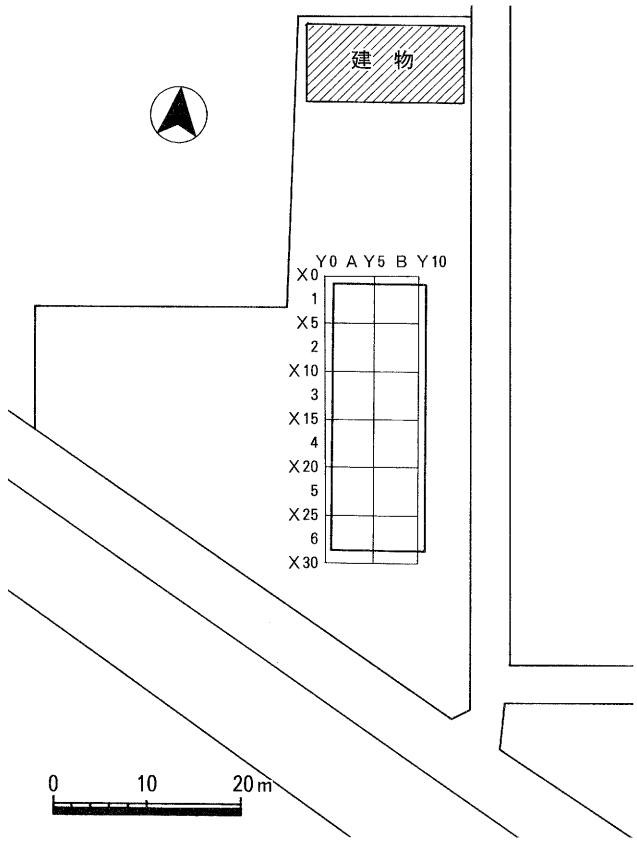
第１図　調査地周辺図

るものと判断し、平成７年３月１日に遺構確認調査[註2]（93－534）を実施した。施工予定地内に２箇所にグリット（２×２ｍ）を設定して調査を実施した結果、鎌倉時代を中心とした遺構面が複数面に存在することが確認された。以上の経緯を踏まえ、発掘調査を実施するに至ったもので、八尾市教育委員会・（株）三菱屋・（財）八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づき、（財）八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて発掘調査を行うことになった。現地での発掘調査期間は平成７年４月20日～５月９日で、調査面積は約280㎡を測る。

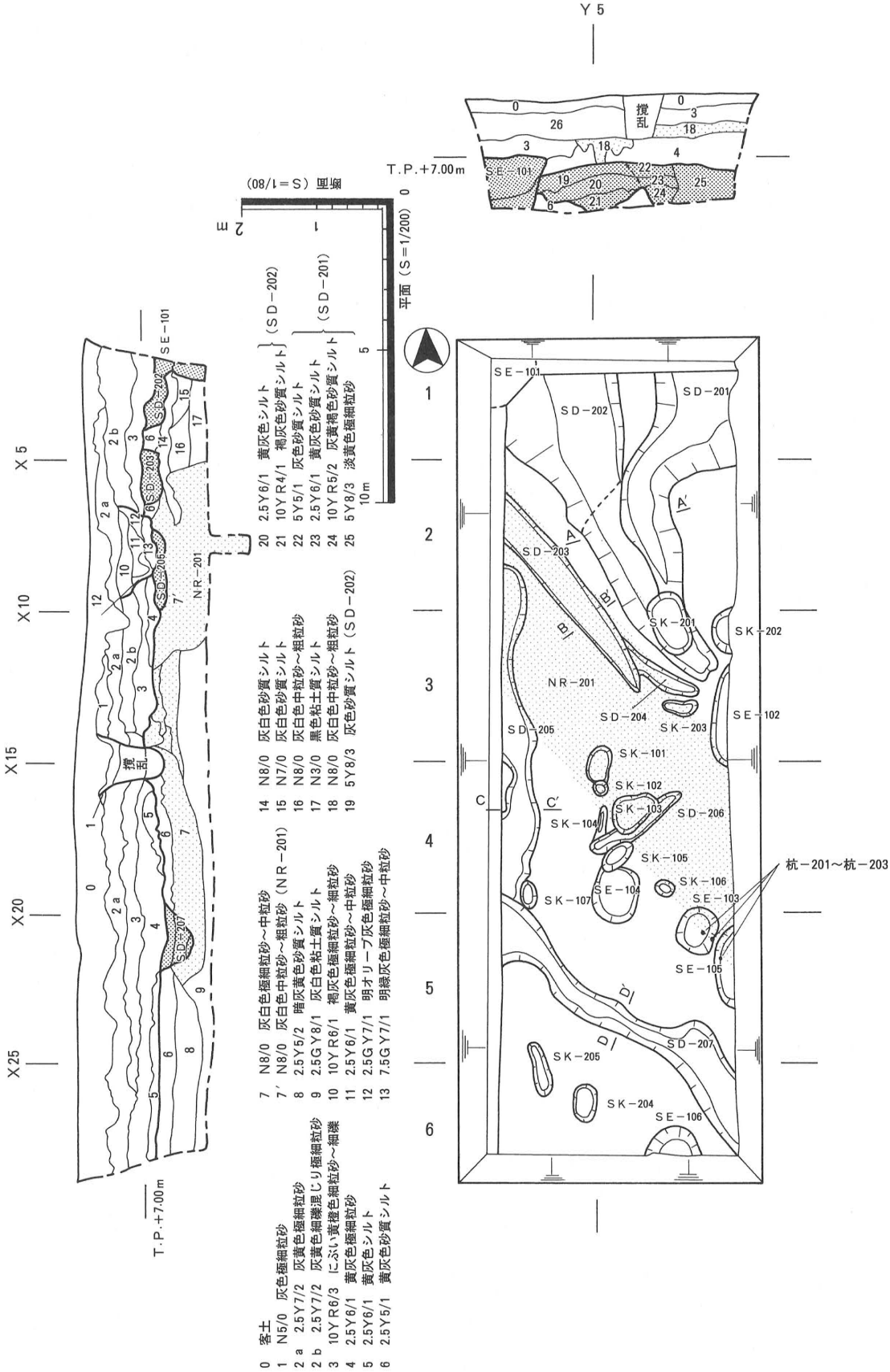
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の基礎工事で破壊される部分の東西10ｍ、南北28ｍを調査対象とした。調査地の地区割については、調査地の北西隅に設定した任意の地点（Ｘ０・Ｙ０）を基点として東西10ｍ、南北30ｍにわたって設定した。一区画の単位は５ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ・Ｂ）、南北方向は算用数字（北から１～６）で示し、地区の表示は１Ａ区～６Ｂ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ30）・南北線（Ｙ０～Ｙ10）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、地表下0.9ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.2ｍ前後については層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、表土下0.8～1.1ｍ（T.P.＋7.0～6.8ｍ）に存在する第６層上面で、平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期・室町時代中期に比定される土坑５基（ＳＫ－201～ＳＫ－205）、溝７条（ＳＤ－201～ＳＤ－207）を検出した。これらの遺構のほかにこの面で、第２ａ層および第４層を構築面とする近世の井戸６基（ＳＥ－101～ＳＥ－106）、土坑７基（ＳＫ－101～ＳＫ－107）を検出している。ここでは、便宜上両者を区別するため近世の遺構については100番台、その他の遺構については200番台の数字で表記した。また、下層確認調査においては、調査区の中央部を南東－北西方向に伸びる自然河川（ＮＲ－201）が確認されており、自然河川南東部の南岸では流路に沿う形で打設された杭列（杭－201～杭－203）を確認している。遺物は遺構内および第４層・第５層からコンテナ箱に３箱程度が出土している。



第２図　調査区設定図（Ｓ＝1/800）



第３図　検出遺構平断面図

第２節　基本層序

地表下0.9ｍ以下で埋没河川が検出されており、この部分では洪水砂層に特有な細粒砂～粗粒砂を主体とする層相が認められた（第７層）。上層の土層についても第７層の影響を受けたためか、全体に不安定な層相であった。普遍的に存在した10層（第０層～第９層）を抽出して基本層序とした。

第０層　客土。層厚10～50㎝。上面の標高は7.8～7.9ｍ。

第１層　耕作土。N5/0灰色極細粒砂。層厚10㎝前後。一部のみ遺存。

第2a層　2.5Y7/2灰黄色極細粒砂。層厚20～35㎝。近世時期の遺構構築面。

第2b層　2.5Y7/2灰黄色細礫混じり極細粒砂。層厚10～35㎝。調査区の北部で検出。

第３層　10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～細礫。層厚５～25㎝。

第４層　2.5Y6/1黄灰色極細粒砂。細礫を含む。層厚10～30㎝。鎌倉時代～室町時代中期の遺物を少量含む。

第５層　2.5Y6/1黄灰色シルト。層厚10～20㎝。平安時代末期～室町時代中期の遺物を少量含む。

第６層　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト。層厚10～20㎝。遺構検出面。

第７層　N8/0灰白色細粒砂～中粒砂。層厚10～120㎝。自然河川（ＮＲ－201）に関連する洪水砂層。

第８層　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト。層厚10～30㎝。南部のみ存在。

第９層　2.5GY8/1灰白色粘土質シルト。層厚30㎝以上。

第３節　検出遺構と出土遺物

第６層上面では、平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期・室町時代中期に比定される時期の遺構と近世に比定される遺構が検出されている。平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期の遺構は、調査区の北部で検出されており、室町時代中期の遺構は北部から南部にかけて検出されている。近世に比定されるものは、北西端と南東端で検出された井戸を除けば中央部に集中する傾向が認められた。なお、近世の遺構については、概ね第２ａ層（一部第４層）が構築面と推定されるため、形状や数値は本来のものではない。

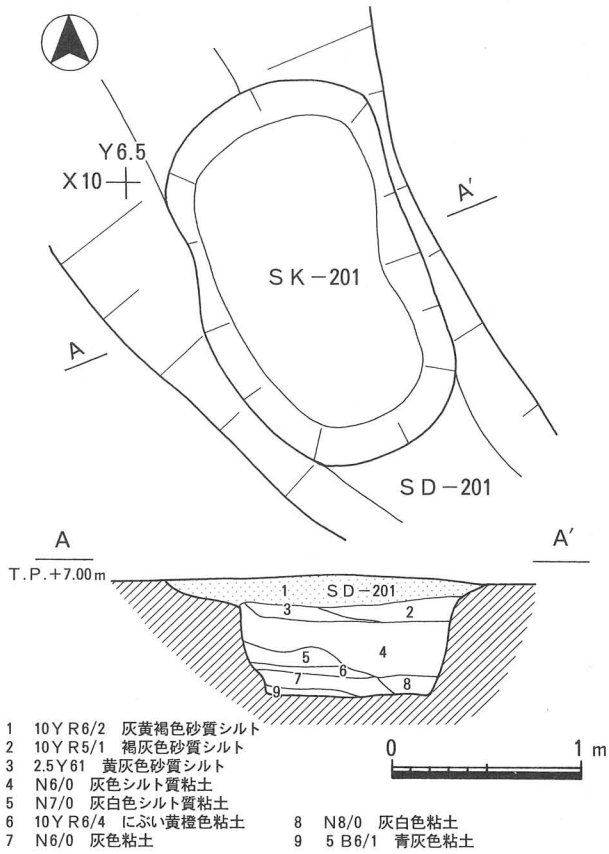
・平安時代末期・鎌倉時代前期・鎌倉時代中期・室町時代中期の遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

２・３Ｂ区で検出した。上部はＳＤ－201に切られている。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.3ｍ、南北幅2.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は９層から成り、上部は砂質シルトを主体としており、下部では粘土を主体とする土層で構成されている。遺物は４層・５層・７層から土師器小皿・土釜、瓦器椀・小皿・足釜、須恵器鉢、白磁碗等の小片が少量出土している。そのうち図化し得たものは11点（１～11）である。内訳は土師器小皿２点（１・２）・土師器中皿１点（３）、瓦器小皿１点（４）・瓦器椀２点（５・６）・瓦器足釜３点（７～９）、須恵器捏鉢１点（10）、平瓦１点（11）である。（１）は平坦な底部から口縁部が外反気味に短く立ち上がる土師器小皿である。器高が低くやや偏平なもので、口縁部の一部を欠く以外は完存している。（２）

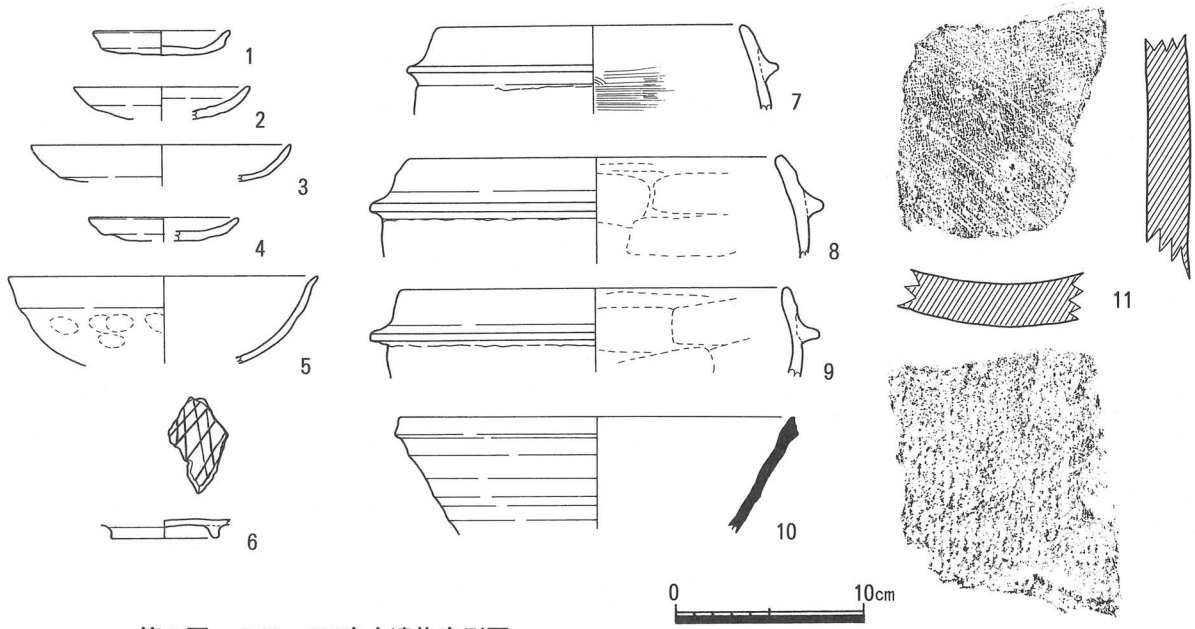
は残存率1/6程度の土師器小皿である。丸味を帯びた底部から口縁部が斜上方へ立ち上がる。（３）は復元口径13.8㎝を測る土師器中皿である。内外面ともに風化のため器壁が剥離している。（４）は器高が低く偏平な器形の瓦器小皿である。復元口径8.0㎝、器高1.2㎝を測る。（５・６）は和泉型に分類される瓦器椀である。（５）は瓦器椀の体部片であるが、全体に器壁面の磨耗が著しく調整等は不明瞭である。（６）は瓦器椀の底部で、見込みに斜格子状の暗文を施文する。（７～９）は三足が付く瓦器足釜で、口縁部の残存率が1/8～1/12程度の小片である。体部と口頸部の境に水平方向に小さく貼り付けられた鍔が付く。本来は瓦器焼成のものであるが、（７）については鍔部以下で炭素付着が認められない。（10）は東播系の須恵器捏鉢である。口縁部外面に重ね焼き痕が認められる。（11）は平瓦片で凹面に粗い布目、凸面に縄目タタキと離れ砂が認められる。二次加熱を受けており、退色した部分や焼け焦げた部分が認められる。出土遺物の帰属時期は、鎌倉時代初頭の12世紀後半～13世紀初頭に比定されよう。



第４図　ＳＫ－201平断面図

ＳＫ－202

３Ｂ区で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.7ｍ、南北幅1.55ｍ、深さ0.7ｍを測る。埋土は一部を除き、ほぼ水平に堆積しており６層に分層でき



第５図　ＳＫ－201出土遺物実測図

る。遺物は中層から下部層にかけて堆積する３層～５層を中心に土師器小皿、瓦器椀、平瓦、常滑焼甕の小片が少量出土したが図化し得たものは無く、時期も判然としない。

ＳＫ－203

３Ｂ区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.1ｍ、南北幅0.4ｍ、深さ0.22ｍを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ－204

６Ａ区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.75ｍ、南北幅1.15ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は灰黄褐色極細粒砂～中粒砂の単一層である。遺物は瓦器椀の小片が１点出土したのみで時期は明確でない。

ＳＫ－205

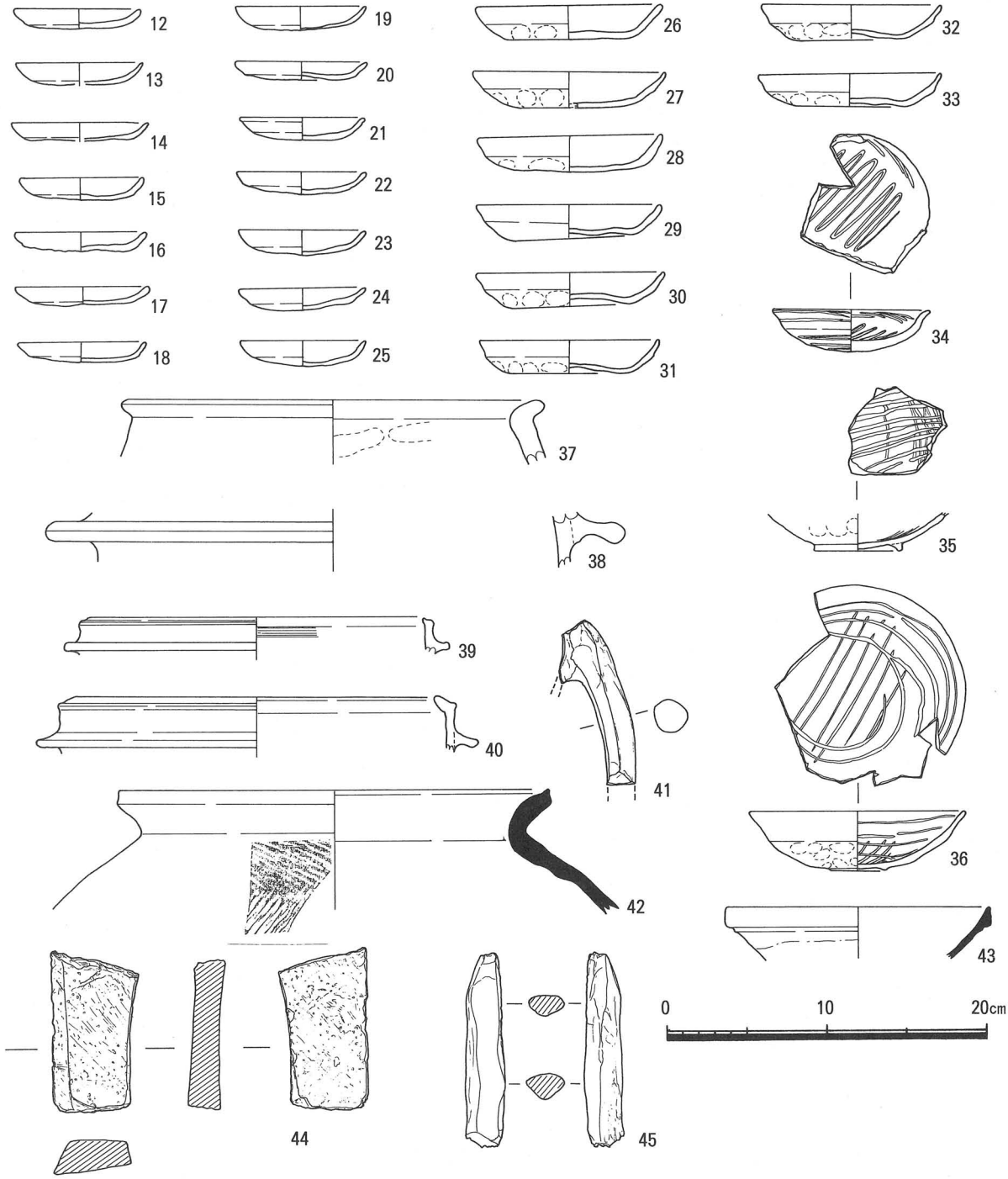
５・６Ａ区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.5ｍ、南北幅1.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は灰黄褐色極細粒砂～中粒砂の単一層である。遺物は土師器小皿、瓦器椀の小片等が極少量出土したのみで時期は明確でない。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201

調査区北部の２Ａ・１～３Ｂ地区で検出した。当初、ＳＤ－201・ＳＤ－202を含めて大規模な土坑と認識して掘削していたが、調査の結果、重複した２本の溝であることが判明した。東側をＳＤ－201、西側をＳＤ－202と呼称した。ＳＤ－201は南北方向に伸びた後、屈曲して流路を北東方向に変えるもので、ＳＫ－201・ＳＤ－202を切っている。検出部分で検出長10.2m、幅1.5m、深さ0.5ｍを測る。埋土は４層から成る。遺物は土師器小皿・中皿・土釜、瓦器椀、須恵器鉢が出土している。なお、溝内北部では土師器小皿・中皿が集中して出土する部分が認められた。34点（12～45）を図化した。その内訳は、土師器小皿14点（12～25）・土師器中皿８点（26～33）、瓦器小皿１点（34）・瓦器椀２点（35・36）、土師器土釜３点（37・38・40）、瓦器足釜１点（41）・瓦器土釜１点（39）、須恵器甕１点（42）、白磁碗１点（43）、砥石２点（44・45）である。土師器小皿は14点（12～25）を図化した。（12～14）が1/2程度の残存である以外は完形ないしは完形に近い。口径7.8～8.6㎝、器高1.1～1.5㎝を測る。全体に器高が低く偏平のうえ、成形が雑で歪んだ器形ものが大半を占める。器形の特徴では、底部がほぼ水平なもの（12～19）、底部が上げ底のもの（20）、底部が丸味を持つもの（21～25）に区別される。口縁部は斜上方に内彎気味ないしは直線的に伸びており、ヨコナデが強く行われる（18・20）については口縁部と底部の境に段を有する。胎土は概ね精良で、色調は（15）が灰白色である以外はにぶい褐色を呈する。土師器中皿は８点（26～33）図化した。完形あるいは完形に近いもので、口径11.2～12.1㎝、器高2.1～2.3㎝を測る。水平ないしは上げ底の底部から斜上方に口縁部が伸びるもので、口縁部外面は強いヨコナデにより口縁部と体部を区別している。精良な胎土が使用されており、焼成は良好で色調は（26）がにぶい黄橙色、（27～33）がにぶい橙色である。（34）は丸味を持つ底部から口縁部が外反して伸びる瓦器小皿である。全体に丁寧な作りで、見込みにジグザグ暗文、外面底部に一定方向の密なヘラミガキが施されている。12世紀前半のものと考えられ、遺構存続時期以前のものと考えられる。（35・36）は和泉型の瓦器椀である。（35）は見込みに平行線状の暗文が施文されている。（36）は偏平な体部に形骸化した貼り付け高台が付くもので、内面は見込みに平行

線状暗文、体部に粗い圏線状暗文が施されている。（37・38・40）は土師器土釜の小片である。（37）の口縁部内面には炭化物が付着している。（40）は鍔部から直立して立ち上がるもので、口縁端部は大きく内折して丸味のある端部を作る。全体に丁寧な作りのもので、菅原氏分類の大和型Ｈ3型式にあたる。（39）は瓦器土釜で、鍔は水平方向に小さく貼り付けられている。菅原正明氏分類（以下菅原氏分類）の山城Ｆ型に分類される。（41）は三足が付く足釜の脚の部分である。（42）は東播系の須恵器甕である。（43）は玉縁状口縁を有する中国産白磁碗である。横田賢次郎・森田勉氏分類の白磁碗Ⅳ－２にあたるもので、11世紀中葉～12世紀初頭の所産とされている。

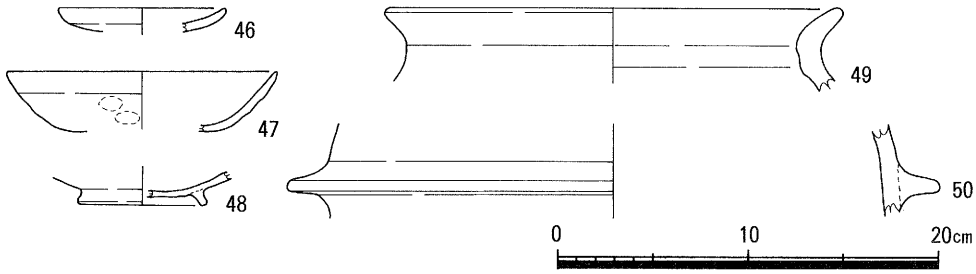


第６図　ＳＤ－201出土遺物実測図

(44・45) は砥石である。(44) は長さ10.1㎝、最大幅5.6㎝、厚さ2.0㎝を測る板状のもので、4面に使用面がある。(45) は棒状のもので、長さ12.2㎝、幅2.9㎝、厚さ1.7㎝を測る。3面に使用面がある。石材は (44) が流紋岩、(45) が粘板岩である。出土遺物の帰属時期は、一部、先行する夾雑遺物の存在を除けば、概ね13世紀中葉に比定される。

ＳＤ－202

1・2Ａ・Ｂ地区で検出した。南東－北西方向に伸びるもので、南部がＳＤ－201に切られている。検出長5.5m、幅1.0～4.0m、深さ0.4mを測る。埋土はシルト質粘土を主体とする4層から成る。遺物は土師器小皿、瓦器椀等の小片が少量出土している。5点 (46～50) を図化した。その内訳は土師器小皿1点 (46)・土師器中皿1点 (47)・土師器土釜2点 (49・50)、瓦器椀1点 (48) である。(46) は土師器小皿で残存率は1/8程度の小片である。にぶい橙色の色調で、胎土は精良で焼成は良好である。(47) は深目の体部を有する土師器中皿である。(48) は和泉型の瓦器椀で高台は高く「ハ」の字状に貼り付けられている。見込みは風化のため暗文は不明瞭である。12世紀前半の所産であろう。(49・50) は土師器土釜の小片である。2点ともに風化のため調整は不明瞭である。出土遺物の帰属時期は概ね12世紀前半～中葉に比定されよう。



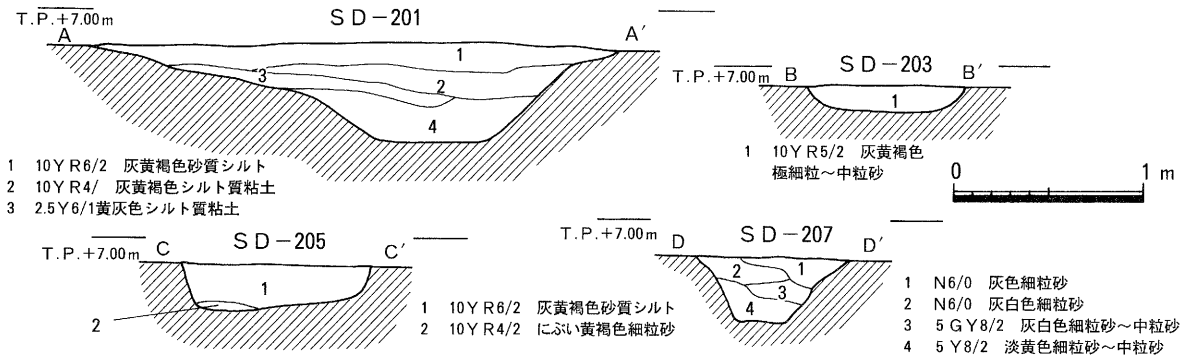
第7図　ＳＤ－202出土遺物実測図

ＳＤ－203

2・3Ａ・Ｂ地区で検出した。ＳＤ－202の西に平行して伸びるもので、ＳＤ－204を切っている。検出長7.0m、幅0.5～1.25m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色極細粒砂～中粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ－204

3Ｂ地区で検出した。北部がＳＤ－203に切られている。検出長2.7m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は灰黄褐色極細粒砂～中粒砂の単一層である。遺物は出土していない。



第8図　ＳＤ－201・ＳＤ－203・ＳＤ－205・ＳＤ－207断面図

ＳＤ－205

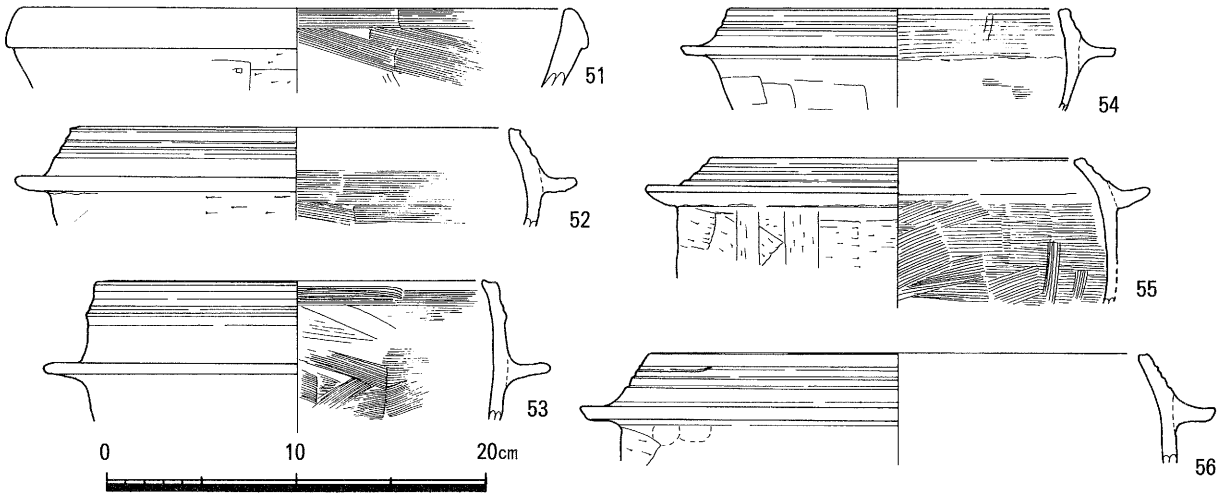
２～４Ａ区で検出した。調査区の西部で検出した。南北方向に伸びるもので、南端がＳＤ－207に切られている。検出部分で検出長10.8ｍ、幅1.1ｍ以上、深さ0.25ｍを測る。埋土は上層が灰黄褐色砂質シルト、下層がにぶい黄褐色細粒砂である。遺物は土師器小皿・土師器土釜、瓦器摺鉢・瓦器土釜、青磁碗の小片が少量出土している。そのうち図化し得たものは瓦器摺鉢１点（51）、瓦器土釜１点（52）の２点である。（51）は玉縁状の口縁部を有する。（52）は内傾する口縁部に３条の段を有する瓦器土釜である。森島康雄氏分類（以下、森島分類）のＥ型式にあたる。遺物の帰属時期は15世紀前半に比定されよう。

ＳＤ－206

４Ａ・Ｂ区で検出した。ＮＲ－201の埋没後に構築されている。南西－北東方向に伸びるもので、ＳＫ－103およびＳＫ－105に一部切られている。検出長3.5ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色細粒砂の単一層である。遺物は土師器小皿・土師器土釜、平瓦の小片が極少量出土している。土釜３点（53～55）を図化した。３点ともに土師質焼成である。（53）は口縁部が長く立ち上がる形態の土師器土釜で森島分類のＧ型式にあたる。（54・55）は内傾する口縁部に３条の段を有する土釜で森島分類のＥ型式にあたる。15世紀前半の所産と考えられる。

ＳＤ－207

調査区の南部で検出した。小さく蛇行を繰り返し溝幅を増減しながら、北西－南東方向に伸びる。検出長10.0ｍ、幅0.6～2.7ｍ、深さ0.38ｍを測る。埋土は細粒砂～中粒砂を主体とする４層から成る。遺物は土師器小皿・土師器土釜、瓦器土釜、平瓦の小片が出土している。瓦器土釜１点（56）を図化した。（56）は内傾する口縁部に３条の段を有する瓦器土釜である。鍔部の先端の大半が欠損している。15世紀前半の所産と考えられる。



第９図　ＳＤ－205～ＳＤ－207出土遺物実測図

・近世の遺構

第６層上面で検出した近世時期の遺構群については、本来の構築面が第２ａ層および第４層上面であることから、形状ならび数値は不明瞭であるため、全体の概略を記するにとどめる。

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－101～ＳＥ－106

井戸は６基（ＳＥ－101～ＳＥ－106）検出した。第２ａ層上面を構築面とする（ＳＥ－101～ＳＥ－105）と第４層上面を構築面とする（ＳＥ－106）がある。６基検出したなかで、掘形の全容が確認できたのはＳＥ－103・ＳＥ－104の２基にすぎないが、検出部分からみて概ね円形および楕円形の掘形を呈するものと推定される。規模は検出部分で1.2～1.5ｍを測るものと、2.6ｍ以上を測る大型のものがあり、これらの違いは設置された井戸側の種類に左右されたものと考えられる。井戸の深度については、1.5ｍ以上を測るものが大半で、最下層は湧水層である細粒砂層に達している。井戸側については、ＳＥ－104から竹製の箍（たが）が出土していることから、桶を井戸側に使用したものと推定される。ＳＥ－102については、縦板横桟組みの井戸側の一部が確認されていることから、縦板横桟組みと上部が瓦質の井戸側を用いた構造の井戸であった可能性が高い。井戸の形態や遺構構築面と耕土層の関係から、農耕用の井戸であったと推定される。遺物はＳＥ－103から肥前焼系の碗、平瓦の小片が極少量出土したほか、他の井戸からも遺物が極少量出土しているが、大半が構築時期以前に比定される夾雑遺物である。なお、井戸の分布に符合する形で下層確認調査では、自然河川（ＮＲ－201）が検出されており、これらの水脈に沿って構築されていたことが窺える。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－101～ＳＫ－107

７基（ＳＫ－101～ＳＫ－107）を検出した。４Ａ・Ｂ区に集中して分布している。平面形状は円形・楕円形・不定形に区別される。検出部分で幅0.5～1.5ｍ、深さ0.05～0.2ｍを測る。埋土はＳＫ－107が灰色砂質シルトのほかは、明緑灰色砂質シルトの単一層である。農耕用の井戸と推定されるＳＥ－103およびＳＥ－104の周辺で検出されていることから、農事に関連する遺構であったものと考えられる。

・下層確認調査

下層確認調査では、自然河川（ＮＲ－201）と護岸に設置された杭列を５Ｂ区で確認した。ＮＲ－201は調査区の南東－北西方向に流路をもつもので、幅は5.0ｍ以上、深さ約1.3ｍ以上を測る。埋土は灰白色中粒砂～粗粒砂で充填されており、流勢の強い河川であったことが想定される。杭列は３本の杭（杭－201～杭－203）がＮＲ－201の南岸に沿って設置されている。そのうち杭－201、杭－202が転用材の角材（杭－201が幅９㎝×25㎝×長さ119㎝以上、杭－202が幅９㎝×13㎝×長さ92㎝以上）で、杭－203は半裁された木材（幅10㎝×23㎝×長さ107㎝以上）が使用されている。なお、自然河川の下部からは13世紀前半迄の遺物が出土しており、北部で検出したＳＫ201・ＳＤ－201は河川機能時の一時期に併存していた可能性がある。

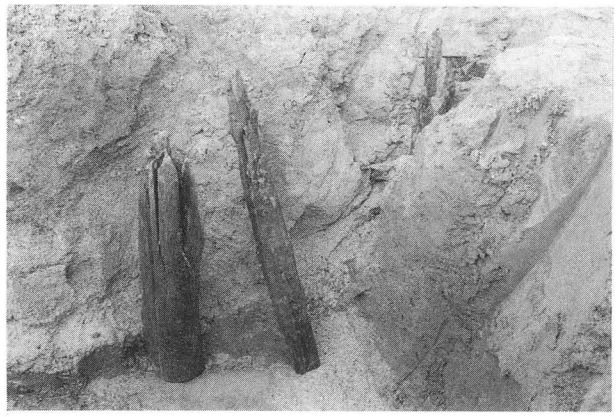


写真１　杭－201～杭－203検出状況（南西から）